

Dotted bridal veil

天葵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔神族〈十戒〉の復活と同時に現世に現れた一人の少女。

彼女は〈七つの大罪〉の団長である〈憤怒の罪〉ドラゴン・シンメリオダスの妹だった。

慚愧の念を抱えて、少女は歩み出す。

届かなかった手を、今度こそ――

目次

第1話／目醒め	1
第2話／目醒め	9
第3話／叛逆の嚆矢	18
第4話／いざ聖地へ	38
第5話／不穩の兆し	54
第6話／救えていた、救われた	67
第7話／バイゼル大喧嘩祭り、開始	96
第8話／心の内	113
第9話／打ち碎かれる希望	130
第10話／潜むモノ	147
第11話／今在るもの	161

第12話／燃え上がる赫怒	177
悲哀	177
第13話／繰り返される痛み	192
第14話／誓い	212
第15話／思案	226
第16話／一時の休息	239
第17話／呪われし女神	258
第18話／進行、激突、そして	275
第19話／太陽vs深淵	294
第20話／兄妹喧嘩	307

第1話／目醒め

離れていく背中に手を伸ばした。

待って——なんて言う暇もなく、背中は遠ざかっていく。

指先は虚しく宙を泳ぎ、その場に一人取り残される。

——ふと顔を上げれば、眩しさに思わず目を細めた。

「——」

言葉にならない。

羨ましい。

喜ばしい。

妬ましい。

様々な感情が緋い交ぜになり、激情が荒れ狂う。

ただ拳を握ることしかできなかつた。

膝から崩れ落ち、込み上げてくる感情を押し殺す。

——結局最後まで、半端なままだつた。



ばかり、と空間に紫電が弾ける。初めは小さな静電気程度のものだつたそれは、やがて激しさを増し、迸る。

次いで、空間が縦に裂ける。隙間から見える向こう側に存在するのは、闇一色の不気味な世界。さらにその向こうには、およそまともな生物とは思えないほどの、強大な気配。

その目前に立つは、異形の男。人ならざるモノの血を取り込み、人外へと昇華した元人間——ヘンドリクセン。

裂け目が光を放つ。それは一瞬のうちに膨張し、津波の如き勢いでヘンドリクセンへ降りかかる。

「、——！」
言葉を紡ぐ。封印の解放に際して放出される莫大な光にその身を焦がしながらも、決して止まることはない。

一際強く裂け目が輝き、封印が綻んだ。残る力全てを捧げ、最後の一節を叫ぶ。

「消え、よ、無垢なる、呪い！」

刹那、空間が極光に塗り潰された。歓喜の表情を浮かべたヘンドリクセンはそのまま光に吞まれる。

その際、魔に属する肉体を獲得してしまつたが故に莫大な光の魔力に耐えきることができず、光はその肉体を侵食する邪悪な部分のみを消しとばした。その場に崩れ落ちたヘンドリクセンの肉体は元の、真正正銘人間のものへと遡行した。

人ならざる異形の血とはいえ、下位個体程度のモノでは到底耐えきれなかつたのだらう。薄目を開けたまま空をぼうつと見上げるヘンドリクセンの瞳には、人間らしい理性の色が見える。

そんなヘンドリクセンの側に、一人の男が姿を現す。

その姿に見覚えがあつた。だからこそ、信じられなかつた。

「ご苦労だつたな。封印は解かれた。その労に免じて、お前は生かしておいてやろう」

「ドレフアス……？　何を言ってる……その目と額の紋様は……？」

良き友人でもあり師匠でもあった、自分と並んでリオネス王国元・聖騎士長だった男。
——ドレフアスその人だったのだから。

しかし、靄がかかったようにうまく回らない頭でも理解できる。
目の前の男が、ドレフアスでは無いことを。

(この男は……コレは、一体何だ!?)

気味が悪い。ドレフアスの皮を被ったコレは一体……。

ゆつくりと回転し始める思考はしかし、次の瞬間に再び錆びつく。

——相対するドレフアス^何の背後から複数の黒い影が飛び出す。

それは本来ならば、3000年前の大戦以降決して現世へ姿を見せないはずの者達。
心臓を直接鷲掴みにされているかのような圧迫感、一目見ただけで呼吸すらままた
らなくなるほどだ。

それぞれ容姿こそ異なるものの、発する気配はそのどれもが尋常ではなかった。

彼らの名は〈十戒〉

魔神の王へ仕える、直属の精鋭部隊。

恐怖と災厄を象徴する怪物たちが、今蘇った。

裏切り者への憎悪を燻らせ、戒めたちは動き出す。

同時刻、リオネス王国にて。

七人の凶悪な大罪人から構成された最強の騎士団——〈七つの大罪〉は、波乱を含んだ勲章授与を終え、雑談を交えながら城下町を歩いていた。

「ねえ団長、王様の予言……なにかわかった？」

「さてさてさーて？ わかっているのは、カメラロットで何かデカイことが起こる、つてことだけだ。肝心なこととはなーんにも」

「ふむ、いざというときの対策はしておくべきか？」

「フツ、なにが起ころうともこのホーク様にかかればちよちよいのちよいよ！」

一人は30フィートにも及ぶ巨軀を持つ巨人族の少女——〈嫉妬の罪^{サイベント・シン}〉のデイアンヌ。

一人は人形のように整った中性的な容姿の青年——〈色欲の罪〉^{ゴート・シン}のゴウセル。

一人は妖艶な、常人ならざる雰囲気を纏う妙齡の女性——〈暴食の罪〉^{ホア・シン}のマーリン。

一人は小柄でありながらも、大人びた雰囲気の少年——〈七つの大罪〉団長、^{ドラゴン・シン}〈憤怒の罪〉のメリオダス。

現在この場にいる団員はこの四名。彼らと並んでいる人語を解する謎の豚——ホークは残飯処理騎士団という架空の騎士団の団長を務めている。

彼らへ七つの大罪〉は魔に堕ちた元聖騎士長・ヘンドリックセンを討ち、リオネス王国を未曾有の危機から救った英雄たちだ。彼らは十年前、王国転覆の罪により王国から追われていた。真実は、魔に堕ちたヘンドリックセンの画策によるものだったのだが。

今回の件によって各地に散り散りになっていた〈七つの大罪〉は〈傲慢の罪〉^{ライオン・シン}を除き集結した……のだが。〈怠惰の罪〉^{グリスリー・シン}のキングと〈強欲の罪〉^{フォックス・シン}のバンは、姿を消していた。

「しっかし、バンたちは一体なにを考えてんだ？」

「さてな。……しかし、バンだけならまだしも、キングも同時に姿を消すとは妙なことが」

「……そうだね。キングだったら、どこにいつちやっただら……」

「バンがいなくなったことにより、豚の帽子亭の利益は200%ダウンだ」

「ぶきやー！ またメリオダスの残飯食わなきゃなんねえのかよー！」

「おい、今なんて言った豚野郎」

そうして歩いていると、突如王国——いや、大陸が大きく振動する。

「のわー！　なんだこの振動!?!」

「東の方角から凄まじい波動が伝わってくる……これは……!」

「な、なに!?!」

混乱は混乱を呼ぶ。未知なる振動に対し、団員たちは警戒態勢を取る。

振動は徐々に小さくなっていき、最終的に何事も無かったかのように静けさを取り戻す。

「な、なんだったんだ一体……。ん？　どうしたよメリオダス。柄にもなくビビっちゃまったのか？」

「……団長の様子が変だな」

ゴウセルの言葉通り、普段はあまり感情を表に出さないメリオダスが、荒れ狂う激情を抑えつけるために拳を強く握っている。

「あいつらが、目醒めたのか……!」

血を吐くように、重々しく。短い言葉だったが、それだけで団員たちはそれほどまで
の事態だということを嫌というほど理解させられた。

運命の歯車が、動き出す――。



――どこか遠く、人の寄り付かない空洞。

王の血筋でありながら、戒めを拒絶した者の封印が今、解かれようとしていた。

第2話／目醒め I I

とある空洞の最奥。本能的に足が竦むような威圧感と粘りつくような怖気が漂うその空間の一部に、小さな罅が入る。

ピシリ、という音と共に罅は徐々に拡大し、黒い炎が漏れ出す。炎は蛇のようになり、縦横無尽に宙を駆ける。

「——これですか」

凜とした声が響く。発生源は——空間の罅。

その声に呼応するように、炎は壁に埋め込まれた宝石に食らいつく。瞬く間に宝石は蒸発し、声の主は罅割れた空間から軽やかに抜け出した。

「む、魔力が……封印の影響ですか……」

気怠さに包まれた体を見下ろし、小さく腕を振る少女。

「……まあ良いです。私が脱出できたということは、あの人たちも復活しているという

こと。——はあ……面倒なことになりそうです……」

小さく溜息を零す少女。その顔には、関わりたくない、という感情が強く押し出されている。

「……あちらの対応次第、ですかね。流石に同族を手に掛けるのは心が痛みますし。うん、そうしましょう」

そうして一人でブツブツと呟きながら空洞を抜けると、その先の光景に少女は目を見張る。

「一体、何年眠っていたのでしょうか……」

少女は、戦火に包まれていたのが嘘のように広がる豊かな自然を見渡す。耳を澄ませば鳥の鳴き声が聞こえる。目を凝らせば優しく触れ合う動物たちが見える。

悲鳴も、慟哭も聞こえない。それはつまり、この地に平和が訪れた証拠だった。その事実には少女は笑みを浮かべる。上機嫌に進むその足取りは軽い。

生命の力強い息吹を感じられるこの場所は、少女にとって心地よいものだった。しかし、上機嫌だったその足が止まる。

「この、気配は」

感じる。懐かしい魔力を。これは——

「兄、様？」

掠れた声が漏れる。敬愛する兄が生きているということに、少女は歓喜する。

同時に、憤怒に顔を歪める。

「父様——いえ、魔神王。アレは、本当だったのですね」

ギリツ、と。砕けんばかりに奥歯を噛み締め、父への憎悪が湧き出る。今すぐにも切り殺してやりたくなるほど、堪え難い。

だが、その感情よりも優先するべき事態が起こる。

兄の魔力が急激に高まったかと思えば、次の瞬間には空気の抜けた風船のように萎んだのだ。そしてすぐ近くには、見知った気配。

「っ、いけない!」

なりふり構わず、少女は翼を形成し飛び上がり、自身の出せる最高速度で兄の元へ向かった。



時は少し遡り。

〈豚の帽子〉亭にて。

マーリンの絶対強制解除により元人形の姿に戻ったゴウセルを囲むようにして

ドリン・ロアー
暁闇の咆哮のスレイダーと〈七つの大罪〉は相対していた。

ゴウセルとバン、キングが抜けた穴をスレイダーが埋めてくれないか、というメリオダスの頼みは快諾され、今後スレイダーは七つの大罪と行動をともにすることになった。

事の顛末を見ていたエリザベスは、納得のいかない表情でメリオダスに訴えかける。

「——つ、メリオダス様！　どうか私も同行させてください！」

「駄目だ。リオネスを守る戦いは終わったんだ。これ以上をお前を危機に晒すわけにはいかねえ」

「……私は、足手纏いの……お荷物にしかならないんですか……？」

「そのとおり！」

堂々とそう言い放つと、ディアンヌの拳がメリオダスに叩き込まれ、次にホークの蹴りが炸裂した。

メリオダスの伝え方も伝え方だが、その意図を汲み取れないディアンヌとホーク。普段はおちやらけているが、その実エリザベスのことを人一倍考えているが故の言動だった。

冷たい床をたつぷり堪能したメリオダスはやおら立ち上がると、小さく息を吐いて側にあつた椅子に腰を下ろした。

(さて……キヤメロットの状況を確認するか)

そのやり取りを一通り眺めていたマーリンは、ひと段落ついたことを察したのか、球体状の神器——明星 アルダンを出現させる。

直後、アルダンが何かを報せるように甲高い音が発せられた。

「ハ」の音は？」

「……当初の予定を変更、ただちにキヤメロットへ向かうぞ。キヤメロット付近で異常な魔力の動きが確認された」

「マーリン、一体何が——」

メリオダスの言葉を遮り、現状確認もままならないまま、〈豚の帽子〉亭はその場から消えた。



キヤメロット。

新王アーサーの治めるこの王国は現在、未曾有の危機に瀕していた。

山のような体軀を誇る化け物が突如として現れ、今にもキヤメロットを滅ぼさんとしているのだ。

聖騎士たちは民間人の避難を終えたところだった。

アーサーは拳を握り、力強く宣言する。

「聖騎士に告ぐ！ 遠距離魔力の聖騎士は対象物を囲むよう散開せよ！ 近距離魔力の

聖騎士は私と共に正面で構えろ！ これより謎の巨人を迎え討つ！」

そう告げた直後、聖騎士の一人が声を上げる。

「……アーサー様！ 上空に謎の飛行物体を確認しました！ 鳥のような……いや……

アレは……」

「牛……？」

空を見上げその巨大な影をみて怪訝そうに呟く。やがてその正体が見えてくると、聖

騎士たちは驚愕の声を上げる。

「空飛ぶ——豚!?!」

巨大な緑の豚は、英雄たちの到着を報せるように、大きく鳴いた。

巨獣アルビオン。〈十戒〉の復活と共に目醒めた、古の大戦にて魔神族に造られた兵器。その巨体故動きは鈍重だが、力と耐久はとてつもない。

生半可な攻撃では傷をつけることすら敵わずアーサー率いる聖騎士と七つの大罪を

以ってしても攻めあぐねていた。

そんなとき、メリオダスが店を建てるための軍資金として売り払った神器ロストヴェインがメリオダスの手に戻り、神器の特性を利用してアルビオンの上半身を消しとばした。

ロストヴェインの特性とは、使用者の闘級を半分として実像を伴う分身を作り出すこと。分身が多ければ多いほど闘級は下がっていくが、メリオダスの『フルカウター全反撃』はほぼゼロの力で跳ね返すため、メリオダスにうってつけの神器なのだ。

「へ十戒」……そのような者たちが……」

「正直言って、かなり不味い状態だ。早急に対策を練らねえとな……ん？ どうした？ マーリン」

メリオダスは、アーサーに事情を説明している傍らで怪訝そうな表情を浮かべている。マーリンに声をかける。

「いや……国王の予言が少し気にかかってな……」

山の如き獣が目醒め

三人の英雄が立ち向かい

闇が大地に大穴を穿つ

「山の如き獣とはアルビオンのことだと思ったのだが、それでは後半の文言の意味が……」

辻褄が合わない。

闇が大地に大穴を穿つとは、一体何を指しているのか――。

その思考を遮るように、遠方から雷のような音が耳に入る。しかし今は晴天であり、雨雲は見えない。

疑問を抱く人々の間で様々な憶測が飛び交う。

――刹那、雲を突き抜け、”ソレ”はやってきた。

押し潰されるような、重厚な威圧。

歴戦の実力者であろうとも、思わず身を強張らせてしまう。一步でも動けば、その瞬間自分は消し飛んでいる、そんな予感すらしている。

砂塵の中から姿を現したのは、赤い鎧を纏った、見上げるような背丈の人物だった。

「ふむ……七十二歩か。この距離なら七十歩で届くと思うだが……三千年の間になまったものよ」

顎に手を当て、そう呟く。発せられた声色から、その人物が老齢に達しているだろう

ことが察せる。

「お前は……〈十戒〉のガラン！」

「久しいなメリオダス。やはり儂の予想通りお前さんじゃったか」

カツハツハツ、と軽い口調で笑う老人——ガラン。

そんなガランを見たホークは、声を震わせながらマーリンへ告げる。

「なあマーリン、この魔眼壊れちまつてるぜ……？」

「何？」

「だってよ、おかしいだろ。——闘級2万60000つて」

あの巨獣アルビオンでも、闘級は5500程度だった。だが眼前の老人はその五倍近い数値を誇る——正真正銘の化け物だった。

第3話／叛逆の嚆矢

「三千年の間封印されていた魔神族……十戒のガラン……」

「か、体が震えが止まらねえ……なんなんだよアレ……！」

「早く……住民を避難させねば……！」

阿鼻叫喚を極めたキヤメロット。本来こういった災害から民を守る聖騎士も、今回ばかりは訳が違った。蛮族や獣とは、生物としての格が違うのだ。それこそ指先一つで人間程度、簡単に殺害してみせるだろう。

「確かに想像以上の闘級だが……妙だな……。ホーク殿、奴の魔力はいくつだ？」

「魔力？ ……なんだよこれ！ 魔力ゼロ！ 本格的にぶっ壊れてるぜこの魔眼！」

「なるほど……恐らくは女神族の封印の影響か……」

「つまり、叩くなら今しかないってこと……？」

マーリンのこぼした言葉に反応するディアンヌ。体を震わせながらも、神器である戦

槌ギデオンを強く握り戦意で恐怖を誤魔化す。

ガランの一举手一投足に意識を集中させる。瞬きの間に殺される可能性さえあるのだ。緊張と恐怖で固まる体を叱咤し、各々武器を構える。

興味無さげにその光景を一瞥すると、メリオダスたちではなく、その奥——キヤメロットの民が住む家々に目を向けた。

「……ここが人間共の巣か。多少は進歩したようじゃが、うじゃうじゃと群れる習性は変わっておらんか」

一通り街を眺め、ふむ、と声を漏らす。

「——狭いな」

絶大な破壊の波がキヤメロットを蹂躪する。虫でも払うかのような動作とは裏腹に、その威力は人知を超えていた。

建物も、人も、何もかもが消し飛んだ。

一瞬で瓦解したキヤメロットを目の当たりにして戦慄く聖騎士たち。

まさしく怪物。魔の神に相応しい圧倒的暴力。

聖騎士たちの心は完膚なきまでに押し折られ、そこに残ったのは死を待つだけの哀れな人だった。

「これで少し、動きやすくなったか」

愉快そうに笑いを飛ばし、ゆつくりと振り向く。視線はメリオダスに向けられている。

「さてと……メリオダス、お前さんとは一度手合わせをしたいと思っておった」

直々の指名。即座にその場から飛び出し、ロストヴェインを振るう。首を落とすつもりで振るったが、擦り傷にすらならなかった。僅かに仰け反りはしたが、次の瞬間にはガランのハルバードがメリオダスの腹を貫いていた。

獲った、と確信するよりも早く、二人のメリオダスが飛びかかる。ハルバードを振るい掻き消すが――

（この妙な手応え……残像……いや、実像を伴う残像か）

神器ロストヴェインの特性である実像分身を瞬時に見破り、次のメリオダスが仕掛けてくるであろう所を予測する。

「後ろ――と見せかけて上か」

的確に本体を見抜き、リーチの差を利用して首を締め上げる。背後の分身は必死にロストヴェインを振るうが、ただでさえ本体より闘級が低い分身であることが災いし、小突くような一撃で消滅してしまう。

なんとか抜け出そうともがくが、万力の如く締め付ける魔手はゆつくりと力を増していく。圧迫された首がミシミシと音を立てる。

「かつ……」

死を幻視する。

食いしばった歯の隙間から命のカケラが零れ落ちる。暗んでいく視界。直後に耳に届いたのは、勇気を振り絞った少女の声だった。

「——団長を、離せっ！」

”マジックキャンセル魔力解除”、”アポルト物体転移”

ディアンヌにかけられた魔力が解かれ、肉体は元の大きさへ戻る。巨人族専用の衣装とギデオオンがディアンヌの元へ転移し、同時にギデオオンを大きく振りかぶる。

「はあっ！」

渾身の力を込めてギデオオンを振り下ろす。巨人族の並外れた武力から放たれる一撃の威力は底知れず。

「カアッ！」

しかし、大地を割るほどの威力でさえも、ガランにとっては兎戯に等しい。一瞥もせずギデオオンを蹴り返し、勢いに乗った打撃面がディアンヌの額を打ち抜く。衝撃で一瞬意識が飛び、軽い脳震盪を起こしたのか派手に倒れる。

（想定を遥かに超える戦力差……！）

「一旦作戦を立て直すぞ！」

言葉と共に指を鳴らし、ガランに向けて魔法を発動。瞬時にその姿が掻き消え、拘束されていたメリオダスが解放される。

「ディアンヌ……無事か……！」

「ぐうう……っ」

「き、消えた……？」

「お姉様の瞬間移動よ」

「——いや、違う。私が消したのではない。奴は数マイルに及ぶ私の魔力圏内から一瞬で跳躍し離脱したのだ」

安堵したのも束の間。ガランがマーリンの背後に現れる。その語気は苛立ちからか荒い。

「お前さんのような小賢しい魔術士が一番嫌いなんじやよ、儂は」

「マーリン！ 逃げろ！」

アーサーがそう叫ぶも、既にガランは目と鼻の先。硬直するマーリンに、ガランは拳を振るう。

——回避、不可能。

——防御、不可能。

拳は目前。掠るだけでも、魔術士の貧弱な肉体では耐えきれないだろう。

死の直前、マーリンとガランの間にスレイダーが割り込む。

”威^{オーバー}圧^{パワー}!”

スレイダーの魔力は、威圧を浴びた相手の身体の反応を鈍らせ、動きを封じるもの。かつてメリオダスにも通じた魔力だが、果たしてガランには通用しなかった。

魔力抜きの特異な威圧がスレイダーの威圧を塗り潰す。山の如きそれを真正面から浴びて、本能的に硬直するスレイダー。

標的を変えた拳が振り抜かれ、鈍い音を立ててスレイダーが吹き飛ばされる。ともすれば即死していたかもしれない拳打を受けて生きていたのは、奇跡としか言いようがない。或いは、ガランが甚振るために加減を加えたのだろうか。

このままではこの場で全滅する。

かつてない危機に焦燥が募るが、なんとか内心に押し込め、不敵に笑う。

「待て、取引といこう」

「ほう……?」

「十戒のガラン、貴殿の手並みと強さは想定以上だった。……なあガラン殿。貴殿がそ

の気になれば、我らを殺すことなど容易かろう。どうだろう、ここは一度引いてもらえないか？」

（10秒で考えろ！ 全員で無事にやり過ぎし、これ以上カメラロットに被害を与えず、ガラン退却させる方法を！）

「代わりに私は貴殿らの最も欲するものを用意しよう。私なら用立てることが——」
ガランという災害をやりすぎすために、マーリンは虚偽を口にした。

——してしまった。

「駄目だ、マーリン……！ ガランには……」

心臓が強く鼓動する。それを起点に呪いが発動し、マーリンの体を侵食する。
体に錆び付いたような感覚を覚える。しまった、と思つた時には遅かつた。

「お主、嘘をついたな」

——ぱきん、と。あまりに呆気ない音を立てて、マーリンの肉体は石と化した。

「マーリン！」

「マーリン様が……石に……!?!」

これこそがガランをへ十戒へ足らしめる力。

「——儂はへ十戒へ、『真実』のガラン！ 儂の前で偽りを口にすれば、何人だろうとその

身は石と化す！」

魔神の王より与えられし戒禁に抗う術は無し。

拳を握り、石化したマーリンへ死を宣告する。

「さあ、粉々に砕け散れい！」

「やめろ……！ やめてくれ——！」

アーサーの慟哭を嘲笑うかのように拳打を放つ直前、メリオダスがガランに斬りかかる。その瞳は漆黒に染まり、額には同色の痣が浮かび上がっていた。

「おおっ!? メリオダスの闘級が4400に!?」

マーリンの作成した魔道具^{マジックアイテム}、バロールの魔眼を所有しているホークから驚愕の声が上がった。

その隙にスレイダーが石化したマーリンを抱え、戦いの余波が届かない場所へ離脱する。

「メリオダス殿に続け——！」

勝機がある。そう判断した聖騎士たちは奮起し、一斉にガランへ突撃する。

しかしそれは勇気ではなく、ただの無謀だった。

蟻が核兵器に抗えるか？

人間が生身で大海を制覇できるか？

そういう次元なのだ。当然蟻は消し飛ぶし、人間は海の生物に殺されるか、荒波に揉まれて溺死するだろう。

聖騎士とはいえ、ただの人間。古の大戦を生き抜いた上位魔神族に対抗できるわけがない。

だからこれは、当然の結果で、当たり前のことだ。

「——あ？」

斬撃の嵐とでも形容すべきだろうか。一つ一つに致死の威力が込められたそれに抗う間もなく、メリオダス以外の聖騎士は一瞬で命を散らした。

ある者は縦に両断され。ある者は上半身と下半身が分断され。ある者は——。

そうしてできあがったのは、肉の海だった。無数に転がる肉塊は、最早誰が誰の体なのかすら分からない。

一の斬撃を防げば即座に二の斬撃が飛んでくるような地獄の空間で、メリオダスは両腕を失いながらも、生き残った。

「ムチャクチャだ！ 強すぎだぜ……！」

「やめて！ もうこれ以上殺さないで！」

何をどうしても、勝利のイメージが湧かない。例え一手先二手先を予測して対策しても、その対策ごと叩き潰すことが可能なのがガランという理不尽だ。

「こうなりや、やるしかねえか」

眩いた直後——闇が溢れる。

痣が拡大し、顔の右半分を覆う。同時に切断された両腕と全身の傷が、闇の魔力により治癒する。

溢れた闇が立ち昇り、メリオダスを包み込むように広がる。

「その姿……」

なにかを思い出すように首を傾げるガランに、威力、速度共に底上げされた強烈な蹴りが叩き込まれる。衝撃で後ずさり、鎧が凹む。

普段の飄々とした様子からは想像もつかないほど変貌したメリオダスに、団員たちは息を呑む。

「闘級——1万3000!? や……やっべえ!」

魔眼の表示する数値に、ホークが叫ぶ。たしかに先ほどとは比較にならない闘級だが、理性の色が見えない。敵味方の区別は付いているのか、それとも本能的に危険だと感じたからか。メリオダスがガランへ右手を突き出すと、闇の形状が変化し襲いかかる。

「おおっ!」

削り取り、切り裂き、刺し穿ち、叩き潰し、弾き飛ばし、振じ伏せる。

殺意を形にしたような怒涛の攻撃に、徐々に押し始められるガラン。迎撃しようにも間髪いれずに押し寄せる闇に手が追いつかない。

「団長……！」

悲痛なディアンヌの声が届いたのか、それとも偶然か。まるで傀儡が糸に逆らうような歪みで、メリオダスの動きが止まる。荒れ狂う闇に精神を乗っ取られないよう心を強く持ち、自らに言い聞かせる。

「闇、に……呑まれる、な……！ 制御、しろ……！」

「何をブツブツ言って——っ!？」

——無差別に拡散する闇を一点に集中。極限まで範囲を絞り、対象の真上から押し潰す。

もはや後のことなど考えている余裕は無い。魔力を使い切る勢いで収束させ、渾身の一撃を放つ。

宙から放たれた極大の闇。流石のガランもこれには堪えるのか、僅かに膝を折る。

「お、お前さん……この闇の力！ まさか……まさかここまで腑抜けておるとはな」

——なんだ、これは？

ガランの内心はそれに尽きる。かつての威容、権威を微塵も感じられない。ふざけているのかと言ってやりたいほど弱り切った闇の力。

残念としか言いようが無い。どうしようもないほどに——弱い。

これがあのメリオダス？ 冗談ではない。そう吐き捨てたい気分だった。

「興が醒めたわい……時とは残酷なものじゃのう」

「メリオダス様……メリオダス様——っ！」

「裏切りの戦士メリオダス、そして〈十戒^{我ら}〉に刃向かう愚か者どもよ……あの世で己の無力を戒めるがよい」

静かにハルバードを振り上げる。憐れむような瞳で見下ろし、ハルバードがメリオダスの眉間を穿つ——直前。

轟音を上げながら石畳が爆裂し、何者かが降り立つ。大量の砂塵が舞い上がり、一帯が覆われる。ガランに続く新手か、とボロボロの体で構えるディアンヌ。

——砂塵を裂いて現れたのは、穏やかな顔立ちを怒りと焦りで歪めた、一人の少女だった。

肩に少し掛かる程度の鳥の濡れ羽のような黒髪。今にも溶けそうな白肌。覗き込めば吸い込まれるのではないかと錯覚する魔性の瞳は、刃のような鋭さで真っ直ぐにガランを射抜いていた。

ガランはそんな少女を見て、愉快そうに哄笑をあげる。

「——カハハ！ お前さんも封印から抜け出しておったか！」

「やはりあなたでしたか、ガラン」

少女は不愉快そうにすつと目を細め、側に倒れ臥すメリオダスを一瞥し、腰に差された剣の柄に手をかける。

「今すぐ兄様から離れてください。そして私の前から失せてください」

さもなくば殺す、と。言葉ではなく目が語っていた。

それに対する返答がくる前に、デイアンヌが驚愕に声を上げる。

「に、兄様ってことは——君は団長の妹さんなの!？」

「……? 団長とは、メリオダス兄様のことでしょうか? それならばはいと答えさせていただきます」

団長に妹がいたなんて、と衝撃の事実を瞬きを繰り返す。アーサーたちも言葉にはしていないが相当驚いているようで、じつと少女を見る。

確かに顔立ちはそっくりだ。髪色こそ似ていないものの、どこかメリオダスを彷彿と

させる雰囲気を感じる。

「……して、フロランスよ。まさかそちら側に着く、などと世迷言は吐かぬな？」

弛緩した空気が一気に引き締まる。ガランから特大の殺気が放出されたためだ。

対する少女——フロランスは、それを超える殺気を叩きつける。

「こんな状況で、よくそんなことを言えますね。挑発のつもりならば効果は絶大ですよ」
「カツハツハ！ そうじゃったのう、お前さんはいつだってメリオダスの味方じゃったな！」

「っ！ ……そこまでして死に急ぎますか。長生きしたいのであれば口は慎むべきですよ、ガラン」

話している間に救助されたメリオダスは、闇の力で傷を修復しながら告げる。

「今すぐここから離れるぞ……！」

「へ？」

焦燥と共に告げられた言葉の意味が分からず反射的に疑問の声を上げるホークだが、次の瞬間その意味を理解する。

「残念じゃ……お主をここで殺さねばならぬとは……」

「寝言は寝てからほざいてください、貴方ごときが私に勝てるのもど？」

その遣り取りを最後に、両者の間に濃密な殺気が漂う。

ガランは油断なくフロランスを見据え、一挙一動に神経を集中させる。

対照的にフロランスは自然体で佇み、剣の柄に手を添えているだけだ。

「お、おい……やべーんじゃねえのか？」

「ああ、超やばい。——全員退避だ！」

急いで立ち上がり退避を指示した瞬間——キヤメロットの一角が消し飛んだ。

「ぶー！？」 なんだよあの女、化け物かよ！」

「口より足を動かせホーク！ ミンチになるぞ！」

フロランスが配慮しているのか、メリオダスたちが走り去るまで、不気味なまでに両

者の動きは無かった。

ガランの獲物であるハルバードは、フロランスの指先の間で静止していた。

ピクリとも動かない。想定以上の力量に、ガランは内心で冷や汗を流す。それを悟ら

れぬよう、おどけた表情でフロランスに言う。

「——ほう、儂の一撃を容易く防いでみせるか。腐つても魔神王の娘、といったところ

か」

「……あなたが衰えたのでしょうか。時の流れとは残酷なものですね」

「抜かせ、お主とていつかはこうなるのじやよ」

「では、そのときが来る前にあなたを殺すとしましよう」

フロランスの拳がガランの顔面を捉える。サッカーボールのように軽々しく吹き飛ばされたガランは、激痛と共に頬がゴツソリと抉られたような錯覚を感じていた。

だが、瞬時に追撃の気配を察し、意識を切り替える。空中で不安定な体勢を無理矢理整え、ハルバードを地面に突き立て勢いを殺す。

そうして再び大地に足をつけたころには、ガランは既に瀕死の域にあった。顔面は複雑骨折すら生温い状態になっており、原型を留めているのが奇跡とも言える状態だ。既に魔神族としての力が自動的に回復を始めているが、治癒にはそれなりの時間を要するだろう。

あまりにも大きすぎるその隙を見逃すはずがない。足に力を込めて地を蹴り、思い切り前へと体を進める。傍目からは掻き消えたように見えるだろう。

一瞬にして眼前に現れたフロランスに足払いをかけられ、ガランの視界が傾く。そうなれば当然、横倒れとなった体は地面へ向かう。

このままではどう足掻こうと衝突は必至。それだけの隙を晒せば致死の一撃を食らうのは確実だ。落下は防げない、ならばフロランスの方をなんとかすれば良いと、流れ

落ちる視界の中拳打を放つ瞬間――

「甘ん」

その小さな手にもあまりにも似つかわしくない剛力を以ってガランの顔面を掴み、そのまま腕力に任せて地面へ叩きつける。放射状に罅が走り、巨大なクレーターができる。

中心では冷たい瞳で見下ろすフロランスと、ボロボロのガラン。誰がどう見てもフロランスの勝利で、ガランの敗北だった。

「ぬ……ぐう……っ……い！」

「――やはり、衰えましたね。昔のあなたならもう少し粘れたはずですが」

唸りながら這いつくばるガランを見下ろしたため息をつくフロランス。彼女にとってガランは敵としてすら認識されていないのだろう。

今のガランでは勝ち目は無く、ただ死を待つばかりだ。

――そう、今の状態ならば。

「――ガアツツツツ！」

互いに封印の影響で魔力はゼロに等しい。そしてガランは武力に特化しているため、魔力がゼロであろうともそれなりに戦うことはできる。

そんなガランが正面から戦い、圧倒されたということは即ち、武力で圧倒的に劣っているからに他ならない。

しかし、ガランには魔力を回復させる方法があった。それはメリオダスに味方するフロランスにはできない方法——即ち、人間の魂を食らうこと。

ガランがキャメロットへ降り立った際に仕掛けたハルバードによる一振り。その時点で死者は三桁にも届くだろう。それだけの魂を喰らえば当然、魔力は全快に近い状態となる。

「——時間にして一分程度であろうとも、それだけあればお前さんを殺せる!!」
クリティカルオーバー
限界突破。

自身の魔力により武力を極限まで高めるガランの魔力。本来ならば四万にまで闖級が上昇するが、弱り切った状態で使用したため、少し数値が落ちてしまっている。しかしそれがどうしたと言わんばかりに、力強く吼えた。

「その、姿は」

「さあ、十戒我らに刃向かったことを後悔するが良い! ——カアツ!!」

裂帛の気合いと共にハルバードを横薙ぎに振るう。突き抜けた衝撃が地殻を捲りあげ、山を裂く。

確実に胴体を泣き別れにした。

そう確信するほどの渾身の一撃だった。だというのに——

「……そもそもその話、貴方程度が勝負を挑んでくること自体が間違っているというのに、

あまつさえ私を殺す……と。力量の差すら理解できませんか」

「な——！」

ガランの歩んできた千年近い生の中でも、最高の一振りだった。そのはず——だった。

だというのに、眼前のフロランスは無傷で。

ガランの胸を、フロランスの腕が貫いていた。

「オオオ……アアア——！」

ずるり、と腕が引き抜かれ、ガランが後ずさる。僅かに心臓は外れていたようだが、それでも重傷には違いない。

魔力すら維持できなくなったのか、攻撃的なフォームが解除され、元の姿へと戻る。

「確かに私は、貴方たちに底を見せたことはありませんが——まさか、ここまで甘く見られているとは」

フロランスの手から黒い炎——獄炎が発現する。それは剣を象り、触れるもの全てを焼き切る地獄の刃として顕現した。

底冷えするような鋭い殺気とはまるで正反対の暴れ狂う灼熱の暴威は、怒りに満ちたフロランスの内心を具現化したかのよう。

「せめてもの慈悲です。一瞬で殺してあげましょう」

「——ッ！」

奇跡だった。

炎剣がガランを切り裂く直前、ガランは自身と炎剣の間にハルバードを挟み込み、逸らすことに成功した。

結果として炎剣はガランの左腕を消しとばすに終わり、同時にフロランスの体勢が崩れた。それは致命的な隙となり、好機と見たガランは残った力を振り絞り、その場から全力で逃走する。

取り逃がしたことに舌を打ち、今すぐにも後を追いかけてやるが、追いかけた先で他の〈十戒〉に遭遇する確率が高い。万全の状態ならまだしも、魔力が尽きている現状では死に行くようなものであり、愚策極まる。

そう結論付けたフロランスはガランが去った方角を睨みつけると、メリオダスの安否を確かめるためにカメラロットへ引き返した。

第4話／いざ聖地へ

「ぬかった……よもやあれほどまでとは……！」

定まらない視界、歩みを拒絶するように震える足。幻肢痛に苛まれ、自らを嘲弄されているような錯覚に囚われる。

『衰えましたね』

黙れ、と。怒りに任せて辺り一帯を破壊し尽くしてしまいたい衝動に襲われる。だが今のガランは瀕死だ。下手に力を使えばその反動で命を落とす可能性すらある。

闇の魔力により徐々に傷は癒えてきているが、先の戦闘で失った魔力、体力までは戻らない。封印から抜け出して早々、一時的に戦線離脱しなければならぬだろう。

次に会ったときこそは、と倒れそうになる体を怒りで無理矢理動かす。

（じゃが……魔力も抜きにあの実力……もしやするとエスタロッサでも——）

「……だから言っただろう、ガラン。慢心が我らに敗北を齎したと。何度言わせるつも

りだ」

そんなガランの思考を遮るように、上空から声が耳に届く。

そちらに視線を向けると、メリオダスにそっくりな黒髪の少年が、ため息と共にガランを見下ろしていた。

「くかか……じゃがゼルドリスよ、あのフロランスまでもが裏切ると誰が予想できた？」
力なく笑いながらそう告げられ、黒髪の少年——ゼルドリスは酷く冷めた口調で問う。

「——何？ それは本当か、ガラン」

「儂に真偽を問うことほど無駄なことは無い。……ゼルドリス、お主でも危ないやもしれんぞ？」

「……魔神族の誇りを捨てた奴に負けるほど、俺は落ちぶれてはいない」

珍しく真剣なガランの言葉に、ゼルドリスは吐き捨てるように答えた。



「では、改めて。私はフロランスと申します。メリオダス兄様とは、兄妹にあたる関係です」

キャメロット王城の一室で、王国の中でも屈指の術士がそれぞれの負傷の治療をしている中、そう切り出した。

ガランが去った後、フロランスを警戒していた面々の警戒を解くために、フロランスは自らの素性を明かしていた。魔神族であることは、メリオダスが明確に明かしていない以上口にはしていないが。

「フロランスがいなきや、あの場で全滅してたかもな」

「ふむ……話には聞いていたが、このような人物だったか……」

突如響いた声に、アーサーたちは驚愕と共に石化したマーリンが横たわるベッドへ目を向ける。しかしそこにいるのは変わらぬ石化したマーリンだ。ならばどこから声が出ているのか、その答えはすぐに見つかった。

「どこを見ている。私はここだ」

「玉つころが喋った!」

「マーリンの神器だ」

ホークの言う通り、浮遊しているアルダンからマーリンの声が聞こえる。あまりにも不可思議な光景にフロランスは首を捻るが、考えても無駄だろうと思考を放棄した。

「体が完全に石化する寸前に、この明星アルダンに私の魂を移したのだ。少々不便ではあるが、まあ仕方がない」

「よ、よかった……！　って、喜んでもいいのかな？」

「決してよくはないが……〈十戒〉の戒禁は、私の魔力をもつてしても解けぬようなのだ。ガラン曰く、戒禁とは魔神の王由来の力……対抗できるとすれば、女神由来の力だろうな」

そこで、フロランスは疑問を覚える。あまりにも見覚えのある魔力を持つ彼女の正体を知っているが故に。

「……？　マーリン、私の推測ですが、あなたはベリアルインの娘ではないのですか？　ならば戒禁程度破れるはずですが」

「……」

「ベリアル、イン……？」

疑問を浮かべる団員たちをよそに数瞬、面食らったようにパチパチと瞬きを繰り返すマーリン。やがて不透明だったマーリンの姿が掻き消えると。

「……あまりにも永い間生きていたのな、そのことをすっかりと忘れてしまっていた。感謝するぞ、フロランス」

アーサーたちの背後にあるベッドから声が聞こえた。フロランスはジトツとした目でマーリンを見やり、呆れた様子で口を開く。

「神々の祝福の存在を忘れた、なんて。本人たちが聞けば激怒しますよ」

「中々行使する機会が無かった故にな」

「神々の祝福……!? それは一体——」

「それはまた今度話そう」

驚愕に顔を染めるアーサーを宥め、それよりも、とメリオダスに話の続きを促す。

「ああ。ともあれ、これで不安要素が一つ消えた。問題は、オレたちと〈十戒〉の戦力差だ」

「ふむ……軽く見積もっても、十戒の戦力はこちら側の倍以上はあるだろう。そこに下位の魔神やアルビオンなどが召喚された場合、当然だが戦況は更に悪化する」

「その果てしない戦力差をどう埋めるって言うんだよ？」

現状確認でさえ、絶望するには十分だった。マーリンの説明した十戒の戦力はあくまでも魔力の尽きた状態のことであり、魔力が戻った場合の戦力差はとてつもなく大きい。

それをどう埋めるか。もつともなホークの疑問に答えたのはマーリンだった。

「方法は一つ。〈七つの大罪^我〉が強くなればよい」

「強くなる、って言ってもな。そんな簡単に言われても」

「ふ……この俺様が更に強くなっちゃったら、十戒なんぞメタメタに——」

「もちろん、口で言うほど簡単なことではないがな。……アーサー、エリザベス王女。此

度の戦において、そなたらの魔力の覚醒は必要不可欠だ」

「マーリン、それは……」

フロランスの眩きを遮るように、アーサーは俯いて内心を吐露する。

「マーリンは私のことを買いかぶりすぎているよ……私は結局、民も聖騎士も守ることができなかつた」

「アーサー……」

アーサーは、王としても騎士としても、あまりにも未熟だった。誰にも抜けないという剣を抜き王として即位したものの、王としての心得や剣の腕はまだまだ発展途上なのだ。

そんなアーサーに、マーリンは常に期待を寄せてきた。それはアーサーにとっては重すぎた。

「マーリン様！ 私、やります！」

響いた声は、アーサーとは対照的だった。

「私にできることなら……いいえ、今はできなくても、そのための努力ならなんだってしてみせます！」

「……よい目だ」

決意に満ちた表情でそう言うエリザベスを力無く見るアーサー。

その後ろで、フロランスはアーサーとエリザベスを見つめていた。アーサー本人は気づいていないが、彼の秘めている魔力は計り知れない。人間であることを考えれば破格という言葉ですら生ぬるいほど。

一方でエリザベス。決意こそしているものの、フロランスは彼女の魔力が覚醒すればどうなるかを知っているが故に、複雑な心境だった。

「そしてもう一つ、忘れてはならぬ鍵。あの男を探すときが来たようだ」

「あの、男……？」

「ああ。へ七つの大罪〈ライオン・シンの傲慢の罪〉のエスカノールだ」



感情とは何だろうか。

〈色欲ゴート・シンの罪〉のゴウセルは偉大な魔術士によって作られた人形だ。人形だから、感情を持たない。だから感情とは何なのかを知りたい。

ゴウセルは考える。かつて仲間であるディアンヌは、『想いは心に深く刻まれている。だから誰にも消すことはできない』と言った。

——ならば試してみよう。

誰にも消せないと言うのならば。

『想い』は決して消えないと言うのならば。

”消えゆく彼岸”
ロストワールド

——やはり、記憶とは所詮、ただの情報に過ぎない。

「……ゴウ、セル？　今、なんて？」

妖精王の森から黒妖犬ブラックハウンドの能力を利用しキャメロットまでやってきたキングは、仲間であるはずのゴウセルに対して激発寸前の状態にあった。

「俺は感情というものを知りたかった。だからディアンヌの記憶を操作した。予想通り、記憶はあっさり消えたようだ」

あつけからんと、悪気など微塵も感じられない声色で言い放つゴウセル。事実感じていないのだろう。あくまで一つの実験であり、その結果ディアンヌの記憶が消えただけ。ゴウセルはそう考えている。

あまりにも非道な思考と行いに、キングは憤怒に顔を歪める。

「ゴウセルッ！ 人の記憶をなんだと——」

「キング！」

メリオダスの声に、激情に駆られていたキングは過去の自身の行いを想起する。事情は違えど、したことは同じ。そんなが自分にゴウセルを責める資格は無い。

煙とともに普段の少年の姿に戻ったキングは、真顔で自身を見つめるゴウセルに語りかける。

「……これだけは聞かせて。キミは、どんな気持ちで彼女の記憶を消したの？」

「……気持ち？ 質問の意味が分からないな。他人の記憶を消去することになんら必要ないだろう」

「またもや悪びれずにそう言い放つゴウセルは、いつそ清々しいほどに人の道を外れていた。」

周りも、頭を抱えるしかないようだ。

「必要ない……か」

「どうした？ なぜ怒る？」

「ゴウセル！」

体を曲げて、俯くキングの顔を覗こうとするゴウセル。あまりに無神経なその行動をスレイダーが咎める。

やがてキングが顔をあげると、困ったように笑いながら告げる。

「怒ってやいないよ。心底キミを見損なっただけさ。」

——人の感情を弄ぶな

言葉と同時に、キングの神器である霊槍シャスティフォルの第二の形態、『ガーディアン守護獣』の拳がゴウセルの顔を殴り飛ばした。

「団長、合流早々悪いけど、オイラ一人でもディアンヌを捜しに——」

行く。そう伝えようとした瞬間にメリオダスたちがすぐ横を通り過ぎていった。慌てて振り向くと。

「もたもたするなキング！ すぐに準備してディアンヌを追うぞ！」

数瞬間食らうが、小さく笑い、返す。

「……うん！」

待ってて、ディアンヌ。キミの記憶は、オイラが必ず取り戻してみせる！
そう決意して。



何が何だかよくわからないまま緑色の巨大な豚——ホークママ——に揺られながら、フロランスはメリオダスに声をかける。

「兄様。記憶を取り戻す、とは言っても、具体的にはどうするんですか？」

「まずはディアンヌの身柄の確保。それから考えるかね」

「はあ……なるほど」

当然と言えば当然なのだが、メリオダスはそういう方面に秀でているわけではない。故にどうするか、と言われて具体的なことを言えるほど専門的な知識もない。

しかし、分からないからといって諦めるはずもない。記憶を無くしたディアンヌの行き先は北、巨人族の里——メガドーザであるとメリオダスは推測した。

「頼むぜ、おっ母！」

ホークの声に応えるように、ホークママは大きく鳴いた。

「しかし、300マイルとなると大移動だな」

「確かに早いのは助かるけど……ねえマーリン、どうせならキミの瞬間移動で行けないかな？」

キングは焦りを隠せないのか、丸テーブルをトントンと指で叩きながらマーリンに問う。

「すまないなキング……そうしたいのは山々だが、いざというときのためにも、魔力を温存しておきたいのだ」

「……いざというとき？」

「ディアンヌが向かう先……その途中にあるエンジンバラ城跡からとてつもない邪悪な波動を感じる」

「まず間違いなく、〈十戒〉ですね。鉢合わせたら面倒ですので、なるべく迂回するように——ん？」

「どうした？ 何か見つかったか？」

言葉の途中、何かを感じたのか首を傾げるフロランス。

「……まずいですね。〈十戒〉とディアンヌが衝突しているようです」

「なんだって!？」

「〈十戒〉側は、ガランとモンスピート。急いで——いや、もう一つ。今度は全く身に覚

えのない魔力です」

「そいつは敵なのか？」

「この魔力は……恐らく、巨人族です。ガランを攻撃しているので、味方だと思われれます」
ガランを中心に大地の魔力が圧縮されたことから、敵ではないだろうとあたりをつける。巨人族特有の強者との戦いを望んでいるが故の行動か、それとも仲間意識からの行動か。理由は不明だが、十戒に立ち向かえる者がいることは喜ばしい。

——ただ、気概だけではどうしようもないのが事実なのだが。

大地の魔力が弾き飛ばされると同時、二つの魔力が大地に沈む。地中に潜って逃走を計ったのだろう。

（二人とも多少なりとも負傷はしているようですが、命に関わるほどではない……上手くガランから逃げ切りましたか……）

安堵したのも束の間、メリオダスたちに特大の殺気がふりかかる。

——直後、獄炎の鳥が、殺意の咆哮をあげた。

「よりにもよってアイツに気づかれたか！」

「団長！ 凄まじい魔力の塊が猛スピードで向かってくる！」

「10秒で到達」

「ホークママ！ 方向転換して全速前進だ！」

メリオダスの指示通り、即座に方向を転換し走り出すホークママ。だが獄炎の鳥はホークママの移動速度を遥かに上回っている。そして厄介なことに軌道が変化し、結果的に真正面から飛来する形となった。

「来た来た来たーっ！ どうすんだ!?!」

「オレがいると踏んでの魔力攻撃だろう。『フルカウンター全反撃』を使えば正確な位置がバレる。だがやらかなきや後はねえ」

「待つてくださいい兄様！ ホークママの様子が——」

そう言つて抜剣しようとした直後、ホークママが獄炎の鳥へ向かつて走り出した。

「おつ母!! そつちはダメだつて！」

ホークの叫びも虚しく、ホークママに獄炎の鳥が直撃する——と思つた瞬間。ホークママが大口を開け、獄炎の鳥を呑み込んだ。



「いやー、すげえなホークママ。あの強烈な魔力を一呑みなんてよ」

「すごいというか……そういうのを超越してない？」

「お腹は大丈夫……？」

封印解放すぐであったため魔力が尽きたのか、あの一撃以降干渉は無かった。

その側で何かを考えていたマーリンは、メリオダスに声をかける。

「……団長殿、進路の変更を進言する」

「ん？」

「待つてよマーリン！ 話が違う！ デイアンヌを探す気がないならオイラ一人でも――」

「気持ちは分かるが落ち着けキング。デイアンヌは〈十戒〉と対峙していた強力な存在と攻撃を受ける前に共に気配を絶った。おそらく二人は無事だ」

それに、と一拍置いて続ける。

「我らが迂闊に近づけば、かえってデイアンヌを危険にさらすことになろう」

「私も同じ考えです。……マーリン、行く先にあてがあるのですね？」

「ああ、今は何より〈十戒〉と戦うために力をつけねばならぬ。そのためにはまず――」

「腹ごしらえだな」

「団長殿の力を戻す」

その言葉に、フロランスが納得したように頷き、口を開く。

「兄様の力が弱まっていたのはそれが原因でしたか」

「そうだ。10年前、王国を脱出する折に私が团长殿から奪った力を、な」

「お姉様が……?」

「どうして……?」

揃って疑問の声を上げるスレイダーとエリザベス。

「……んで、それは今どこにあんだ?」

「場所はここからそう遠くない……森の賢者ドルイドの聖地、イスタールだ」

異論は無いと判断したのか、マーリンの進言通り、一行はイスタールへ向かって移動を開始した。

第5話／不穩の兆し

「——到着、っと」

移動を始めて1時間ほど。ようやくたどり着いたそこは、人間大や手のひらサイズ、果ては民家程度の大きさの石が点在する場所だった。そしてそのいずれもが人為的な形を成しており——一言で言うならば『不思議だが神聖さを感じさせる』地だ。

「ここが森の賢者、ドルイドの聖地なんですね……」

「ああ、ここへ来んのも十数年ぶりか」

「メリオダス様はドルイドの方と面識が？」

「へ七つの大罪」の任務でちよつとな」

エリザベスの疑問にそう返し、歩を進める。

見渡す限り石ばかりの光景で、それ以外は何もない。本当にこんな場所にメリオダスの『力』があるのかと、フロランスは眉をひそめる。

その直後、エリザベスが一際大きな石柱を見て感嘆の声をあげる。

「わあ……立派な石柱……！ これもドルイドのみんなが——え？」

「どうしました、エリザベス？」

呆気にとられたエリザベスの声に何事かと駆け寄るフロランス。そこで見たものに、フロランスもわずかに目を見張る。

何故なら石柱の先には、石でできた一本道の先に、そびえ立つ石の塔といびつに裂けたような形の岩山があつたからだ。周囲は勾配に包まれており、それ以外のものは見えない。

「メリオダス様！ これは——」

「なんだ、もう入口が開いてたのか」

「ドルイドの存在は知っていましたが、聞くのと実際に見るのではやはり違いますね……」

塔を見上げながら進んでいると、前方に人影が見えることに気づく。小さな人影が二つ、大きな人影を挟むように佇んでいる。

「——来たること、先刻承知していただぞ」

発せられた声は存外幼く、賢者というにはあまりにも似つかわしくなかった。

そしてその人物が発する気配。他の者は気づいていないが、フロランスにははつきり

と分かった。

——女神族だ。

3000年前の大戦において、女神族は実体を失っている。そういった事情から剣や角笛といった物に宿っているはずの女神族が、何故肉体をもっているのか。

あちら側もフロランスを視認して、その内から感じる邪悪な魔力に動揺を隠せない様子だ。

魔神族が現世にいるから、ということに対してではなく、何故最上位の魔神——本来ならば〈十戒〉の一員であるはずの彼女が〈七つの大罪〉に加勢しているのか、ということに対してである。

——しかしこの場において僥倖なのは、互いに敵愾心てきがいしんが無いことだった。

そもそもフロランスは他の魔神族のように女神族を毛嫌いしているわけではない。エリザベスの存在もあり、個で全体を評価していないのだ。

そしてメリオダスと友好的関係を築いているのは一目で分かる。でなければ魔神族相手にゲートの通過を許可するはずがないからだ。

奇跡ともいえるその関係をわざわざ崩すほどフロランスは愚かではない。

穏やかな笑みを携えて二人を見据え。

「初めまして、私はフロランスです」

「な、何故メリオダス以外の魔神族が……」

「その話はまた後で。それよりも、あなたたちの名前を聞かせてくれませんか？」

「う、うむ、見た所害意は無さそうじゃいな……。私はジエンナ、隣のザネリとともにこの里の長を務めておる。こっちのデカイのは司祭のテオだ」

「……」

活発そうな外見の少女がジエンナ。

寡黙な少女がザネリ。

そして司祭のテオ。

フロランスは三人の名前を忘れないように何度か反芻する。

女神族という種族は概して他種族を下に見るのだが、ジエンナとザネリにそういった傾向は見られない。それだけで3000年前はさぞ生きづらかったであろうことが分かる。

「……んじやま、自己紹介も済んだことだし、改めて要件を伝えるぞ。今日ここに来たのは——」

「お前たちが聖地へやってきた目的は分かかっておる！」

「話が早い。流石はドルイドの長だ、助かる」

「それじゃメリオダスは私と右の塔に入るぞ。……それからお前もな」

「わ、私もですか!？」

ザネリが指名したのは、メリオダスとエリザベス。二人は言われた通りにザネリの後を追いつ、塔の中へと姿を消した。

「話のテンポが早すぎてついていけないわ……」

「ドルイドは不可思議な術を使う連中だからね……加えて世間ズレしているというか……」

「ああ……」

キングの呆れを含んだ視線の先には、木の棒でHOOKを弄んでいるジェンナの姿。それを見て、スレイダーは納得したように頷いた。



「——ここが、ドルイドの戦士が己を鍛える場、修練窟じゃ!」

残った者たちが連れてこられたのは、塔とは反対にある山——ジェンナ曰く修練窟——の麓だった。

「ねえジェンナ、オイラたちをこんな場所に連れてきてなにをさせるつもりなの?」

「鍛錬に決まっておるじゃろ! 相変わらず察しが悪いなお前は」

「鍛錬……ですか」

「そうじゃ。フロランスは例外として、お前たちは〈十戒〉と戦うのにはあまりにも脆弱すぎる。少しでもこの修練窟で鍛え、世界を守ってもらわねば困るぞ」

ちなみに、と。言葉が続けるジェンナ。

「お主たちよりも一足先に入っている連中がいてな。どうやら顔見知りらしいが……」

「バンか？」

『『連中』って言ってるんだし、ギーラやジェリコ？』

そうしている間に、修練窟から一人の男が出てくる。灰色の髪に鍛え上げられた肉体。一目で強者だと分かる男だった。

しかし、あくまでも人間の中では強者に分類されるだけで、フロランスから見ればこれらの一般人とさして変わらない程度だが。

男を一瞥し、ジェンナに声をかけようとした寸前に、キングが激昂し男へ飛び出したのを見て、話が長くなりそうだとため息をついた。

そして、修練窟の入り口にはオンボロ三人組ことギルサンダー、ハウザー、グリアモールが倒れていたそうなの。

それからしばらくして。

「話は後にせんか！ さあみんな、鍛錬じゃ！」

手を叩いて話を強制的に打ち切るジエンナの声に、ようやく終わったか、と意識を向ける。

キングと男の間にながったのか、そんなことには爪の先ほど興味はない。そんなことよりも今は失った魔力を補填しなければならない、と静かに気合いを入れる。

「正直、今はそんな気分になれない」

「……ま、よかろう。もっともこっちの気分や都合は十戒どもには関係ないじやろうが」
不服そうにそっぽを向くキングだが、ジエンナの言う通り、〈十戒〉にはこちらの都合なんて関係ない。この場に〈十戒〉が転移してくるなんて可能性も十二分にある今、悠長に構えている暇なんてないのが現状だった。

「では、鍛錬を望む者は入り口に！ それから、装備品は全て外すように」

修練窟の入り口に集まったのは、キングを除く全員だった。

「武器も持つて入っちゃダメなの？」

「己の潜在する力を自覚し引き出すのには裸が一番なんじゃ。……とはいえ、最低限の

ものは必要じゃからな——ゴウセル、下まで脱がんでいい！」

後ろで全裸になるゴウセルに突っ込みを入れながらジェンナが取り出したのは、なんの変哲も無い木の棒だった。

しかし意識して見てみると、うつすらと魔力が張っているのが分かる。

「トネリコの枝を魔力で保護しただけのものじゃが、頑丈さは折り紙つきじゃよ」

一人づつトネリコの枝を手渡され、突入の準備をする。

「フロランス、お主も入るのか？」

「ええ、〈十戒〉と戦う前に少しでも感覚と魔力を取り戻しておかなければならないので」

「……くれぐれも中の奴らを殺してくれるなよ？」

「分かっていますよ、殺しはしません」

「よし、では中に進むがよい。そうすれば自動的に始まる」

言われた通りに真つ暗な修練窟を進んでいく。

「……なるほど」

辿り着いた先は、開けた場所だった。ゴツゴツとした岩肌は今までの鍛錬により付いたであろう傷跡があり、わずかに湿った空気が漂っていた。

そして何より目を引くのが、無数に浮かぶ宝石のようなもの。

「これは……」

「女神の琥珀。周囲数フィートに存在する魔の者を取り込む、私が作った魔道具マジックアイテムの一つだ」

「こんなものまで作れるのですね……それよりも何故あなたが？」

「修練窟での鍛錬は二人一組で行うしきたりだ。今回は偶然私とお前がペアになっただけだ」

そう言う仕組みか、と納得するが、それとは別に疑問が発生する。

「女神の琥珀——でしたか。これに封じられているのは魔神族、もしくはそれに類する種族なのですか？」

「本来ならば、な。安心しろ、封じられているのは凶暴な怪物モンスターのみだ。王国聖騎士でも苦戦するほどには手強いぞ？」

得意げにそう語るマージン。

魔法だけでなく、魔道具作成の技術も超一流。無論本人の才能の高さもあるだろうが、神々の祝福により余すことなく才能を發揮した彼女の本領はどれほどのものなのか。

『あー、あー、聞こえておるか？』

「この声は……ジエンナですか？」

『うむ、私だ。これより鍛錬を開始する。そこらに浮いている琥珀の中から好きなもの

を選ぶがよい』

「では——これで」

選んだのは、側に浮いていた琥珀。

『あいわかった』

短いた承の言葉。直後に琥珀が不気味に発光し砕け散った。破片が宙に舞う中、ドスンと重々しい音を立てて、琥珀の中にいたモンスターが顕現する。

後方に向かって伸びる複数の強靱な角、凶悪な面相、異常なまでに発達している筋肉は、その肉体の強靱さを雄弁に物語っている。

鈍い光を発する双眸が二人を捉え、敵意が宿る。

「マーリン、これは？」

「ふむ、あまりの気性の荒さ故に群れを作らず、単独で街を滅ぼせるとされる暴龍タイラントドラゴンだ
な」

「——ツツツ!!!」

暴龍が吠える。

自らを前にして逃げも隠れもしない矮小な存在が気に障ったのか。それとも二人の力を感じ取り、気圧されまいと自らを奮い立たせるためか。

どちらにせよ、暴龍は吠えた——吠えてしまった。もはや暴龍には周りが見えていな

い。明確に殺意を抱き、凶悪なアギトが開かれた。

——刹那、顎下からの強烈な衝撃によりその巨体が浮き上がり、冗談のように吹き飛んだ。

「なかなか頑丈ですね……」

次いで降り注ぐ闇の散弾。ジエンナの言入通り手加減はしているものの、それでも一発一発の威力は並みの生物なら即死は免れない。それらを無数に途切れることなく受けてなお、暴龍の瞳はフロランスを射抜いていた。

「——ッ！」

咆哮と共に長大な尻尾を振るう。空気を裂き、地面を削りながら迫る尻尾を涼しい顔で掴み取ると、体を反転させて腕に力を込め、暴龍を投げ飛ばした。

地上では他に類を見ないほどの巨体が空を舞う光景は圧巻の一言であり、普通に生きていくのならば一生見ることもないであろう光景だ。

岩壁に強く叩きつけられた衝撃により、気力で保っていた意識がとうとう限界を迎える。呻き声をあげながら暴龍の意識は薄れていき——暗転する。

「やれやれ……ようやく気絶しましたか」

「どうするつもりだ？」

「龍族は概して豊富な魔力を宿しています。ですので……」
マジックドレイ
 「魔力吸収」

フロランスが暴龍に手をかざすと、暴龍の体内で循環していた魔力が体外へ流れ出し、導かれるようにフロランスへと向かう。

龍族ということもあり、その量と質は中々だ。この調子ならばもう十頭ほどから蒐集すれば、後は自然回復でどうにかなるだろう。

「二頭ずつやるのも面倒です。ジェーナ、聞こえていますね？ 追加で十頭ほどお願いします」

『う、うむ』

再び女神の琥珀が光を発する。

そして、フロランスを囲むようにして十頭の暴龍が顕現した。

『——ツツ!!』

幾重にも重なった咆哮により空気が震える。

暴力の化身のような存在に包囲されているにも関わらず無表情で佇むフロランスを見て、ジェーナは密かに頬を引きつらせた。

「効率よくいくとしましょう……」

パリ、とフロランスの全身から黒雷が発生すると同時、放出された闇の魔力が暴龍たちを抑えつけた。

そのあまりの暴圧は身じろぎ一つ許さず、無理に動こうとすればするほど圧は高ま

る。ミシミシと体の軋む音が響き、悲鳴が轟く。

「魔力吸収^{マジックドレイン}」

先ほどとは段違いの速度で吸い上げられる魔力。

一頭目で感覚を掴んだのか、ものの数秒で暴龍たちの魔力は底をついた。

反対にフロランスの魔力は瞬く間に回復していった。また暴龍たちだけでなく、周囲に浮かんでいる女神の琥珀もまた、豊潤な魔力を宿す魔道具だ。

怪物を封じ込めておけるギリギリまで吸い取り、さらに砕け散った女神の琥珀から霧散した魔力すらも逃さない。

それら全てを逃さず回収した結果、フロランスの魔力は封印前となら遜色のない状態にまで回復した。

これならば〈十戒〉を相手にしても戦えるだろうと確信する。

残る問題は――

（歪んでは戻って、また歪む……相当苦戦しているようですね……）

激しく変動を繰り返す魔力は、当人の心をなによりも如実に表していた。

第6話／救えていた、救われた

時々、思うのだ。

あのとき——兄様が魔界を出るのを阻止しようと立ち塞がったアラナクとゼノを殺したとき。

もつと他に方法はあつたはず。

犠牲を最小限に抑えて、なおかつ戦いを終わらせられる方法があつたはずだと。

けれど、私は動けなかった。

……結局私は、怖かったのだ。兄様のためなら死をも厭わないと覚悟していたのに、いざ同胞を——父を裏切るとなると足がすくんだ。

だから、だから——

『いめん……なさい……』

差し出された手を、拒絶してしまった。

そのとき、兄様が何を思ったのか推し量ることはできない。

私は、最低だ。

保身のために、兄を見捨ててしまったのだから。



修練窟から一番に出たフロランスは、手頃な岩に腰掛け空を見上げていた。

燦々と輝く太陽とゆつたりと流れる雲、そして澄んだ青空を見ていると、心に巢食う負の感情が洗い流される気がした。

これから戦う敵は、かつての同胞。

そんな彼らを殺すことに抵抗はあるかと言われれば無い、と答えられるが、罪悪感が無いわけではない。

しかし、彼らが〈十戒〉である限りメリオダスたちとの敵対は免れない。戒禁を捨てれば、あるいは――。

「いえ……そんなもしもを考えても無駄ですね」

IFなんてものはどこまでいっても可能性だ。それに、そのもしもを考えるのは少し

ばかり遅すぎた。

フロランスは知っている。

恋人と一族を天秤にかけ、苦しんでいる弟を。無理矢理一直線に進まされている家族を。

彼女はまだマシなのかもしれない。明確な目的への道は見えており、それに向かって歩いて行けば良いのだから。

だが弟は違う。誰よりも魔神族を思う彼は、きつと己の意思よりも父の意思に従う。それが己にとってマイナスに働くことであろうと、彼には抗う術がない。

言い方を変えれば——理不尽に対抗する力が無い。

「私にもっと、力があれば——」

兄も弟も救えたのか、と。そんなもしもがよぎった。

あるいは——

そんな思考を遮るように、見慣れた顔が横から飛び出してくる。

「よっ！ そんなところでなにしてんだ？」

「っ兄様!?! いつの間に……、体は大丈夫ですか？」

「ああ、ばつちりだ。心配かけちまったな」

「いえ、そんな」

そうか、と眩き空を見上げる。

強い風が吹いて、思わず目を細めた。

「……すまねえ、フロランス」

「……」

「許してくれとは言わない。ただ——」

「兄様、その先は言わないでください。……私は、兄様の選択を間違っていたとは思いません」

一拍おいて、言葉が続ける。

「私は……苦悩していた兄様に手を伸ばすことのできなかつた自分が憎い。……そして、魔神王を——父を恐れて兄様を見捨てた自分が、」

「——フロランス、これだけは言っとくぞ。オレはお前の存在に救われたんだ」

予想外の言葉に、バツと顔を上げる。

「否定されてばかりだったのに、お前だけはオレを信じてくれていた。それがどれほど救いになったか」

「でも……私は結局なにもできなかつた……!」

「お前はこれ以上ないくらい助けてくれたさ。——ありがとな」

そう言つてメリオダスは、いつものように明るく笑んだ。

「は、い……い……！」

悔しきで埋め尽くされていた心は、いつの間にか晴れていた。



「遅いぞお前たち、何をしていた」

「いやー、わりいわりい。ちよつとな」

「こんな状況で呑気な……で、成果はどうじゃった？」

「もちろんばつちりだ、いつでもいけるぜ」

呆れ顔のジェンナに笑顔で答える。ジェンナとしても心配だったのか、安堵の息を漏らした。

「では、今から力を戻す儀式を——」

「ジェンナ」

始めるぞ、と言い切る前に声がかかる。振り向けば、そこには拳を握りしめたキングの姿。先とは違い、その顔には明確な決意が浮かんでいた。

少しはマシな顔になったな——とは口に出さず、短く尋ねる。

「なんじゃ？」

「オイラも修練窟に入る」

告げられた言葉は、やはり予想通りで。ジェンナは思わずニヤけるのを自覚した。

「良いぞ。しかし、修練窟には二人一組で入るのがしきたりじゃ。誰か連れてくると良い」

「んじゃ、オレが一緒に入る。力を戻す前に慣らしておかねえとな」

誰かいないものかと思案していたキングの横で、メリオダスは服を脱ぎながらそう言った。

「預かっててくれるか？」

「はい、頑張ってくださいね」

「おう！」

手渡された上着と武器を抱え、笑顔を浮かべる。

キングもそれに倣って服を脱ぎ、トネリコの枝を受け取る。

「よし！ 準備はいいな？ ならば二人とも中へ！」

緊張した面持ちで修練窟へ入っていく二人を見送る。それと同時にジェンナは水晶に修練窟の様子を写す。

「部屋に出たらそこらに浮いとる女神の琥珀を一つ選ぶがよい。なにが出るかはお主らの運次第じゃ」

そう言うと、二人は言葉を交わしながら女神の琥珀の選定を始める。

しかし——突如、キングがトネリコの枝を操り、メリオダスに向けて叩きつけた。

「なっ——」

押し留めることは難しいと判断したのか、受け流して距離を取ろうとした瞬間、あらゆる角度から縦横無尽にトネリコの枝が襲う。

それらを弾き、受け流して対処する。

「な……なんじゃ!?! いきなり喧嘩を始めよったぞー!」

「どういうことですかジエンナ殿! なぜ二人が!?!」

「知るか!」

「……まさか」

慌てふためくジエンナたちをよそに、メリオダスとキングの戦いは激化する。

キングがトネリコの枝を操作し、叩きつける。

メリオダスがそれを弾き返し、防ぐ。何百とその応酬を繰り返していくうちに、防ぎきれなかった攻撃により擦り傷が増えていく。しかし、軌道を見切りすれ違いざまにトネリコの枝を掴み取ったことで、キングの攻撃手段は封じられた。

キングにしたり顔を向けるが、次の瞬間——肩口と頬に引かれた小さな赤い線が大きく裂け、真紅の花弁が散った。

「今のは!？」

「……キング本来の魔力、”デイズスター炎厄”だ。かすり傷を重症化させ、毒を猛毒に変え、小さな腫瘍を増大させる。木々や植物を成長・繁殖させる一方、間引くことで森を維持し、統べる妖精王からではの魔力だろう」

そうしている間にも、事は進んでいく。

キングが再び魔力をぶつけようとするのを、フルカウンター全反撃で跳ね返す。負傷はしていないため無駄に終わったが、思わぬ反撃に一瞬怯んだことにより精神的な優位性を失う。その隙についてメリオダスはなにかを口にするが、直後にキングが額に青筋を浮かべながら魔力を使用する。

「ええい、奴らは何故こんなことを……」

「——不信感」

「……なるほどな」

「ど、どういうことですか?」

「……恐らく、キングは兄様を信じられないのでしょうか」

「信じ、られない?」

「ここまで兄様を見てきて分かったのですが……兄様は貴方達に語っていないことが多い。心当たりはありますか?」

「た、たしかに、メリオダスのことはあまり知りません……ですが、誰にだってそんなことはあります！ それだけで——」

「それが、大切な人が傷つくかもしれないことでも？」

その言葉に思わず瞠目するギルサンダー。彼はメリオダスを尊敬している、し過ぎていると言ってもいい。盲目的なのだ。だからこそ、そこにまで目が向かなかつた。

秘密がある。それだけならいい。だが、恋人や家族に危害が及ぶとなれば、それを放置するわけにはいかない。それが付き合いの長い仲間だとしても、敵対する理由には十分だ。

「キングが悪いわけではありません、当然の感情なのですから。けれど、兄様の抱えることは事情が事情だけに、おいそれと話していい内容ではないのです」

「どっちも悪くない、つてことかの。それよりも——お主ら！ いい加減にせい！ 今すぐ出てくるのじゃ！」

■
ジェンナのその一声で、ようやく事態は収束した。

「まったく、いきなり喧嘩なぞ始めるでない」

「おっぱい派かお尻派かで白熱しちゃって、な？」

「ふん！——っ」

同意を求められるが、言葉も交わしたくないとばかりにそっぱを向いた瞬間、突如背中に入った痛みに一驚する。まるで内側で何かが出てこようとするような痛みだった。思わず背中を見るが、そこにはいつも通りの薄い背中が広がっているだけだった。

（今のは……？）

「……よし。ではこれから、メリオダスの『力』を戻すぞ。——ラクシダ・ツミダマシ」
そう唱えて杖を一振りすると、ジエンナの頭上に巨大な——通常のものとは比べると数十倍以上の規模を誇る——女神の琥珀が現れた。

「まさか——これが!？」

「その通りだとも。入れるのに苦労したわい」

「……たしかに。しかし、これは……」

——弱い。それが率直な感想だ。本来フロランスの知るメリオダスの力に比べて圧倒的に弱い。何故なのか、フロランスには一つ心当たりがあった——否、既に知っている。

（魔神王……！ どこまで兄様を弄べば気が済む……っ！）

思い切り、拳を握った。爪が皮膚を突き破り血が流れても、力が緩むことはない。む

しろ強まっていく一方で、彼女の手は真つ白に染まっていた。その怒りに呼応するように闇がパチリと弾け、無意識のうちに漏れ出した怒気が大気を揺らし、一部を除いた面々は硬直する。

誰もが黙ってフロランスを見つめる中、ジエンナが声を上げた。

「あー、その辺にしてくれないかの。私やメリオダスならともかく、他の者はそうもいかんのぞな」

「……すみません、少し取り乱しました」

ゆつくりと拳を解き、感情に振り回されたことを恥じる。

今すぐじゃなくとも、必ずその時はやってくる。それまでは、耐え忍ぶしかない。

そう自分に言い聞かせて、怒りを鎮める。

「他の者は下がっておれ。……ではやるぞ、メリオダス」

「オス！」

杖を掲げる。

「ゼハロ・ジケハロ・バトレシホ」

そして呪文を唱えた——瞬間、世界が闇に染まった。

夜になった——のではない。解き放たれたメリオダスの力が、世界を闇に染めたのだ。

再び杖を掲げる。

「カリヨデライシ・タフタミヤビヨ・モンドラ！」

もう一つの呪文を唱えると、世界を侵食せんばかりの闇は、元の宿主であるメリオダスへと返却された。その小さな体躯に見合わぬ圧倒的な暴威の余波は世界に異変を齎した。

波が激しく揺れ、大気が震える。それだけの力を、彼らが感じ取れないはずもなく――

「…………ゼルドリス、これは…………」

「ああ、間違いない…………奴だ！」

「…………くつくつく…………これだ…………！ 我が力、確かに返してもらったぞ…………！」

「メリオダス…………？」

「お、おい…………なんかやばい雰囲気じゃねえか？」

不穏な空気が漂い始める。それにあてられたのか、各人は自然と構えを取っていた。

まさか——、と最悪の展開が脳裏によぎった瞬間。

「なーんつつて」

全員ずつこけた。

メリオダスを見る。外見上は今までと特に変わった様子は無い。そう、外見上は。

「よかった……！」

「つか、何も変わってねえじゃん」

「キミ……馬鹿？」

いつも通りのメリオダスだと安堵するギルサンダーたちとは対照的に、キングはメリオダスを見て息を呑む。

「本当に今までと同じだと思うのか……？」

メリオダスという人の形に押し込められた闇の魔力は、妖精王たるキングを戦慄させるには十分なものだった。

そんなキングをよそに、メリオダスはフロランスから渡された服に袖を通しながら衝撃的な一言を発する。

「マーリン、オレを〈十戒〉のもとに転送とばせるか？」

「!?」

「正気ですか!? 敵陣真つ只中に乗り込むなんて自殺行為です!」

声張り上げるギルサンダー。当然だ、つい先日殺されかけた相手の場所へ行くなど命を捨てる行為に他ならない。しかしマーリンは短く、可能だ、と答えた。

「転送先は私が認識できるガランの至近距離。そして一度転送すればもう一度発動できるのは10秒後。その間奴らが黙っているとは思えん、つまり团长殿は10秒間一人で凌ぎ切らねばならない。さもなくば10秒後に戻ってくるのは肉片……それでもやると?」

「おうつ、やるやる」

「軽っ!」

「……兄様、私も付いて行きましょうか? ゼルドリスは少し難しいですが、それ以外なら数人程度は倒せるかと」

いくら力を取り戻したとしても、相手は規格外の力を持つあのへ十戒だ。故に同行しようかと声を上げたが――

「ほんの挨拶に行くだけだつて」

次の瞬間、メリオダスの姿が消えた。

「本当に大丈夫なんだろうな……」

「兄様が大丈夫と言うなら大丈夫なのでしょう。信じるしかありません」

「それにしても……メリオダスは本当に怒りを捨て去ることができたのか？」

そんな風には見えなかったが……、と首を傾げるジェンナに背後から声がかかる。

——9

——8

——7

「いいや、捨ててはおらんぞ」

「ザネリ……捨てとらんとはどういうことじゃ？ それではまた怒りに吞まれて暴走する危険性が……」

「今の奴の中に存在するのは、荒れ狂い、全てを破壊する烈火の如き憤怒ではなく、静かに全てを呑み込む深海の如き憤怒だぞ」

そう言つて、ザネリは試練を終えたメリオダスを思い出す。

「メリオダスは、怒りを完全に支配している」

——6

「……」

「どうした、フロランスよ。何か気になることでもあるか？」

「いえ、ほんの少し引っかかっただけなのですが……」

「引っかかった？」

「はい。……その、兄様は私よりも長く生きていて、力の扱いも上手いです。それなのに怒りで力が暴走するなんてことに、どうしても違和感を感じて……」

「……ふむ、言われてみればたしかにな」

——5

——4

——3

「昔のメリオダスはどんな人物じゃった？」

「そうですね……非情で、一切の感情が抜け落ちたような人でした」

「……アレが？」

「はい、しかし今は——今、は……」

——2

——1

「なにか心当たりでもあったか？」

「——なるほど、そういうことでしたか……」

「おーい？ どうした？ 気になるんじゃないか？」

「すみません、今はまだ話せません。これは、兄様の根幹に関わることなので……」
「あー……そういうことか。分かった、ならこれ以上は聞かんでおこう」
「助かります」

— 0

「ただーい——ま！ つと」

「兄様、ご無事なようで」

「おう、言っただろ？ 挨拶だつて」

「お主……挨拶つて、一体なにをしてきた？」

恐る恐る尋ねるジェンナに、メリオダスは軽く答えた。

「なにになーに、下手なことをしたらぶっ飛ばすつて伝えただけさ」

「っ!？」

「なにを考えているんだ！ 下手なことをしたのはキミの方だろう!？ それじゃただの

挑発じゃないか！」

「うーん……まあそうなるかな」

「わざわざ寝た子を起こすような真似をしおつて——っ！ それで奴らが侵略を始めた
らどうするつもりじゃ！」

激発と共にメリオダスに抗議するキングとジェンナ。

二人の言う通り、メリオダスのやったことは完全に挑発であり、それによつて発生するかもしれない被害を考えると眩暈すら起きる。

しかし二人の抗議に対しメリオダスは。

「そこまで怒るかね」

『これが怒らずにいられるか!!』

二人揃つて怒号を発する。

だが当の本人は“やらかした”という意識すら無いようだ。

僅かな沈黙の後、徐に口を開く。

「……今やブリタニアにはたくさんの国や町がひしめいてる。侵略するにはバラバラに散つた方が効率的——奴らは必ずそう考える」

「十戒」が一つに固まっている限り勝ち目は薄い。だから彼らを分離させて少しずつ潰していく……ということですね？」

「正解」

その戦略は、力で圧倒的に劣っている彼らにとつて最適と言える。真正面からぶつかるのは愚策。だから一対二、もしくは二対二の状況へ持ち込んで確実に倒す。

「なるほどな……おもしれえ、俺も鼻が鳴るぜ」

「お前も鍛錬が済んだようだな、ホ……」

ホークの声に振り返ると、そこには――。

「……………ク？」

ドラゴンのような翼と角が生えたホークがいた。心なしかドヤ顔を浮かべているようにもみえるが、それよりもその角と翼はどうしただとか、何があつたと疑問が頭を駆け巡るが――。

「……………ようザネリ！ お前がここにいてことはエリザベスの試練も終わったのか？」

「え……………ああ」

「無視かあい！」

最終的に取った行動は、何も触れないことだった。端的に言って、触れるのが面倒だったのだ。

そんな遣り取りをしている側で、ハウザーが修練窟の入り口を指して言った。

「スレイダーたちも出てきたようだぜ！」

「王様とお人形も御帰還のよう――ん？」

出てきた面々を見て、ジエンナは怪訝な顔をする。

「アーサー、その頭の上の珍妙な物体はどうした？」

マーリンも同様に、怪訝そうに問いかける。アーサーの頭に猫のような丸々とした生

物が乗っていたからだ。

「謎」

「な……謎……」

更にその側では、何故か小さくなってしまったグリアモールをあやすスレイダーの姿。

「はい、よちよち。いい子ねー♡」

「グ、グリアモール……だよな……？」

「何があつたんだ……？」

揃って困惑の声を上げるが、返ってくるのは泣き声のみ。

「……なんなのでしょうか、これは……」

その呟きは、軽く混沌と化した空気に流されて風に溶けていった。

そんなとき、新しい声が響いた。

「メリオダス様ー！」

「おっ、来たなエリザベス！」

「すみません、着替えに手間取ってしまって」

そう言つてパタパタとこちらに走ってくるエリザベス。その装いは今までの制服や王家としての服と違い、動きやすさを重視したものだった。

「前の服じゃ動きにくいだろうって、ザネリ様がくださったんです！ どうですか？」
「いいー！」

スカートの中に顔をうずめながら親指を立てるメリオダス。

「これ以上足手纏いになられても困るからな！ 服ぐらい身動きの取りやすいものを着るべきだ！」

「ヒュウ、いい目の保養に——」

ハウザーの両目にメリオダスの指が突き刺さる。不意を打たれた一撃に、ハウザーは両目を押さえて転がり回る。

「教育的指導」

その一連の流れを見ていたホークが声をかける。

「エリザベスちゃんも無事。パワーアップを果たしたようだな！」

「あつ、ホークちゃ……」

声に振り向く。そこにはドラゴン擬きと化したホーク。一瞬思考が止まり、どう言葉をかけるべきか思案するが——。

「メリオダス様の力はもう戻ったのですか？」

「うん」

「無視かあい！」

どこから触れれば良いのか分からなかったのだ。

「それで、エリザベス。修行の成果はどうだった？」

「はい！——ダメでした」

きつぱりと言い切ったエリザベスに。思わずすっこけるジエンナたち。予期していなかった返事に、メリオダスは思わず聞き返した。

「ダメでした？」

「……ダメでした」

「全然？」

「……全然」

こうして、波乱の鍛錬は幕を閉じた。



「ジエンナ、ザネリ、世話になったな！」

「今度のはのんびり遊びにこい、バンも連れてな」

「おう。……テオの奴はどうした？」

「お昼寝じゃよ」

「昼寝……って、本当にガキだな」

ホークが呆れたように言う。ちなみに変身はまだ解けていない。

役2名は鍛錬の成果を得られなかったものの、メリオダスの力を戻すという本来の目的は達成できただけでも十分な収穫だろう。

「メ……メリオダス」

「ん？ どうした、ザネリ？」

おずおずと声をかけたザネリだったが、何かに怯えるようになってなんでもないと、言う口を噤んだ。

「お前の気持ちなら分かってるさ」

その言葉に、ザネリは弾かれるように顔を上げる。しかし目に映ったのはメリオダスが自分に笑いかける光景——ではなく、メリオダスが俯くエリザベスの頭を撫でる光景だった。

「はい……でも、このままじゃメリオダス様の……みんなの役に立てないって——」

「お前が王国での戦いでオレたちを救ったのは事実だ。お前がすげえ魔力を秘めてることとはオレが保証する！ 一度や二度の失敗がなんだ？ オレなんて怒りをコントロールするのに何千回失敗したか」

「……ハイ！ こんな私を信じてくれるメリオダス様のためにも、二度と泣き言は言いません……！」

ザネリはそれを、寂しげな目で見ていた。

反して、ジェンナはそれぞれの別れの挨拶をしていた。ヘンドリックセンたちには激励を。フロランスには小言を。

「お主……女神の琥珀から魔力を抜き取りよつたじやろう……？ 貴重な魔道具なんじゃからこれつきりにするのだぞ!?!」

「その件にはついてはすみません。状況が状況だったもので……」

「うむうむ、謝ってくれるならよい。ただ全てが終わった後、きちんと補填はするのじゃぞ」

「分かりました」

フロランスも内心やりすぎたという意識はあつたのか、素直に頷く。

「よし！ それでは世界を救ってこい！」

激励を受け、ゲートへと向かう。

「あばよチビ共！ 俺様がいなくなつて寂しいだろうが——」

「早くしろ偽豚野郎」

「イダダ！ ミミガー！」

最後まで賑やかにゲートを通過するのを見送る。メリオダスがホークの耳を引っ張っていくのを最後に、彼らはドルイドの里を去った。

「んーっ、軽く一杯ひっかけてえな！」

「メリオダス様ったら」

風を受けて大きく伸びをするメリオダスに、ギルサンダーがやや興奮した様子で問いかける。

「メリオダス、〈十戒〉と一戦交えたというのは本当ですか？」

「ん？ ガランってやつと軽く手合わせ程度にな。一戦ってほどじゃねえな」
そのときのことを思い出してそう答え、しかし、と続ける。

「ギル坊、ハウザー、お前らも強くなったみてえだな。なあ、フロランス？」

「……たしかに、少し魔力が強くなった、ような……？」

「おおい!? 曖昧だな！」

「ならば私が見てしんぜよう」

思わず叫ぶハウザーの横で、ホークはパロールの魔眼を使用して二人を見る。

「フーム！ ギル坊の闘級、1970から2330に上昇。ハウザーの闘級、1910から2350に上昇」

『…………おお!!』

ギルサンダーは360、ハウザーは440の上昇。こうして実際に数値で聞くと実感が湧いてきたのか、顔を見合わせて喜色を浮かべる。

「お前、よく前の数値覚えてるもんだね」

「まあな、闘級マニアホーク様と呼んでくれ」

「…………それにしてもお前、なにがどうしてそうなった？」

「話せば長くなるんだが——」

ホークが語ったのは、修練窟での激闘の一部始終だった。曰く、タイラントドラゴン 暴龍に飲み込まれたホークは、逆にその腹を食い破って脱出した結果こうなったという。

「俺は無敵の力を手に入れた！ 鼻から火を噴き——あぢつ！ あぢぢ！ ……………耳は翼と化し、大空を飛翔する！ うおおお！」

そう言って手に入れた能力を披露するが、どちらも到底実用的ではなかった。火を噴けば火傷をして、耳を羽ばたかせれば数センチ浮く程度と、完全に見かけ倒しだったようだ。

「まあ……みんな色々あったみてえだな」

「私は、メリオダス様力が取り戻してもなにも変わらなかったのが一番嬉しいです！」
「ええ、なにも変わりませんとも！」

流れるように繰り出すセクハラには、最早だれも突っ込まなかった。

そんなメリオダスを見て、

「と、ところでホークさん……メリオダスの闘級って……」

「やはり気になるかね、実は私もだよ。どれどれ……闘級——3250！」

「やっぱりメリオダスはすごいよな！ なー！」

「ま、まあな……でも、そのくらいすぐに追いついてやる」

自分たちを上回ってはいたが、鍛錬次第では届く現実的な数値。しかし、前回ホークがメリオダスの闘級を測ったときの数値は3370と、むしろ下がっていた。

「おいおいメリオダス、力を取り戻したわりに前より下がってんじやん！」

「一桁0をつけ忘れてるぞ、ホーク殿？」

『へ？』

「………つてことは、闘級——3万2500!？」

驚愕に満ちた声に、メリオダスはにしし、と笑ってフロランスを指差した。

ギギギ、と壊れた人形のように首を動かしフロランスを見る。魔眼が表示した数値は

「と、と、闘級——7万!？」

『ななま……!?!』

「こ、壊れてねえよなこの魔眼!？」

「安心しろ、正常だ」

あまりにも現実離れた数値に、揃って絶句する。ガランが優しく見えるほどの強さを持つ二人を前に、マーリンと当事者たち以外は言葉も出ない様子だ。

「さてさてさーで、そんじゃ次は——エスカノール探しだな!」

「大罪最期の一人か。今更捜して、役に立つのか? もうお前ら二人で十分じゃね?」

それを聞いて、メリオダスは得意げな顔で更なる驚愕の真実を告げた。

「エスカノールはオレらよか強えぞ?」

「……はい? 私よりも、兄様よりも?」

「おう」

「えつと……人間、なんですよね……?」

「一応、な。多分お前なら分かるはずだ」

含みのある言い方が気になったが、いずれ分かることなのだからここで気にしても仕方がない。

それよりも今は目先のことに集中しなければ、と気合を入れ直した。

第7話／バイゼル大喧嘩祭り、開始

「別行動をとる？　ディアンヌを捜しに行くのか？」

それは、最後の大家人である〈傲慢の罪〉ライオン・シンのエスカノールを探す道中。今にも飛び出して行きそうなほど焦った様子キングは、ここでメリオダスたちと別れると告げた。

よほど重大なことらしく、こうして話している時間すら惜しいとばかりに厳しい表情で返す。

「それもあるよ。でも、もう一つ行かなくちゃならない理由ができたんだ」

「そんじやオレたちも——」

「キミの手を借りるつもりはないよ。……言っただろう？　オイラはキミを信用してないんだ」

「さてさてさーて、そりゃ困ったな……」

顔を背けて、メリオダスの言葉を遮りながら言う。それは明確な拒絶の意思であり、

なにがあらうと曲げるつもりはないようだ。修練窟でのこともあり、どうしても疑いを捨てきれない。メリオダスがなにを考えて、なにをしようとしているのか、全く見えな
い。メリオダスは善人だ。それは間違いではない。だが、分からない。なぜそうまでして
秘匿するのか。

思考するキングに、ギルサンダーから抗議の声が飛ぶ。

「キング！ それはあんまりです！」

「なにがさ？ キミたちこそ、よく信じられるよね。正体が知れない、素性を明かそうと
もしない奴のことをさ」

「……貴方の言い分は理解できません。その気持ちも。ですが、受け入れることはできま
せん」

「だから何？ 言っておくけど、キミは特に信用していないよ。いきなり現れたと思っ
たらメリオダスの妹を名乗って、しかも〈十戒〉顔負けのトンでもない力を持っている
ときた。二人とも〈十戒〉とは顔見知りみたいだし……そんな奴をどうやって信用し
ろって言うのさ？」

肩をすくめて、呆れたように息をつく。キングがこうしてメリオダスたちと同行して
いたのも、全てはディアンヌのため。目的が一致していたためだ。ディアンヌのことが
なければ、ドルイドの里を出た瞬間にでもメリオダスたちの元を去っていただろう。

自分たちを裏切つて〈十戒〉と手を組むかもしれない。他ならぬデイアンヌを傷つけた〈十戒〉とだ。そんな多大な不安を孕んでいるというのに、それでも信頼を寄せていることがキングには酷く滑稽に見えた。

その場の全員を一瞥し、背を向けて先ほどよりも強く拒絶の意を示す。

「……もう分かつただろう。オイラものんびりしてられないんだ」

これ以上話すことはない、足早にその場から飛び去つて行く。小さくなつていく背中に見えようように、メリオダスは叫んだ。

「なにかあつたら呼べ！　すぐ助けに行く！」

返答は、無かつた。



「——ん……？」

それはキングが去つてからしばらく経つた後。カウンターでちびちびと酒を飲んでいたフロランスが、不意に顔を上げた。ここからそう遠くない場所から強い魔力反応があつたためだ。節約のためにあまり広げていなかった魔力探知範囲に入るほどの強大な魔力が。

フロランス以上に探知範囲を広げていたマーリンも当然気づいたようだ。

「これは……！ 団長殿、たった今^{ロケーション}探知”した”」

「奴か？」

「ああ……現在の闘級5万55……60……時間が経過すること、闘級が増している」

「もしや、これが例の？」

「間違いない、エスカノールだ」

「これほどの魔力が……人間!? いや、それよりもこの魔力、どこかで——」

フロランスの表情が驚愕に染まる。

〈十戒〉と同等以上の魔力を人間が放っているのだ。当然と言える。そんな化け物じみた人間を彼女は見たことがない。キャメロットの新王アーサー・ペンドラゴンもとてもない魔力を秘めてはいたが、それすらも霞んで見えてしまうほどに規格外な存在だった。

「相手は？」

「ガラン、それともう一人。側にはバンと見知らぬ魔力が二つ」

「もう一つは……恐らくメラスキュラですね」

「そうか……その二人なら多分——お？」

「どうしました？」

「今なんかデケエのが……鳥か？」

抜け切らない喫驚のまま情報を交わしていると、不意にメリオダスが首を傾げながら窓を開けて空を覗きこむ。つられるように隣から見上げると、先ほど通った影の正体であらう青い化け物——下位魔神の一種、青色魔神コバルトの個体——の後ろ姿が目に入った。それと同時にひらひらと、まるで誘われるように一枚の紙が目前に舞い降りてきた。それを掴みとり、内容に目を通す。そこには大きく、こう書かれている。

『近日、バイゼルにて大喧嘩祭りを開催』……？』

「今の、青色魔神コバルトですよ？ だとしたら……」

「ああ、間違いなく〈十戒〉だ」

「……他にはなにが？」

『優勝者には、いかなる望みも叶える』権利を与える』だつてよ』

「な、なんでも……つて、いくらなんでも怪しすぎるだろうよー！」

「……いいな。ちようど店の増築を考えてたし」

「メリオダス!!」

意外にも乗り気なメリオダスを引き止めようとするハウザーだが、当の本人はなにを願おうかと考えている始末。怪しきしかない文面もそうだが、このビラを配って回っていたのは魔神だったのだ。フロランスの言った通り、その後ろで〈十戒〉が手を引いて

いるということだ。

控えている戦力は未知数。危険極まりないこの祭りの参加を引き止めるのは道理であつた。

「メリオダス！ どうみても——」

「どうみても罨です！」

「俺の台詞取んなよ！」

後ろで騒ぎ立てるホークを放って、メリオダスは思案する。いや、実のところ参加することは決めているのだ。問題は誰がいるか。そこが気掛かりだった。

しかし、遅かれ早かれ全員相手にすることになるのは確実。ならば、

「そうだな、エスカノールの反応も消えちまったことだし、ちよつと寄つてみるか」

「ほ、本気ですか!? それとも何か策が？」

「——うんにゃ、面白そうだから！」

そうして一行は、バイゼルへと進路を変更した。



「……………これは」

「迷宮、だな」

「これをクリアしなくちゃ参加の資格すら無いってことか……」

急遽行き先を変え、辿り着いたのはバイゼル——だった場所。かつてここに存在していた町はその有様を大きく変えていた。

眼前にそびえ立つ岩壁。巨人族によつて作られたであろうそれは外からでは分かりにくい、上空から見下ろせば余すところなく通路が通されているのが見えるだろう。正に大迷宮と呼ぶに値するモノだ。

ゴール地点にある巨岩から感じる強大な魔力は、きつとこの迷宮を作った〈十戒〉のものだろう。

「仕方ねえ、どちらにせよここを突破しなきゃここまで来た意味が無くなる。どんな罠が仕掛けられてるか分からねえ、気を引き締めて行くぞ」

「お、おう！ ギル、気い抜くなよ」

「お前こそな！」

そうして一行は迷宮に足を踏み入れる。中から見る迷宮はやはり迫力があり、外から見るのとはまた違う印象を受ける。壁には強い魔力が満ちており、生半な攻撃では穴をあけることすらできないことが分かる。

そこまで思考して、フロランスはメリオダスたちの魔力が消えていたことに気づい

た。探知しようにも壁の魔力に阻害されて正確な位置が特定できなくなっている。

そういう仕掛けか、と形の良い眉を顰めたが、立ち止まっただけではなにも始まらない。一先ず上から構造の把握をしようと、闇で翼を形成して飛び上がる。その瞬間、壁から無数の槍が飛び出し、穂先が唸りながらフロランス目掛けて迫る。翼で空気を叩いて咄嗟に後退することで躲すが、間を置かず壁の一部がフロランスを潰さんと押し出された。小さく舌を打ちながら石柱を破壊し、翼を霧散させて降り立つ。

「ズルはできない、と。なるほど。面倒ですね」

独り言ちると、重い足取りで奥へと進んでいった。

そうしてどれだけ経ったか。いくら歩いても変わらない景色に、フラストレーションが募っていくばかり。あつたことと言えば、アーススクローラーという砂漠の肉食怪物モンスターが襲ってきたことのみ。しかしそれすらも片手間で始末できる程度の相手だ。手応えなどカケラも感じなかったため余計に不満が蓄積していく。

そして行き止まりに突き当たったことで、ついに忍耐の限界が来た。

壁に手を当てて、手のひらに魔力を集中させる。範囲を通常より絞り、その分の威力を上させ——放つ。

「獄炎！」
ヘルレイズ

放たれた全てを焼き尽くす黒い炎の奔流は目の前の壁を溶かし、その先の壁も、さらに先の壁をも溶かし、ゴールまでの道を作り出した。一直線に開けられた穴の向こうには、既にゴールしていた者がいたのか、複数の人影が見える。

壁が穴を塞ぐよりも早く駆け出し、一散走りに向かう。

その先で待っていたのは。

「……ドロールに、グロキシニア……」

「おや、キミに名前を知られているなんて、光栄つスね」

「こうして顔を合わせるのは初めてですね。……計り知れない力を感じる」

厳かな青い肌と4本の腕という通常の巨人族とはまるで異なる身体に、ボロ布で顔を覆っている巨人の王ドロールと、腰まで届く紅色の髪と尖った耳、背中には中性的な容姿に見合う華奢な肉体とは反対の、揚羽蝶を想起させる立派な羽を持つ妖精の王、グロキシニアだった。

しかし王というのは過去の話。この場にいるのは王ではなく——〈十戒〉、〈忍耐〉のドロールと、〈安息〉のグロキシニアだ。

かつて兄の理解者だった二人。それが今、敵として現れた。

経緯は知らない。理由も知らない。もしかすると、命を天秤にかけた結果なのかもしれ

れない。けれど——どうしようもなくムカついた。

いや、この感情は同族嫌悪に近い。

必ず、なにがあつてもついていくと決意していたのに、魔神王に屈してしまった自分が重なつて見えた。

きつとこの二人も、好きで〈十戒〉にいるわけじゃない。元々は反対の立場だったのだから。しかし立ちはだかる以上は敵だ。情けをかけるつもりはない。

静かに決意して、没頭していた意識を起こす。いつの間にかフロランス以外にも多数の人間たちがいた。その全員がここまでたどり着けた強者ということだ。

そんな参加者の中には、人間ばかりのこの場では一際異彩を放つ一人の巨人族がいた。その巨人族が、ドルイドの里への道中、ディアンヌと共にガランと交戦していたとき感じた魔力の持ち主であつたと気づき、その胆力に素直に感心する。

メリオダスたちの姿はまだ見えない。まだ迷宮を彷徨つていいのか——と思つた瞬間、背後の壁が轟音を響かせて派手に粉砕された。何事かと目を向けると、奥からこちらに走ってくる複数の人影と巨大な一つの影。それは迷宮で分断されたメリオダスたちと、名前だけは知っている〈強欲の罪〉^{フォックス・シン}のパン、そして記憶を失つた巨人族の少女、〈嫉妬の罪〉^{サイベント・シン}のディアンヌだつた。

「役者は出揃つたみたいっすね」

「では……そろそろ始めましょう」



「ようフロランス、お前も無事みたいだな！」

「ええ、なんとか。少し危ないところでしたけど」

主に迷宮が、という意味だが。

そんなことはおくびにも出さずにも返しながら、辺りを見回す。ドロールが魔力を用いて戦いの舞台を作り上げたことから、どうやら参加者は打ち止めらしく、これ以上誰かがやってくる様子はない。迷宮に残った人々はどうなるのだろうか、という疑問が浮かんだ瞬間、グロキシニアが心を読んだように、無慈悲に告げた。

「それじゃ、残ったゴミ虫くんたちは一掃するっす。——霊槍バスキアス、第九形態『死荊』^{デスソーン}」

翠色のタコのような形状を取っていた霊槍が光とともに分解され、次の瞬間無数の黒い荊へと変化した。それはまるで意思を持つかのように動き出し、迷宮を彷徨う命へ矛先を向ける。

『死荊』^{デスソーン}はキングの扱う『光華』^{サンフラワー}では排除しきれぬ害悪を死滅させるために神樹の遥

か上層に生えるという恐怖の荊。それは、命という光を求めるように、次々と挑戦者たちを穿っていく。

「……迷宮中の命ちゆう命が、一瞬で……消えてもーたわ」

時間にして一分も経っていないだろう。だというのに、瞬く間に数百は下らない数の挑戦者たちが散った。

啞然とする参加者たちをよそにキングとグロキシニアが言い争っているようだが、それも当然だ。妖精——それも初代の妖精王が〈十戒〉に寝返ったことなど、キングが知るはずがないのだから。キングは、グロキシニアは3000年前に魔神王の手によって命を落としたと聞かされていた。とつくに死んだと思っていた偉大な人物が敵に回ったという衝撃は計り知れない。

「あたしがなぜ〈十戒〉にいるか、それを聞きたいならこの祭りで優勝すればいい。そうすればなんだって答えてあげるっスよ〜?」

「くっ……!」

キングが押し黙ったのを見て、グロキシニアは改めて参加者たちを見下ろし、口を開く。

「さあ、それじゃあいよいよ、大喧嘩祭りを始めるっス! 進行補佐のタイズーくん、出番っスよ〜!」

「は、はーいー！」

グロキシニアの呼びかけに、ドロールの足元から顔を覗かせる大柄な男——タイズーが、情けない返事とともにグロキシニアと入れ替わるように参加者たちを見下ろした。

それから暑苦しい前口上とともに大喧嘩祭りを進行させる。

「初戦は二人組ペアでのタッグマッチ方式で戦うこととする！ アーユー レディ!？」

誰一人それに返さず、微妙な空気が訪れたところで、新たな声が響く。

「ちよつと待った！ 参加者はまだここにいます！ ——ゴウセル、ただいま参上！」

「ぐえっ」

命を持たない人形であるがゆえに、『死デス荊クラウシ』の魔の手から逃れたのだろう。しかし一人だったせいで攻略に時間がかかり、結局開始直前になって到着したというところか。

「ゴウセル殿、無事でよかったです！」

「ゴウセル……？ どこかで聞いた名です……」

「い、いたた……」

一人は安堵を、一人は疑問を抱える中で、ゴウセルの足元から小さな声が聞こえた。そちらに目を向けると、

「ん？」

「あ、あのー……少し足をどけていただけですか？」

「おつとすまない、着地点の計算を若干謝つたらしい」

「い、いえいえ……よく影が薄いと言われますから……。お気になさらず」

「その声音……骨格……口調……お前は……エスカノール、久しぶりだな」

声の主は、小柄な男性——メリオダスが探していた〈傲慢の罪〉^{ライオン・シン}のエスカノールだった。

ゴウセルが足をひよいとどけると、エスカノールは後頭部をさすりながら上体を起こす。その姿をみて、エリザベスは目を疑った。目の前の痩せ細った男が、メリオダスやフロランスよりも強いという事実を、どうしても信じられなかった。

「わ——っ！ ど、どどどどどうしよ——!?!」

「あれが……〈傲慢の罪〉^{ライオン・シン}のエスカノール様……?」

「あれがですか?! にわかには信じがたいのですが……!」

「気持ちわかる。今のアイツほど傲慢からかけ離れた存在はいないもんなあ……」

あまりに情けないその姿に、強烈な猜疑心をおぼえるのも無理はない。

しかしそんな二人をよそに、エスカノールは割れた眼鏡を握りしめて叫ぶ。

「マーリンさんからいただいた大事な眼鏡^{アイテム}が完全に壊れてしまったー!?! こ、これがな

いと僕は……僕は——!」

「落ち着け、エスカノール。幸いにも今は夜だ。それを直すには十分な時間がある」

「ほ、本当ですか……！　よかった……！」

マーリンの言葉に一転、眼鏡を優しく持ち上げて安堵の声を上げる。

この眼鏡にはエスカノールの魔力を抑制する効果があり、直すとなればそれなりの時間を要するが、そこはブリタニア一の魔術士。一夜もあれば完璧に直せるだろう。

「ふーむ、落ち着いたみたいだし、そろそろ組み分けをするっすよ！　でわでわドロール君、よろしくっす」

「二人一組ですね……」占盤術」

「わ、わわっ！　なんだ!？」

ドロールの魔力により各人の立っていた地面が宙へ浮かび、ある程度の高度で停止する。

「今、同じ浮石に立つ者同士こそ運命に選ばれし共闘者なり……。さあ、互いの生死と誇りを託し、存分に戦うがよい！」

「同士……なるほど。つまり私のペアは——マーリン、ということですね」

「よろしく頼むぞ、フロランス？」

こうして、バイゼル大喧嘩祭り初戦のペアが決まった。

「しかしまたあなたとは……」

「なにか不満か？」

「いいえ、むしろ百人力ですよ。あなたがペアでよかった」
「ふ、ではその期待に応えられるようにせねばな」

各ペアを眺めて、満足そうに頷いたグロキシニア。だが一人、ペアの存在しない者がいた。

「おつとつと、一人だけ運命の相手に恵まれなかったみたいっスね。既に運が尽きちゃってたりして、プププ。まあ、それは可哀想だから、キミたち！」

グロキシニアが手を叩く。すると上空から三体の異形——魔神族が降り立った。

「よし、じゃキミが彼と組んだげて。ついでだからキミらも出ることに……おつ、キリよく16組になったっスね。重畳重畳」

そんな小さな呟きは、タイズーの声で掻き消された。

「それでは、ただいまよりタッグマッチを開始する！ 各自の足場はランダムに一つの舞台に到着する！ そこに到着したペアが一回戦の敵となる！」

その言葉に合わせるかのように浮石が動きます。

そして辿り着いた先で待っていた対戦相手は——、

「マ、マーリンとフロランス殿……!?!」

「ほう？ アーサーに、異国の剣士 ナナシか。どちらも手強いな」

「ええ。……マーリン、アーサーは私が相手をします。あなたはあちらの剣士の方を頼

みます」

「ふむ……？ 別にそれは構わないが、何故だ？」

「単純ですよ。——彼が内包する力には目を見張るものがある。それを引き出す手助けをしてあげたいのですよ」

「なるほどな。……アーサー」

「？」

「文字通り死ぬ気を出してかかれ」

——さもなければ、数秒後お前は死体になって転がることになるぞ？——
アーサーには、そんな幻聴が聞こえた気がした。

「……いや、殺しませんからね？」

第8話／心の内

キヤメロットの新王、アーサー・ペンドラゴンは、改めて目の前に自然体で佇む少女——フロランスを観察する。肩に少しかかる程度に揃えられた、鴉の濡羽を想起させる艶やかな黒い髪が靡き、奥底に強い意思を宿した翠色の瞳はまっすぐにアーサーを見据えていた。身長はメリオダスに比べやや低い、それに反比例するように大人びた雰囲気を感じる。

身につけているのは必要最低限の鎧甲冑と、飾り気のないシンプルな片刃の剣のみ。外見だけならば普通の華奢な少女だが、その実体は魔神族〈十戒〉の一人である『真実』のガランを純粋な腕力のみで圧倒してみせた傑物。自分はもちろん、聖騎士たちや〈七つの大罪〉ですらも一蹴したガランをだ。しかし、自分の持ち得るあらゆる手段を講じれば、一矢報いることくらいはできるのではないかと思っていた。

——過小評価をしていたつもりはなかった。しかしこうして正面から相対すると、そ

の認識は甘かったのだと理解させられる。

およそ災害という災害を人の形に押し込めたような圧倒的な存在感。魔神族特有の禍々しい魔力も一役買い、想像以上の威圧がアーサーに襲いかかる。

無意識のうちに必要以上の力で柄を握っていて、指先は真っ白に変色していた。それに気づいて、ゆっくりと指を解き、深く呼吸する。力み過ぎた体を脱力させ、いつ、どこからでも対処できるよう神経を研ぎ澄ます。

そして、気持ちを入れ替えるために、一つ瞬きをした。

——刹那。

視界は紅に染まっていた。

「——ッ、わ、ああああ!!」

それは、荒れ狂う炎の奔流だった。チリチリと肌を焼く熱量を前に、アーサーは半ば無意識に横へ飛んだ。瞬間、すさまじい轟音とともに炎は通過していった。

なんとか避けられた、と。安堵から額の汗を拭うアーサーは、背後から膨大な魔力を感じ慌てて振り向く。そこには少しの衰えも見せていない炎が、アーサー目がけて再び迫っていた。

「まさか、迫尾してきてる——!?!」

驚愕は一瞬。

あのフロランスだ。そのくらいの芸当はできて当然だろうという考えを頭の片隅へ追いやり、思考を加速させる。

防ぐ——あの熱量を正面から受け止めれば骨も残らない。論外。

避ける——いちちごっこになるのは目に見えている。

ならば残るは——迎撃のみ。

「はあああ……！」

焦りはなかった。自分ならばやれる——いや、この程度でできなければならぬ。

今はただ、目の前のことだけを考える——！

剣を抜き放ち、縦に一閃。炎の波が割れた。二つに分かれた炎はアーサーの両隣を通り過ぎ、やがて勢いを失い、蒸発するように消えた。正確には用済みになったためフロランスが消したのだが。

ともあれ見事ピンチを乗り越えて見せたアーサー。わずかに呼吸は乱れているが、目立った負傷も無い。

一連の剣さばきを見て、フロランスはほう、と感心するように息をもらす。

「では次です」

「はい！」

フロランスが指を鳴らす。それはマーリンもよくやっている、魔法を発動させる合

図。

反射的に身構えるアーサー。

しかし次の瞬間、その体はなんの予兆もなく吹き飛んだ。なにが起こったのか分からず呆然とする。だが、腹部に感じる痛みから、そこに攻撃を食らったのだと理解する。

単純な炎の魔法の次は、目視不可な謎の攻撃。

「——いや、見えないだけじゃない。魔力が感じられない?!」

その答えは簡単。攻撃魔法に『透明化』と『感知不可』を掛け合わせたのだ。故に見えることはなく、感じることもない。

「くっ……！」

正体不明の攻撃魔法が、アーサーの体を打つ。

肩を、背中を、腰を、頭を、腕を、足を、胸を、顔を。

幸いだったのは、これがあくまで魔力を引き出すための修行の一環だということ。そうでなければ、今頃アーサーの意識は飛んでいた。

しかし、だ。アーサーは誰にも抜けないとされていた剣を抜いて、更にはブリタニア一の魔術士であるマーリンに目をかけられているのだ。その身は未だ未熟なれど、宿す才能は間違いなく超一級品。

その証拠に、アーサーは次第に攻撃魔法を躲せるようになっていた。無論ギリギリ対

応できるくらいに手加減していることもあるが、それ以上にフロランスの予想よりもアーサーの才覚が高かった。

「なるほど、マーリンが目をつけるだけのことはある」

「うわっ！ 急に早く!?!」

速度の上がった魔法でも、擦りはするが被弾まではしない。

その様子を見て頷き、再び指を鳴らして魔法を消す。

「き、消えた……? 助かった……」

「では次で最後です。思う存分——殺す気で来てください」

「え」

そう言つて剣を抜き、受けの姿勢を取るフロランス。

数秒ほど固まっていたアーサーは、やがて決心したように構えて、地を蹴る。そうして肉薄したアーサーは、言われた通りに全力で剣を振り下ろす。

「はあっ!」

ブレのない、綺麗な剣筋。まっすぐにフロランスを断ち切らんと放たれたその剣は、間に挟まれたフロランスの剣によって防がれる。しかしそうなることを予期していたように、アーサーは己の剣を滑らせるようにしてフロランスの剣から離し、返す刀で袈裟斬りを放つ。

それをバックジャンプで大きく避け、着地と同時に前進。一瞬で眼前に現れたフロランスに対し、アーサーの動きが固まる。

その一瞬でアーサーの懐に潜り込み、胴へ拳を打ち出す。華奢な腕からは想像もできない恐るべき速度と威力を秘めたそれは、鈍い音とともにアーサーの体を浮き上がらせた。

「ごっ……かつ……」

湧き上がる嘔吐感と鈍痛に、思わず蹲る。激しく咳き込んで立ち上がれる様子の無いアーサーに、フロランスが歩み寄る。

「アーサー、失礼ですがあなた、実戦経験は？」

「ごほっ……恥ずかし、ながら……まだ、片手で、数えられるていど、です……っ」
「……どうりで」

違和感を感じていた。技量は並みの聖騎士を遥かに上回っておきながら、反応が鈍い。例えば最初に放った炎。あれはあえて簡単に避けられるように調節していたというのに、アーサーは大袈裟にも横に飛んで回避した。次に放った不可視の魔法こそ冷静に対処できていたものの、直接剣を交えたからこそ分かった。アーサーには、圧倒的に実戦経験が少ない、と。

お手本のようにまっすぐな剣筋だったり、予期せぬ行動に対して硬直したりと、たし

かに技量こそ高いものの、言ってしまうえばそれのみだ。

高い能力を完全に扱える経験が少なすぎた。故に、こんなにもあつさりと沈められたのだ。

しかし裏を返せば、経験さえ積みめば化けるということだ。〈十戒〉に匹敵する魔力に、伸び代のある剣術と肉体は未恐ろしいものを感じさせる。フロランスには、アーサーが成長しきったときは、きつと〈十戒〉はおろか自分でさえも一筋縄ではいかないだろうという確信がある。

その力は、メリオダスを救う足がかりになるだろうか——そんなことを考えてしまう自分に、強い嫌悪感を抱いた。

(最低ですね……私は……)

そう、最低だ。自分の都合で未来のある若人を巻き込んでいいはずがない。それでは父親と何も変わらない。

負の思考がループする。その度に嫌悪感が増していく。

「……ひとまず、少し休んでください。手加減したとはいえ、相当なダメージがあるのでしよう」

「は、はい……そうさせてもらいます……」

少しでも意識を逸らすために、体を仰向けに倒して荒い呼吸を繰り返すアーサーにそ

う言葉をかけて、フロランスはマーリンとナナシの戦闘を眺めることにした。
自身への嫌悪を、拭えないままに。



気がつけば、バイゼル大喧嘩祭り初戦も佳境に差し掛かっていた。

特に注目するべきは、エスカノール&ホークペア対ゴウセル&ジェリコペアだろう。片や最弱同士、片や聖騎士同士という、どう足掻いても勝ち目のない組み合わせだが、突如ゴウセルのペアであるジェリコがゴウセルに対して攻撃したのだ。実力差からジェリコは一瞬で沈められたが、その後のゴウセルの魔力による影響か、夜にも関わらずエスカノールの魔力が発動し、一時的にだが〈十戒〉をも凌ぐほどの強さを得た。

そして今まさに、ゴウセルとエスカノールの一騎打ちが行われようとしている。共に神器を使用しての全力を放つつもりだ。

ゴウセルの神器、双弓ハーリット。

エスカノールの神器、神斧リッタ。

ハーリットに妖しい光りが装填され、リッタから陽光が放たれる。

そして——互いの魔力が、放たれた。

轟音。次いで、吹き飛ばされそうになるほどの爆風が吹き荒れる。

やがてそれが収まると、全員がゆつくりと目を開ける。結果は、一目瞭然だ。魔力の矢を受けて硬直しているエスカノールと、それを鋭く睨みつけているゴウセル。

ゴウセルが勝利し、エスカノールが敗北した。

一見するとそうだろう。しかし、よく見れば、エスカノールの魔力は明後日の方向へ放たれていた。

ゴウセルの魔力によるものか？——否、それは明確な意思で放たれたものだ。心を弄んだ大罪を償わせるために、ドロールとグロキシニアへ向けた怒りだ。

「がっ……は、っ」

「ぬかった……！　よもや我らを狙う、とは……」

全員がそちらへ目を向けると、一撃で瀕死に追い込まれた〈十戒〉の姿が飛び込んできた。

祭りの根幹を崩すような行為に、純粹に願いを求めてやってきた者たちが怒声を上げる。

「なんのつもりだ……！」

「祭りを壊す気か——！」

困惑や怒りなどの声が飛び交う中、バンはいち早くメリオダスの指示を仰ごうと声をかける。

「団ちよ、どうす——」

しかしそこにメリオダスの姿はなく、同時にドロールたちの前に何者かが降り立つ。

「始めようぜ、祭りの本番を」

拳を握りドロールと対峙しているメリオダスと、背中合わせでグロキシニアと対峙しているフロランス。

まるで合図でもあったかのように、二人は同時に飛び出した——。

一直線に向かってくるフロランスに、グロキシニアはまず距離を取ることを選んだ。妖精族とは総じて魔力に特化しており、武力はそこらの一般人にすら劣るからだ。当然、フロランスはそうさせまいと剣を引き抜き、目視すら難しい速度で振るう。

——が、その直前に、グロキシニアの操る霊槍バスキアスが間に挟み込まれ、鏢迫り合いのような形になる。

「チッ」

「キミと近接戦なんてごめんっスからね」

軽薄な表情でそう言い、霊槍を操作してフロランスを弾き返す。

それに対し、背に闇で翼を作り出すことで、無理矢理にでも接近を試みる。強靱な大翼が空気を叩き、流星のごとき速度で空を駆ける。

「霊槍バスキアス第九形態、『死^{デス}荊』！」

周囲を飛び回るフロランスを落とすため、霊槍は持ち主の意思に応じてその身を死の荊へと変化させる。

大喧嘩祭りの挑戦者たちを狙ったときとは違い、対象はフロランスただ一人のみ。その密度は段違いだ。

ここで空中にいることが災いした。正面、背後、頭上に加え、足元からも殺到する荊に対しては、剣一本では対処するのが難しい。

故に、全方位から襲ってくる荊を、フロランスは獄炎を放出することによつて燃やし尽くし、追撃の暇を与えずグロキシニアに肉薄する。

「しまっ——」

「はあっ！」

銀閃が、グロキシニアを切り裂いた。

咄嗟に後ろに飛ぶことで体が両断されることは避けたが、肩から腰にかけて深い切創

が刻まれた。吹き出した血が、フロランスの顔を汚す。

それに構わず、続けて繰り出した強烈な蹴撃がグロキシニアの脇腹を抉った。

華奢な体はそれだけで派手に吹き飛び、大地にめり込む。

「かつ……、」

肋骨が数本折れたか。血を吐きながら冷静にそう判断する。

天を仰げば、トドメを刺すために急降下するフロランスが見える。それを阻むように、突如横合いから巨石がフロランスめがけて飛来した。

慌ててそれを両断しようとしたところで、グロキシニアが再びバスキアスに魔力を通すと、一つの巨大な華が咲いた。

月光のような淡い光を放つ、神秘的な華が。

——ムーンローズ 霊槍バスキアス第七形態、『月の華』

”いのち 生命の雫”

華から滴り落ちた一滴の雫は、グロキシニアの体に当たって弾け——満身創痕だった体が一瞬で完治した。

「厄介な……」

「ヒヤヒヤしたけど、これで仕切り直しっす」

油断なくフロランスを見据えながら、バスキアスが射出される。

身を振り、避ける。そのまま通過していくバスキアスを尻目に、刃に闇を纏わせ――振るった。すると、闇が刃となって打ち出され、グロキシニアへ迫る。

先の攻防で近接戦に持ち込むことは難しいと判断した結果、選んだのは遠距離戦だった。威力は落ちるが、ある程度連射が可能な闇の刃は、着実にグロキシニアを追い詰める。

直撃はもちろん、掠っただけでも重傷は免れない闇の刃を避けながら、その隙をカバーするために並行してバスキアスを操作しなければならぬ。

極限まで高められた集中力で、攻撃を捌いていく。

持久戦になれば、不利になるのはグロキシニアの方だ。魔力だって無限じゃない。使えば使うだけ消耗し、いずれ底をつく。

一方フロランスは魔力が尽きたとしても、並外れた武力がある。拳一つで地を割ることすらできるフロランスと殴り合いができる存在など、それこそフロランスの兄弟のみだろう。

狙うは短期決戦。

闇の刃とバスキアスでは、バスキアスの方が強い。故に、迫り来る無数の闇の刃を強引に掻き消しながら、再びバスキアスを射出する。

いくらフロランスとて、攻撃直後は隙がある。

バスキアスの穂先が、唸りを上げて迫る。剣は振り切った状態で、防ぐことはできない。そして回避も、わずかに遅かった。たとえ今全力で回避を試みても、腕の一本は失うか。

やった、と。グロキシニアがそう確信した瞬間——甲高い音と共にバスキアスが反転し、その穂先がグロキシニアへ向けられた。

「なっ——!?!」

間一髪バスキアスを寸前で停止させ、その穂先が自分の体を穿つことはなかったが、グロキシニアの思考は驚愕に染まっていた。なぜなら、今フロランスが使った技は——

「全フル……反撃……?」

メリオダスの魔力、全フル反撃だったのだから。

「何故、キミがそれを——メリオダスの魔力を使えるんスか?」

「何故、と言われなくても……見て覚えた、としか言いようがありません。昔から、魔力の扱いだけは得意なんです」

無茶苦茶だ。魔力を見て覚えたなんて、なんの冗談だ。

グロキシニアは軽い目眩に襲われた。

そして、最悪の可能性に思い至る。

(まさか、あたしの魔力も——?)

「たとえばそう……こんなことだつてできますよ?」

不敵な笑みを浮かべ、手を突き出す。そうして手首を軽く内側に曲げると——それに合わせてように、バスキアスが動いた。

いつのまにか、バスキアスの制御は自分の手から離れていた。気づいて、背筋が粟立った。

つまり、今この瞬間、フロランスがその気になれば、グロキシニアは己の武器で命を落とすこともあるのだ。

妖精族の天敵とも言える能力に戦慄を覚え——直後に、バスキアスの制御がグロキシニアの手に舞い戻る。つい先程までは意識すらしていなかった繋がり、とても尊く感じた。

「やはり、それは私と相性が悪いようですね。その霊槍自体に宿る意思のようなものが、私の魔力を拒絶した……?」

「……とんでもないっすね。まさかあたし以外がバスキアスを操る日が来るなんて、思つてもなかった」

手を閉合せながら、難しい顔で考察するフロランスを見て、グロキシニアは冷や汗を流す。妖精王にのみ扱うことを許されるという霊槍の性質上、取り返すことはできだが、そうでなければフロランスが自らの意思で手放さない限り、バスキアスはフロラン

スの手にあつただろう。

魔神王の娘に恥じない、規格外の魔力だ。

「——まあ、いいです。あくまで目的はあなたを倒すこと」

穏やかな声色とは裏腹に、瞳には燃えるような敵意が宿っていた。

「警告です。命が惜しいならば、今すぐに戒禁を捨ててください。そうすれば私はあなたを攻撃しない」

「……いいや、あたしは——」

「私には、その戒禁を取り出す術がある。あなたが望むのなら、傷つけることなく回収することが可能です」

揺れる。囚われていた呪いから解放されると聞いて。力の抜けた体は、グロキシニアの内面を如実に示していた。

視線を、メリオダスと交戦していたドロールへ向ける。傷がない場所を探す方が難しいくらいに痛めつけられたドロールと、無傷のまま佇むメリオダス。勝敗は明らかだった。

揺れる。揺れる。揺れる。

「あたし、は——」

弱々しく、口を開く。

たどたどしく紡がれる言葉は、

「っ!？」

——遠来した七つの黒い流星に、掻き消された。

第9話／打ち砕かれる希望

——最悪だ。

ひたすらにその一言だけが浮かぶ。

七つの黒い流星——その正体は、グロキシニアとドロールとの戦いで撒き散らされた殺気に誘われてやってきた〈十戒〉だ。

一人だけ姿が見えないが、恐らくはエスカノールに敗れたのだろうと推測する。

しかし、こうなってしまうては各個撃破という目標は既に不可能となった。

一人一人が今のメリオダス以上の力を持つ精鋭である以上、逃げ切ることは容易ではない。仮に逃げられたとしても、ドロールの魔力により閉じ込められた他の参加者たちは間違いなく死ぬ。

つまり、ここで全員を倒すしか、道はない。

メリオダスの眼前にはゼルドリスが。

フロランスの眼前には銀髪の青年——エスタロツサが。
〈十戒〉の中で最も力のある二人が立ち塞がっていた。

「兄様！　まずは正面からの離脱を！」

メリオダスの身を案じてそう叫ぶが——メリオダスはまるで聞こえていないとばかりに神器を強く握り、水平に薙ぎ払った。

並みの相手なら認識すらできずに死へ向かう斬撃を——ゼルドリスはそれを遥かに上回る剣速を以て、刹那の間に神器を握る腕を切り落とした。

その一瞬の攻防が合図になったのか、なんの動きも見せなかったエスタロツサが手に魔力で刃を形成し、フロランスの心臓をめがけて突き出した。

「フルカウンター全「反撃」！」

それを数倍の威力にして跳ね返し、続けて空いた手から獄炎を放出して大きく後ろへ飛ぶ。

「おいおい、久しぶりの再会だろ？　出会い頭にそれは酷えんじやねえか？」

「——っ!？」

背後。囁くように聞こえた声に、フロランスは咄嗟に肘鉄をぶちこむ。

しかし容易く受け止められ、そのまま肘の骨を碎かれる。

「っあ、」

電流のように走る激痛に呻きつつも、即座に闇を総動員して回復させる。

そんなフロランスを、エスタロツサは軽薄な笑みで見下ろす。

「どうした？ 随分と弱いなあ。あの頃のお前はどこへ行ったんだ？」

「だ、まれっ！」

憐れむような声色にフロランスはエスタロツサを睨みつける。その目は射殺さんばかりに鋭かった。

激発に任せて、技術の一切を捨て去り、ひたすらに力を込めて剣を振り抜く。

大地をも裂く斬撃を前にして、エスタロツサは酷く冷静だった。

霧散させていた魔力を再び刃の形へ収束させ、軽く腕を振る。

次の瞬間——フロランスの放った斬撃は数倍の威力となって、フロランスへ跳ね返る。

線だったはずの攻撃は面となり、炸裂した。

「くあつ……っ」

寸前に闇を全身に張り巡らせ被害は最小限に抑えたが、完全に防ぐことはできなかった。

ピリピリとした痛みはあるが、致命的なモノはないようだ。

所々から血を流しながらも、毅然としてエスタロツサと向かい合う。

「まさか、忘れたわけじゃねえよな？ 俺の”全反撃”を」フルカウンター

「そのまさかですよ、我ながら馬鹿だと思います。……しかし良かったのですか？ 私の前でそんな技を見せて」

「あん？ そりやどういいう——」

エスタロツサの言葉は途切れた。

突如横合いからメリオダスが吹き飛んできたからだ。

「つと、危ねえな」

「な、兄様——!？」

危なげなくメリオダスを受け止めたフロランスは、その体に刻まれた傷を見て絶句する。

両腕は粉々に砕かれ、全身には深い打撲痕があつた。更に呪いのような魔力も埋め込まれており、この状態では戦闘どころか剣を握ることすらできないだろう。

”絶対強制……”アブソリュート

まずは埋め込まれた呪いを解くために魔法を発動させようとした直後、全てを焼き尽くす黒炎の鳥が、二人を飲み込んだ。

とてつもない衝撃と爆炎が辺りを包み——しかしそれを切り裂いて二つの小柄な影が現れる。

「ふむ……手応えはあった。メリオダスのみ……だけどね」

影の片割れが、すさまじい速度で黒炎の鳥を放った魔神——モンスピートへと迫る。

その身から溢れる殺意はモンスピートのみに収束し、あまりに強烈なそれにモンスピートは思わず硬直した。

「モンズ……ピートオ!!」

腕を振りかぶり、モンスピートの顔面をめがけ、かたく握った拳が突き出された。

——轟音。

その細腕からは想像もつかない剛力によってモンスピートの体が沈み、なおも衰えない衝撃は大地に巨大なクレーターを作り出した。

間違いなく瀕死の状態だろう。

だが上位魔神族の回復力はよく知っている。故に確実にトドメを刺すために剣の柄を握る。

直後、地面を陥没させるほどの踏み込みでもって、フロランスへ呐喊する者が一人。

「デメエエー！」

怒りの色に染まった瞳をそちらへ向ければ、激情のままに拳を振り下ろすモンスピートの相方的存在——デリエリがいた。

フロランスは避けるそぶりも防ぐ動作も見せず、正面から拳撃を受け止める。

「つらあ！」

「……そんな雑な拳が通用するとも？」

ダメージを受けた様子もなく、嘲るように呟いた。

それを聞いて、デリエリの憤怒が増大する。

「舐めてんじゃねえぞ！」

叫び、先ほどよりも威力の上がつた拳撃がフロランスを捉える——ことはなく、数倍の威力となつて跳ね返つた。

”フルカウンター全反撃”

「なっ——!？」

正面からまともにその衝撃を受け止めたデリエリは吹っ飛び、激痛に身を振らせる。対するフロランスはというと、全くの無傷だった。

付着した土を払いながら、ポツリと呟いた。

「あと、六人」

フレデリカの左額に三角からなる漆黒の紋様が浮かび上がる。跳ね上がった魔力を肌で感じて、〈十戒〉の面々は冷や汗を流す。

そして、地面を踏み砕く勢いで、フロランスは〈十戒〉たちへ肉薄した。

戦闘は、激化していく。



「な、なんつー戦いだよ……!」

ドロールの”ギガントエンブレ巨神の抱擁”により作り出された、戦場とは隔離された場所。そこで、水晶に映し出されたフレデリカの戦いを目の当たりにして、ホークが戦慄したように呟いた。

今まで経験してきた戦いとは、文字通り次元が違う。

国一つを簡単に滅ぼすほどの威力の攻撃がポンポンと放たれているのだから。

「これが……〈十戒〉……!」

〈十戒〉の力を始めて目にする者たちが弱々しくもろす。仮にも迷宮を突破してきた実力者だが、ここまでの存在は流石に見たことはない。

フロランスはそれに単身で対抗できてはいるが、このままいけばなんとか——と考えられる者はいなかった。

「不味いな、押され始めた」

「それはそうだよ。あんな埒外の存在に対してあそこまで粘っていたこと自体が奇跡の

ようなものなんだから。たとえ、彼女がどれだけ強くても」

バンの言葉に、キングが反応する。

二人の言う通り、戦況は傾きつつあった。いくらフロランスが〈十戒〉を凌ぐほどの強大な力を持つとも、所詮は個だ。群に対抗するには厳しかった。

不安げに水晶を通して戦場を見つめるエリザベスの背後で、マーリンが口を開く。

「このままでは、いずれここにも被害がこよう。というよりも……フロランスは我らを気にして力を抑えているようだ」

「でも、脱出しようにも手段が……」

「私を誰だと思っている？ この程度の人数を運ぶのは造作もない」

「なら早く安全な場所に連れてってくれ！」

「まあ待て。ここで我らが脱出したとして、その後はどうする？」

「その後……？」

「見ての通り、旗色は悪い。このままではフロランスが倒れるのも時間の問題だろう。そうなれば奴らは大挙してブリタニアを制圧しにくるはずだ」

——そう、ここで逃げたとしても、〈十戒〉の手から逃れられる可能性は低い。

最高戦力の二人が倒れれば、〈十戒〉に対抗できる人材は少ない。たとえ〈七つの大罪〉が総力をあげて〈十戒〉を迎え撃ったとしても、勝利できるか定かではない。

特に〈十戒〉の中でも凶抜けているゼルドリスとエスタロッサがいる限り、正面からではどう足掻いても勝ち目はない。

「私が加勢したとしても、勝算はゼロに近い」

「じゃ、じゃあどうすんだよ!?! このまま黙って殺されるのを待ってつか!?!」

「——戦うのが無謀ならば、初めから戦わなければいい。それだけだ」

堂々とそう言い放ったマーリンにその場の全員が面食らう。

戦わないと。そう言ったのだ。

冷静な判断ができなくなっているギルサンダーは、掴みかからんばかりの勢いでマーリンに詰め寄る。

「どういうことですか! このままメリオダスたちを見捨てると、貴女はそういうのですか!?!」

「マ、マーリン様……」

「誰が見捨てると言った? ——説明は後だ、時間がない」

「待つ——」

ギルサンダーの言葉を無視して、半ば強制的に“瞬間移動”テレポルトを発動させる。

一瞬視界がブレたと思えば、次の瞬間立っていたのはリオネス城の中だった。

「(ハ、ハ)は……リオネス城?」

「ひとまずここならば安心だろう。私は向バイセルこうへ戻るが、くれぐれも変な気は起こして
くれるなよ?」

「なっ!?!」

「マーリン、どうするつもりだ?」

驚愕や疑問に答えることはなく、マーリンの姿は掻き消えた。



「はああ……!」

刀身に魔力を通して、振るう。

打ち出された魔力刃が〈十戒〉を襲うが、無駄な足掻きだと言わんばかりに打ち消された。

幾度となく繰り返した一連の動作だが、徐々にフロランスの動きが鈍くなってきた。

目にも止まらぬ剣閃は目で追えるようになり、モンスピートを沈めた剛力は落ち、簡単に受け止められてしまう。

細かい切り傷や重度の打撲に加え、激しい出血。立つことすら辛いだろう状態でも、フロランスが剣を手放すことはなかった。

両腕は力を失い垂れ下がっていて、気合いだけで剣を握っている状態だった。

しかし満身創痍の状態であろうとも瞳に宿る戦意は衰えておらず、むしろより鋭く〈十戒〉を射抜いてすらいる。

無論、〈十戒〉も無傷というわけではないが、戦闘に支障が出るほどでもなかった。

闇の魔力をもつてすれば傷を治すことはできる。しかしそんな余裕はフレデリカには無かった。少しでも隙を見せたら即座にやられる、そんな状況なのだ。

肩で息をしながらも、冷静に思考を巡らせる。

現状、〈十戒〉側で戦闘不能なのはドロールとモンスピート、デリエリのみ。そしてエスタロツサとゼルドリスのツートップは未だ健在。

対するフロランスは今にも倒れそうな状態だ。

「はあ……はあ……っ、」

絶望的。その一言に尽きる。

「エスタロツサ、メリオダスにトドメを刺しておけ。奴が回復しきる前に」

「……ああ」

ゼルドリスの指示に気怠げに返すエスタロツサは、意識を失い倒れているメリオダスに歩み寄る。

その手に、それぞれ形状の異なる七本の剣を携えて。

「っ、待て！」

「お前の相手はオレだ」

エスタロツサに攻撃を仕掛けようとした刹那、視界にゼルドリスが割り込む。

「ど、けえっ！」

もはやなりふり構わず、全力の剣撃をゼルドリスに叩き込む。当然防ごうとしたゼルドリスだが、想定を超えた脅力により弾き飛ばされる。

「なあメリオダス、本当はこんなことしたくはねえんだ。……分かるよな？」

エスタロツサの声に振り向けば、そこには胸に剣を突き立てられて絶叫しているメリオダスと、2本目の剣の切っ先を向けているエスタロツサが見えた。

「エスタロツサアア!!!」

「うるせえな」

その光景に、全てが嚇怒に塗りつぶされた。

燃え滾るような怒りと、堰を切ったように溢れ出すドロドロとした憎悪。

それらに任せてエスタロツサを切り刻もうとした——直前、強烈な斬撃が横からフロランスを襲った。

「ゼルドリス!! 邪魔をするな!!」

「早くしろ、兄者。そう長くは持たんぞ」

「チツ、分かったよ」

罪を罰するように、あるいは見せつけるようにしていたエスタロツサはゼルドリスの言葉に渋々従い、残る5本を一斉に突き立てた。

——上位魔神には心臓が七つある。どんな魔神でも、それを全て潰せば死ぬ。

たとえ魔神王の子息だろうとも、例外はない。

エスタロツサの手によって、メリオダスの命はあまりにもあっさり途絶え、同時に、ゼルドリスとの剣戟に敗れたフロランスの体から力が失われ——ゆっくりと、その矮軀が倒れた。

同時に、それを見ていた者たちは顔を蒼白に染める。

——次はお前たちだ。

そんな言葉が聞こえてきそうな光景だった。

〈七つの大罪〉の団員、そしてメリオダスに恩のある者たちは、メリオダスの死を間近で見て涙を流した。

最後の砦は壊され、待つのは蹂躪。

そう思っていた矢先、戦場だった場所に新たな人影が現れる。

「……死んではいけない。団長殿は……もう、手遅れか」

七つの大罪〈ポアアッセン〉のマーリン。

彼女は憂いを帯びた怜悯な瞳で、ぐるりと辺りを見渡す。戦闘の余波で破壊しつくされた中で、消えかけている命と、既に消えてしまった命が横たわっている。

しかし悼む暇もなく、ゼルドリスがマーリンへ問いを投げかける。

「誰だ、貴様は？」

「……会うのは初めてか。だがここで自己紹介など無意味極まるだろう？ その殺気が証明している」

「……」

「争うつもりはない——と言っても、無駄か」

〈十戒〉は既に戦闘態勢を取っている。対話の余地はなかった。

だが元より戦うために来たわけではない。メリオダスとフロランスの両者を連れ戻すために来たのだ。

〈十戒〉が動き出すよりも早く、マーリンは魔術を発動させる。

”完璧なる立方体”
パーフェクトキューブ

薄紫色の立方体が、〈十戒〉を包む。

魔界の秘術は〈十戒〉とて突破するのは容易ではなく、足止めとしてこれ以上最適なモノはない。

しかし突破できないわけではない。保って5秒と言ったところだが、それだけあれば

”瞬間移動”^{テレポート}を発動させるのには十分だ。

メリオダスとフロランス、そして自分を対象に”瞬間移動”^{テレポート}を発動させようとした瞬間——フロランスから、歪な魔力が発せられた。

(なに——？ 少なくとも魔力は底をついていたはずだが……なんだ、この魔力は……？)

例えるなら——無造作に食材を入れてかき混ぜた鍋のような、ごちゃごちゃとした魔力。一個人の持つ魔力としてはどう考えても異常だった。

事態はそれだけに収まらなかった。

瀕死寸前だった体は綺麗さっぱり治っていて、何事もなかったかのようにゆらりと立ち上がったのだ。

剣の刀身は根元から破損し、元々必要最低限しか身につけていなかった鎧甲冑もその役目を失っている。

そんな状態で、フロランスは一步踏み出した。

”完璧なる立方体”^{パーフェクトキューブ}はすでに破壊されており、〈十戒〉はいつでも動けるように構えていた。

倒したと思った相手が万全の状態で復帰し、あまつさえ再び向かってきたという状況は、多かれ少なかれ混乱を与えた。

しかしそれを押し殺しながら、油断なくフロランスを見据える（十戒）。

——風が、戦場に吹く。

いつのまにか、黒い霧が漂い始めたことに気づくと同時に——その場の全員の首が、同時に落とされた。

「——っは、」

それは誰の声だったか。

呼吸に近いそれを聞いて、全員の意識がはつきりと現実を認識する。

「なん、ツスカ、今の。たしかにあたしら、首を——」

緩慢な動作で、首に手を当てる。

飛ばされたと思った首は、初めから何事もなかったかのように繋がっていた。まるで今見たものが幻覚だったとでもいうように、傷一つなかった。

首を失った己の体すら見えたというのに、それら全てが嘘のように消えた。

あまりにも唐突に引き起こされた未知の現象に、混乱が広がる。

”マカブル・ミスト
幻死の霧”

そこに、一つの声が響く。

先程とはまるで別人のような、冷たい声音だった。

誰もがそちらを注視する。

「なんてことのない、単純な幻覚ですよ」

なんでもないように、声の主——フロランスはそう言った。

第10話／潜むモノ

魔神族が誇る精鋭、〈十戒〉。

リオネス王国所属の騎士団〈七つの大罪〉、および王国聖騎士。旅の芸人、異国の剣士、若き新王、巨人の戦士――。

ブリタニアでも屈指の猛者である彼らは今、かつてない異常と対面していた。

〈十戒〉との戦闘で敗北し、死の直前だった少女が何事もなかったかのように立ち上がり、戦闘前と何ら変わらない状態で再び〈十戒〉と相対しているのだ。

本人は涼しい顔で〈十戒〉を見遣り、なにかを確かめるように体の各部位を動かしているが、その異質さに皆言葉を失っている。

中でも特に衝撃が大きいのは、ブリタニア一の魔術士マーリンだ。この場の誰よりも魔術に長け、永きに渡り研究してきた彼女にとって、この状況は青天の霹靂だった。

瀕死の状態から一瞬で復活したのは百歩譲ってよしとしよう。問題は、フロランスの

内包している魔力だ。ちから

通常、魔力を二種類以上持つことは不可能——魔神王の代理として魔力を借り受けたゼルドリスなどの例外もいるが——と言ってもいい。

魔力とは己の思想や体験から発現するものであり、他人の魔力を宿すということは即ち、他人の魂を受け入れることと同義なのだ。

一つ例をあげよう。

〈十戒〉のフラウドリンに取り憑かれた聖騎士、ドレファス。彼の精神の強さはフラウドリンの操心の術をも意に介さないほどに頑強で、何者にも屈せぬ鋼の魂だ。

しかしそんなドレファスでも、一度フラウドリンの支配下に置かれてしまえば抗うのは難しい。時たま支配を振り切り表に出ることこそあったものの、肉体の制御権を取り返すには至らなかった。

自分以外の精神を——魂を受け入れるとは、それだけの危険性を孕んでいるのだ。

しかし今のフロランスには、多種多様な魔力が潜んでいる。その数は10や20は下らないだろう。人間、妖精、巨人、あるいは魔神。ありとあらゆる魔力がごちゃ混ぜになっているそれに、言いようのない気味の悪さを感じた。

先のグロキシニア戦で語った彼女の魔力による影響か、とマーリンが限られた情報から正体を推測していると、フロランスが動き出す。

「……動き、にくい……これが戒禁の力……」

整った眉をしかめながら、錆びついたロボットののような緩慢な動きで一步踏み出す。普通ならば動くことさえできないはずだが、フロランスは――

「――大したことはないですね」

と、つまらなさそうに言い捨てた。

そこで、今までほとんど感情を露わにしなかつたエスタロツサが、初めて瞠目した。

「俺の戒禁が……破られた……？」

エスタロツサの言葉に、〈十戒〉とマーリンの顔が驚愕に染まる。

戒禁の力を破る。それは聞くものが聞けば馬鹿馬鹿しいと一蹴するほどにあり得ないことだ。

戒禁とは魔神の王より齎されし呪詛。それを破ることはどれほどの力をもった魔術士でも――たとえマーリンであろうとも――解呪することは叶わない。

戒禁を無力化できるのは、それこそ生みの親である魔神王か同じ戒禁、もしくは最高神の加護やゼルドリスが魔神王より貸し与えられた魔力のみだ。

どのような手段を用いて解呪したのか――いち早くその結論にたどり着けたのは、グロキシニアとマーリンだった。

『何故……と言われても、見て覚えた、としか言いようがありません』

見て、覺えた。

「まさか——!?!」

『魔神王』の魔力。貸し与えられた劣化品であろうとも、戒禁を破るのに苦勞はしませんね」

淡々と告げられる事实に、ゼルドリスは眉間に皺をよせ、凝然としてフロランスを見る。そして静かに腰を落とし、柄に手をかけた。

ゼルドリスは、今のフロランスが今まで見たきてフロランスとは明らかに違ふと本能的に理解した。肉体は確かに本人のものだが、それを操る中身——即ち精神が、フロランスではない誰かにすり替わっている。

それは200年以上、誰よりも近くにいた弟であるゼルドリスだからこそ理解できた。

いつのまにか、この場の誰にも悟らせず、静かに。そうしてフロランスになりかわった『何者』かに対して、ゼルドリスは触れてはいけななにかを見た。

一層険しく皺を寄せて、目の前の『なにか』を睨む。

そんなゼルドリスを一瞥し、フロランスは虚空に手をかざした。

「いくら私と言えど、あなた達を一人で相手にするのは難しい。だから少しだけ、そこで静かにしててくださいね」

フレデリカが指を鳴らす。すると薄紫の立方体——パーフェクトキューブ 完璧なる立方体^が、ゼルドリスを除く〈十戒〉を覆った。

同時にフロランスの目の前の空間に亀裂が走り、そこからなにかが姿を見せる。

——それは、劍の柄だった。

片手劍にしては少しばかり大きく、しかし両手劍というには僅かに小さい。

全体に流れている紅いラインは、まるで早く抜け、と言わんばかりに明滅していた。

それに応えるように、フロランスは一息に引き抜いた。

そうして全貌を表したそれは、劍——と呼ぶには憚られるモノだった。

なぜならそれには、刀身がないのだから。もはや武器とすらも呼べるかどうか怪し

い、そんな代物だ。

しかしそれを見た〈十戒〉は、ことごとく目を細めた。ただの欠陥品ではないことを、即座に見抜いたのだ。

この世に二つとない、使用者の魔力を十全に引き出すことができる武器——神器であることを。

「神器、解放」

フロランス以外には到底扱うことのできない剣。

銘を——天剣アラギ。

「『魔神王』」

その特性は、『魔力変化』マジックチェンジ。

込める魔力に応じて刀身を形成するという、神器の中でも特異な特性を持つ。

未知の一手にゼルドリスは警戒を高める。

明らかに雰囲気が変わった今のフロランスを前にして仲間たちを救出する余裕はないと判断し、全神経を目の前に向けた。

〈十戒〉の中に、魔神王の魔力を持つゼルドリス以外に”パーフェクトキューブ 完璧なる立方体”を破壊できるものはいない。

つまり、完全な一対一。

いつのまにか不利な状況へ持ち込まれたことに、ゼルドリスは内心で舌を打つ。

対照的に、フロランスは余裕のある微笑みを浮かべていた。己の優位を確信している顔だ。……が、ゼルドリスにはどこか焦っているように見えた。

（『奴』の言葉を信じるならば……父上より貸し与えられた魔力を、『奴』はオレと同じように行使できる……つまり魔力に対する優位は失われたも同然。厄介だな……）

それに、とゼルドリスはフロランスの神器——正確には、魔力により形成された刀身

を見る。

(……あれは、まさか魔神王の魔力を形にしているのか？　だとすれば、それがあの神器の特性というわけか……)

思考を巡らせながらも、決して気は逸らさない。

魔力攻撃は互いに無効。ならば必然的に武力と剣技のぶつかり合いとなるが、ゼルドリスは先ほどの焼き増しになるとは到底思えなかった。

ゼルドリスの知らない魔術による自己強化や幻覚をも行使できるとなれば、慎重にならざるを得ない。

元々、先の勝利はフロランスが弟を殺すということを躊躇い全力を出しきれていなかった故に取れたもの。

だが今のフロランスには油断もなく、また躊躇もない。

かつてない強敵を前にして、ゼルドリスが取った行動は極めてシンプルだった。

「やはり、そう来ますよね」

——全力で、仕留める。

実の姉だろうが、邪魔をするならば容赦はしない。

音も無く、互いの剣がぶつかり合う。

あまりにも静かな衝突だったが、フロランスの立っている場所が凹んだ。それだけの

威力を秘めた一撃だった。

ゼルドリスの怒りと憎悪がこもった剣撃を正面から防ぎ、弾き返す。

大きく後退したゼルドリスへ、フロランスが肉薄する。即座に態勢を整えたゼルドリスは、剣が肉体に到達するより早く飛び上がり、袈裟懸けの一振りを回避した。

同時に切っ先を下に向け、闇の翼で空気を叩いて加速。心臓を狙って、渾身の力で突き出す。

しかしそこにフロランスの姿はなく、切っ先は虚しく地面を抉るだけだった。

驚愕のまま、上方から感じた魔力に振り向けば、薙ぎ払うように放たれた一閃がゼルドリスの頬を切り裂いた。

——”瞬間移動”。

この魔術は、あくまでも移動手段に過ぎない。どこでも自在に移動できるだけの、便利な魔術。

だが、攻勢に転化したとき、”瞬間移動”は凶悪な魔術と化す。

文字通り『瞬間』で行われる移動は、その気になれば頭上でも背後でも、正面であろうとも気取られることなく移動することができる。

速度を超越した、線と線ではなく、点と点を繋ぐ魔術。

たとえ発動するとわかっていても、どこに現れるかわからない以上、対処するのは難

しい。

（マーリンとメリオダスは既に退避済み……他の〈十戒〉も”完璧なる立方体”パーフェクトキューブの破壊は諦めて、静観に徹している。……そろそろ私も、限界が近い。やはりまだ早かったか……）

ゼルドリスと剣を交えながら、冷静に現状を確認する。

同時に、自身の限界が近いことを察する。ぶつつけ本番にしてはいい線をいったのではないかと自賛していると、突如ゼルドリスの剣速が増した。

「考え事とは余裕だな……！」

「これでも必死です、よー！」

心外だとばかりに声を上げつつ、小さく剣を弾く。

膠着しつつある。持久戦に持ち込むのは良策とは言えない。

だからこそ、この状況を好転させる一手を、フロランスは打った。一層強く振り下ろされたゼルドリスの剣に己の剣を合わせ、

”全反撃”フルカウンター！”

跳ね返す。

ゼルドリスの放った斬撃は爆発のような衝撃へ転化され、数倍の威力となって襲い掛かる。

メリオダスの扱う”フルカウンター全反撃”とは異なり、エスタロツサのそれは物理的攻撃を全て跳ね返すモノ。

魔力の伴わないその一撃は、ゼルドリスにダメージを与えるには充分だった。

「くっ……！ 貴様、エスタロツサの魔力まで……！」

鋭い目つきでフロランスを睨むゼルドリスだが、その氣勢とは裏腹にボロボロだった。

度重なる剣戟による疲労と傷、そしてそこに叩き込まれた”フルカウンター全反撃”がトドメのような形となった。

満身創痍とまではいかないものの、このまま戦闘を続けなければ負けるのは間違いなくゼルドリスだろう——が、フロランスもまた倒れる寸前だった。

「はあっ……はあっ……」

苦しげに息をしながら、膝をつくゼルドリスを見下ろすフロランス。

慣れないことを短時間とはいえ全開でこなし、無視できないほどに魔力を消費した影響で、多大な疲労が襲いかかる。

加えて、常に魔神王の魔力を刀身の形に維持することも容易ではなく、いつ魔力が解除されてもおかしくない。

一刻の猶予もない。

この場における最善手はいち早く逃走することだが――

「そろそろ限界みたいだなあ、フロランス？」

「くっ……！」

背後から聞こえた声に反射的に振り向いたのと同時、視界の端で拳を振りかぶるエスタロツサの姿を捉える。

咄嗟に挟み込んだ腕をエスタロツサの拳が捉え、軋みをあげた。万全の状態ならともかく、今のフロランスに抗う術はなかった。ボールのようにバウンドしながら、軽々と吹き飛ぶ。

ゼルドリスとの戦闘に集中するあまり、”パーフェクトキューブ完璧なる立方体”の維持が疎かになってしまったのだ。

ゼルドリスを除く〈十戒〉の消耗は無いに等しく、あと一步のところまで追い詰めたゼルドリスさえも闇を総動員させて傷を治している。このままでは完全回復まで数秒といったところか。

そうなれば本格的に勝ち目がなくなる。

既に魔神王の魔力はフロランスから失われてしまった。その華奢な体を守る盾は、存在しない。

だがフロランスは決して生存を諦めない。絶対に殺させない。

逃走する隙が無いのならば、隙を作ればいい。

背中に闇の大翼を生成し、飛翔する。

(一か八か……！)

上段に構えた神器に闇の魔力を通す。

限界を超えて注がれる魔力により、夜闇すら呑み込む漆黒の刀身からどろりと闇が溢れる。

直撃すれば〈十戒〉だろうと下級魔神だろうと等しく消しとばす、破壊の一撃。

飛びそうになる意識を気力で繋ぎとめながら、フロランスは神器を振り下ろし――。

〈十戒〉は、黒の奔流に飲み込まれた。

あるいは壁、とも表現できるだろう。事実、〈十戒〉にはフロランスの放ったそれが闇の壁に見えた。

だが対処できないわけではなかった。

魔神王の魔力を持つゼルドリスがいるのだ。ほんの数秒押し留めることができたらしい。それだけあれば、闇の壁を消し去ることなど容易い。

しかしフロランスは初めからそれを狙っているのだ。そのために極限まで威力を高めて防がせたのだから。

ほんのわずかな、数秒程度の時間でいい。

「そういうことか……!」

遅れて、意図を察した〈十戒〉の声が届く。

してやったり、とばかりに笑い、フロランスは魔力をかき集めて”瞬間移動”テレポルトを発動させる。

闇の壁を突破し、追撃を仕掛けようとしたゼルドリスの刃は空を切り——後に残ったのは、行き場を失った莫大な敵意と、目も当てられないほどの破壊痕だけだった。



「ぷいあ!?!」死にかけじやねえか!」

リオネス城の大広間。大喧嘩祭りの参加者たちが集まっているその場所に、今にも倒れそうなほどに消耗したフロランスが現れる。

幸いにも彼らの魔力を追って下級の魔神たちが差し向けられる、ということとはなかったようだ。

しかし、メリオダスの死により〈七つの大罪〉やエリザベスは大人なり小なり精神的に疲弊している。

中でもエリザベスは顕著だ。泣き腫らした目で、今もなおメリオダスの死体の側に佇んでいる。

「すみま……せん……私……」

「喋るな。……ふむ、単純な魔力切れと極度の疲労だな。腕以外のダメージはそこまで深くはないが……エリザベス王女、念のために治してやってくれ」

「……はっ」

ぐらついたフロランスの体をマーリンが受け止め、そこにエリザベスが手を翳す。

上位魔神の回復力をも上回る化け物染みた治癒の魔力がフロランスに注がれ、折れて変色した腕と体中に刻まれた傷が一瞬で治る。同時に、灼熱のような痛みと血を吐くような疲労感も瞬時に消え去る。

傷を治してもらった礼をしようと、足に力を入れて立ち上がった——瞬間。

フロランスの視界は闇に染まり、意識がぶつりと途絶えた。

そして、脳からの命令が途絶えた体は、今度こそ硬い床に倒れ込んだ。

第11話／今在るもの

また、守れなかった。

『いつもそうだ』

また、こぼれ落ちた。

『お前にはなにもできやしない』

どうして、届かない。

なぜ、空を掴む。

視界は、暗闇に突き落とされたみたいに真っ暗だった。

悔やむ。恨む。己の無力を。

手を伸ばしても、指先すら触れることは叶わない。

いつだって誰よりも前にいて、誰よりも戦って——誰よりも傷ついていたのに。少し

の幸福すら、許されないとこのか。

私は傲慢な神々を、決して許さない。

いつか必ず、その首に刃を添えてやる。増長しきつたプライドを、粉々に砕いてやる。覚悟しておけ、と。届かない叫びを吐き出す。泥中で、憎悪の念を曝け出す。

どれだけ無様でも、不格好でも、諦めない。泥を掻き分けて、死に物狂いで足掻く。

まだ、死ねない。こんなところで死んでたまるか。

その一心で、ひたすら上を向く。前へ進む。

——不意に、とん、と。背中を押された気がした。

その感覚に弾かれたように振り向いても、そこには誰もいなかった。当然だ。ならば錯覚だったのだろうか、と一瞬思考するが、それは一条の光が差し込んだことによりすぐに頭の隅に追いやられてしまう。

きっと、私の思いが作り出した幻覚だったのだろう。

だから、私は振り返らずに、まっすぐに闇を払い、光を求めて進んだ。

『——あなたなら、きっと為せます。だから、決して諦めないで』

泥から抜け出す瞬間、そんな優しい声が聞こえた気がした。

「……………ん、う……………」

汚れ一つない真っ白なシーツと布団に挟まれた小さな体が身動きをする。釣られてシーツが皺を作り出し、先程までは人形を寝かせているような光景に生気が宿った。

薄目を開ければ、窓からわずかに差し込む陽光を直に浴びて、ぎゅつと強く瞑つてしまふ。

ようやく目が慣れたところで、次は全身に重りをつけられているかのような感覚に襲われた。小さく呻きながら体を起こし、床に足をつける。

長く寝込んでいた影響だろうか。立ち上がった瞬間に視界が歪み、思わず膝をつきそうになった。

しばらくベッドに寄りかかり、治ったことを確認すると、寝ている間に着せられたであろう清潔な衣服を脱ぎ、『起きたらこちらに着替えていてください』というメモと共に置かれてあった服に袖を通す。

「ちよつと露出が多いような……………」

肩から二の腕、そして背中まで大胆に肌を晒し、トドメに割と際どい短さのスカートときた。申し訳程度の黒いストッキングを着用するが、却って扇情的な格好となつて

しまったような気がする。

ただ、外見が幼いこともあり、どちらかと言えば背伸びをしているようで微笑ましい印象を受ける。

元々着ていた服たちはもう使い物にならなくなったのだろう。その代わりなのか横にはもう一着、黒を基調とした長衣が置いていた。

こつちを着ればよかった、と少し後悔したが、どのみち変わらなかつたでしょうね、とため息をついた。

直後、着替え終わるのを見越していたようにコンコン、とノックの音が響く。

扉の向こうから感じる魔力はとても清く、持ち主の心をそのまま表しているかのようだった。

「ごうごう」

短く告げれば、キィと音を立ててドアが開かれる。

そこから顔を覗かせたのは、エリザベスだ。

エリザベスはフロランスを見た途端、花が咲いたように表情を明るくした。その様子から、相当長く寝込んでいたことが窺える。

「起きたのね！ よかった……！ それにその制服、よく似合ってるわ！」

「おはようございます、エリザベス。……ええ、まあ。少し露出が多いような気がします

が……」

「あはは……」

スカートの端を摘まんでみせると、エリザベスは曖昧な笑みを浮かべる。思うところが無いわけではないようだ。

「ところで、私はどれほど眠っていましたか？」

「ええと……二週間ほどかしら」

「そんなに……」

「死んだように眠っていたから不安だったけど、無事みたいでよかった」

「無事……とは、言い難いですけどね。幸いにも心臓は潰されていないようですが、とてつもない倦怠感が……」

「じきに治ると思うわ。気になるなら治しましょうか？」

「いえ、これくらいなら平気です。それよりも今は……やるべきことをやらなければいけません」

「……ええ、そうね」

エリザベスの悲哀のこもった微笑みに、胸が痛んだ。

刃物を突き立てられて、ひび割れるように、酷く痛む。

それを悟られないように、血が出るほどに唇を強く噛んだ。

「……すみません」

胸中を満たす負の感情を表に出さず、努めて平静を装いながら、消え入りそうな小さな声で謝罪を口にする。

それはメリオダスを死なせてしまったことに対してか、それとも真実を秘匿していることに対してか。それは本人にしかわからない。

重苦しい沈黙の中、フロランスは爪が皮膚を突き破るほど強く拳を握った。



「お待ちせしました、大ジョッキ3つです」

「待ってました!」

「しっかし、こんなに小せえのに偉えなあ!」

「む、私は子供ではありません」

「おっと、わりいわりい」

「こつちにエール2杯追加で!」

「はい! ただいまお持ちします!」

魔神族にブリタニアが侵略されている中、唯一活気の溢れている〈豚の帽子〉亭にて、

フロランスは新調された制服を着てエリザベスと共にウエイトレスとして働いていた。現在は魔神族の目から逃れるため白夢の森に腰を下ろしているが、来客はそれなりに多い。

酒を飲んで現実逃避している、と言われればそれまでなのだが、そうせざるを得ないほどに今のブリタニアは追い詰められているのだ。

客の一人が、聖騎士を捕まえて〈十戒〉に差し出せば魂を喰らう猶予を与えられるという話をしていたのを聞いてからは、魔力探知の範囲を限界まで広げて、魔神族の魔力が引つかかれば即座に飛んでいき、〈十戒〉に感づかれないようこつそりと始末するとうことを繰り返していた。

「お待ちとおっ！」

そして既に、メリオダスの死から一ヶ月が経過した。

多少無理をしても魔神族を——〈十戒〉を討つためにフロランスは日夜奔走していたが、それでも数は減ることがなく、侵攻が止むことはなかった。

〈十戒〉に立ち向かう勢力こそ存在していたものの、彼我の戦力差を考えればあつてなようなものだった。

「そーいや聞いたか？　さまよう銀の騎士の噂」

「ギンギラの鎧を着込んだ、最近出沒するっていうユーレイ騎士だろ？」

「三番テーブルのお客様！『アップルっぽいパイ』お待たせしました——キャー！」

足が滑ったのか、エリザベスの運んでいたパイが客の顔面に吸い込まれていくのを尻目に、今しがた耳に入った噂話の詳細を尋ねる。

「お待たせしました、ミートパイです。……あの、そのさまよう銀の騎士とやらの噂を知っている範囲で教えてくれませんか？」

「ん、おお、いいぜ！ つつても、俺らもそう詳しいわけじゃねえが……なんでも魔神族に襲われたところを助けてもらったとか、怪我人を不思議な力で治したとか、そんな話をよく聞くな。まあ十中八九聖騎士だろうが、その正体は謎に包まれてる……つて感じさ」

「なるほど……貴重なお話をありがとうございました。ミートパイ、冷めないうちに召し上がれ」

「おう！ こりゃあ美味そうだ——」

機嫌よく返し、男はミートパイを口に放り込む。直後、顔を蒼白に染めて勢いよく嘔き出した。

「まっず——っ!？」

「おや、やはりですか？」

「可愛らしく小首傾げてんじゃねえよ!? 一体なにをどうしたらこんな味になるんだ

!？」

「私にもさっぱり。ちなみに私の兄弟の手料理も同じくらい不味いので、もはやなにかの呪いなのではないかと思ってきました」

「な、なんつー娘だ……」

「恐ろしいぜ……」

その後、好奇心でミートパイに手を伸ばした男たちは、例外なく倒れ伏した。その横で、フロランスは何故こうなるのだろうと首を捻り、客は引いていた。



「——ん?」

客足が減ったころ、テーブルを拭いていたフロランスは、少し離れたから徐々に近づいてくる見知らぬ魔力を感じ取った。

人間。それも、力だけで言うならばへ七つの大罪に匹敵する。

万が一敵であった場合に備えて、フロランスは静かに臨戦態勢に入った。

巧妙に気配を隠しているとはいえ、魔神族——ひいては魔神族に味方をする聖騎士たちが来ないという保証はないのだ。

ホークも同様にその存在に気付いたのか、鼻をひくつかせながらドアを注視する。

「な、なんだ？ この金属くせえニオイは？」

やがてドアが開かれ——現れたのは、銀色の鎧を纏った聖騎士だった。

銀の聖騎士は店内を見回すと、ゆっくりと足を踏み入れる。

「ここが、〈豚の帽子〉亭……？」

「で……出たああ——！」

「何者です。名を名乗りなさい」

「ホークちゃん!? 大声を出して、なにがあつたの!？」

フロランスの射抜くような視線にたじろぐ聖騎士だが、ホークの叫び声を聞いて降りてきたエリザベスの姿を視認した途端に、声色が穏やかなものへ変わる。

「おお……エリザベス様……立派に成長されましたね。バイゼルで見かけたときはまさかあなたとは思わず声をかけられなかった。最後にお会いしたのは、もう10年以上前にもなりますからね……」

「そ、そんな……あなたは……」

懐かしむように語る銀の聖騎士は、ゆっくりと兜を脱いだ。

その顔を見たエリザベスは、信じられないものを見たとはかりに目を見開いた。

「聖騎士長——ザラトラス様！」

二人が顔見知りだと察したフロランスは、神器から手を離し警戒を解いた。

「これは夢なの……? だってザラトラス様は……」

「ザザザラトラス!? 10年前二大聖騎士長にブスブスに刺されて死んだ元・聖騎士長か——!?!」

「死んだ……?」

呆然とするエリザベスだが、それも当然だろう。

ホークの言った通り、リオネスの元・聖騎士長ザラトラスは、フラウドリンに乗っ取られたドレファスとそれに操られていたヘンドリックセンによって10年前に殺害されている。

既にこの世に存在しない——するはずのない人物、それがザラトラスなのだ。

「そう……そ——なんですよ! あのとときヘンディに〈黒猫のあくび〉亭のフィツシュパイを差し入れにもらったばっかりに! もうそれが、アツアツサクサクのできたてで……夜勤明けの空腹に我慢できるわけもなく!」

「……」

「考えてもみてよ!? まさかパイに毒が盛られてとは思わないでしょう!? 聖騎士長だって人間ですからね! お腹は空くんですよ——!」

「……へ?」

知的な雰囲気から一転した軽薄な言動に目を丸くする。

とても一度死んだとは思えない態度に、フロランスでさえも呆気にとられていた。

「一生の不覚でした。フィツシュパイの誘惑にさえ負けなければ……！」

体を震わせるザラトラスから、悔悟の念が発露する。

「ドレファスもヘンデイも、暗闇から救い出してやれたものを……！」

「ザラトラス様……」

フロランスは、その姿が重なって見えた。大切なものを救えず、悔やむことしかできなかった、愚かな自分と。

それゆえか、普段は積極的に人と関わろうとせず、興味すら持たないフロランスが、ザラトラスへ声をかける。

「ザラトラス……といいましたか」

「あ、ああ。そういうえば……バイゼルにもいたが、君は一体……？」

「申し遅れました。私はフロランス。メリオダス兄様の妹です」

「メ、メリオダス殿の!? 驚いたな、妹君がいるなんて初耳だ……」

メリオダスと長い付き合いであるへ七つの大罪ですら知らなかったのだから、ザラトラスがフロランスのことを知らないのは当たり前だ。

「そう言われればどことなくメリオダス殿に……」とフロランスを見て眩くザラトラス

に、エリザベスが紅茶を注ぐ。

「どうぞで」

「かたじけない……！」

紅茶の入ったカップに目を落とし、ザラトラスはなぜ死者であるはずの自分が現世に存在しているのかを語る。

「——どうやら私は、一時的ではあるが蘇ったらしい。あの恐るべき魔神族、〈十戒〉の魔力によつてね。とてつもない魔力だ……この世に未練ある魂に怨みの念と体を持たせ蘇らせるとは……！」

「メラスキュラの”怨反魂おんはんこんの法”ですね。……相変わらず趣味の悪い……！」

「相変わらず……？　まるで〈十戒〉と知己であるかのような言い方だが……！」

事ここに到れば、もはやもう隠す必要はない。意味もない。

いずれ話さなければならぬ、隠してはならない事実。

自分が言わなければ、兄はギリギリまで隠し通そうとするだろう。そうなれば、積み積もった遺恨がどんな影響を及ぼすか分からない。

だから、今、この場で話す必要がある。

二人と一匹の視線を受けて、フロランスは徐に言葉を紡ぎ始める。

「兄様は——〈七つの大罪〉団長のメリオダスは、3000年前、〈十戒〉の統率者だつ

たのです」

「なっ——!?!」

「メリオダス様が——」

「へ十戒」を!? 嘘だろ!?!」

激しい動揺、そして瞠目。それらを見て本当です、と首を振り、けれど、と続ける。

「兄様は次期魔神王とまで噂された、魔神族の希望であり英雄でした。ですがある日突如魔神族を裏切ると、魔界を破壊し姿を消しました。……居合わせたへ十戒」二人を殺害して」

「なんと……!?!」

「兄様とへ十戒」の二人がいなくなったことで魔神族の戦力は大幅に減少し、女神族はこれを好機と見るや、他種族をけしかけて魔神族に戦争を仕掛けました。それが聖戦の始まりです。そして我ら魔神族は聖戦に敗北し、女神族によって封印されていました」

「そんな……」

「妖精王グロキシニアと巨人王ドロール、そしてエスタロッサ。この三人は兄様と、兄様に殺されたへ十戒」の代わりとして席についたのです」

フロランスは重くなった空気を肌で感じ、自然と表情が固くなっていくのを自覚する。

しかしエリザベスたちの内心は、フロランスの想像しているそれとはまったく違うものだった。

程度は違えど、エリザベスもザラトラスもホークも、メリオダスのことを信頼している。それは少なくとも多少の悪事で揺らぐようなやわなものでない、絶対的と言ってもいい信頼だ。

驚愕した。愕然とした。だが——落胆はしていなかった。むしろそれをおくびにも出さず、孤独にずっと抱えていたことに痛ましさを。そして力になれなかった自分に無力感を抱いていた。

「兄様は、〈十戒〉を統率していた。その過程でたくさんの命を奪ったこともたしかです。でも、それでも——あの人はいつも誰かのために戦っていた」

エリザベスに目を向ける。

——そうだ、兄様は私欲で力を振るうことはない。仲間を、友を、そしてエリザベスを守るために力を振るうのだ。

「それだけは、どうか忘れないでください」

その言葉に、エリザベスたちは我が意を得たりとばかりに頷き。

「ええ、もちろん。私も今まで、何度も、数えきれないほどメリオダス様に助けられてきた」

「残飯は不味いけど、あいつがそういう奴だつていうのはよく分かつてるぜー」
「そうですね。彼は不思議な人物でしたが、決して悪人ではない。むしろ溢れんばかりの善性を備えた、騎士の鑑だ」

——ああ、そうか。兄様を取り巻く環境は、3000年前から遥かに、劇的に変化しているのだ。

兄様を恐れ敬う部下も、人形のように扱う父も、今はいない。

『英雄』でも『次期魔神王』でもなく、『メリオダス』として振る舞える環境がある。フロランスはそのことに喜びと仄かな羨望を滲ませ、しかし決してそれを悟られないよう、静かな笑みを浮かべた。

それがエリザベスたちにはどう映ったのか、フロランスは知る由もなかった。

第12話／燃え上がる赫怒　込み上げる悲哀

ドルイドの民は、不可思議な術を扱う。

例えば、聖なる力を以って邪を打ち払う”浄化”^{パージ}。

例えば、女神族のように他者の傷を癒す力。

例えば——意識だけを任意の過去に飛ばす、刻還りの術。

リオネス王国元・聖騎士長ザラトラスの出身はドルイドであり、当然彼も”浄化”^{パージ}や癒しの力、そして刻還りの術を使える。

なにも話さぬまま死を迎えたメリオダスの思惑、真意、そして見据える未来。それらを知るため、ザラトラスたちはメリオダスの眠る部屋へと来ていた。

「メリオダス殿は本当に不思議な男です。彼の発言や考えの真意がどこにあるのか、当時の私には理解ができなかった」

メリオダスとザラトラスの付き合いはマーリンを除くへ七つの大罪の団員よりも古

い。

そんなザラトラスから見ても、メリオダスはあまりにも不透明な存在だった。

「まるで遙か遠い過去を生き、遙か先の未来を憂うかのような、雲を掴むような言動の数々……。驚くべきことに、それが今になってなるほど思い当たる出来事が次々と出てくるのです」

過去のメリオダスの言動、そして今の世界の状況。

恐らくこの時を見据えて発言していたのだろう。

「一度……珍しく酒に酔った彼が、自分の死について語ったことがありました」

「ッ!？」

「メリオダス様が自分の死について……!？」

「なんて言ってたんだ!？」

思いがけない言葉に、エリザベスたちは食らいつくように問う。

しかし返ってきたのは。

「すっかり忘れてしまいました」

気の抜けた、そんな一言だった。

「なので、もう一度確かめてみましょう。彼の記憶の中から」

「……!？」

そう言いながら、刻還りの術を発動させるための準備を終えたのか、エリザベスに手を伸ばした。

同時に、フロランスはリオネスから放たれるかつての仲間たちの魔力を察知した。その数は一人や二人ではなく、少なくともリオネスの抱える戦力では撃退すら難しいほど。

「エリザベス様、私の手を」

「は、はい」

「子豚殿も。フロランス殿は、エリザベス様と子豚殿の手を」

「……すみません、急用ができました。私は今からリオネスへ向かいます」

「急用……?」

「あなたたちもそれが^{儀式}が終わり次第早急にリオネスへ来てください！ それまでは私がないとか持ち堪えておきます！」

フロランスはそう捲し立てて、あっという間にその場から姿を消した。

それを、エリザベス達は呆然と見ていることしかできなかった。



リオネスに向かって翼を広げ飛翔しているフロランスは、〈十戒〉側とリオネス側の戦力差を分析する。

〈十戒〉側はグレイロード、フラウドリン、デリエリ、モンスピート、そしてエスタロツサにゼルドリス……。対してリオネス側はエスカノールとバン、後は聖騎士が数十人程……あまり良い戦況とは言えませんね)

エスカノールがいれば大丈夫——などと樂觀視はできない。なにせ相手が相手だ。正午キツカリならばともかく、今のエスカノールにエスタロツサとゼルドリスは少々荷が重い。

それも時間の問題だが、その前にゼルドリスがエスカノールの危険性に気付けば正午に達する前に殺される可能性がある。

「見えてきた……」

〈豚の帽子〉亭からリオネスまでの道中、押し寄せる魔神族たちを斬り払っていたためか、少し遅かったようだ。

遠目から見たリオネスは所々が崩壊しており、今なお戦いが繰り広げられていることが肌で感じられる。

念のため魔法により姿を消し、神器に“封印シールの魔力を通す。擦りでもすればその瞬間に魔力を封じるため、戦いを有利に進めることができる。

そうしてリオネスに降り立ったフロランスは、聖騎士らしき魔力が密集している城へ向かう。

しかし最悪なことに、聖騎士たちは戒禁にかかっているようだ。むしろ、今のリオネスには戒禁にかかっていない者の方が少なかった。

更には――

「くそっ……一足遅かった……。まさか自らを犠牲にして女神族を復活させる人がいるなんて……！」

悪態をついた所で、状況は変わらず。

城へ辿り着いたときには、リオネス国王バルトラの弟デンゼルに宿った女神族とデリエリが殺気を撒き散らしながら相対し、その側で、フロランスの魔力を感じ取り城にやってきたであろうゼルドリスが殺意と共に鋭い視線でフロランスを睨みつけていた。

「ゼルドリス……」

「フン、生きていたか……敗北者が懲りずにこのこと、何の用だ？」

「決まっているでしょう。――あなたたちを倒して彼らを救うためですよ」

フロランスの言葉に、ゼルドリスは鼻を鳴らして不快感を顕にする。

「あれだけ完膚なきまでに負けておいて、まだオレたちに勝つつもりか？」

「ええ、たしかに私はあなたたちに負けた。けれど、初めから一対一ならどうでしょう

？」

「何……？？」

「神器解放——『魔神王』」

神器に通していた”封印”の魔力を解き、魔神王の魔力を流し込む。

闇さえも飲み込む漆黒の刀身を天へと掲げ、魔力を収束させる。

バイゼルで〈十戒〉から逃れるために放った技かと身構えるゼルドリス。

溢れ出た余剰分の魔力がスパークを起こし、その存在感は肥大化を続ける。そして遂に放たれたそれは、壁と錯覚するほどの巨大な闇の奔流——ではなく、極限まで研ぎ澄まされた闇の刃だった。

ともすれば、リオネスやその周辺を跡形もなく消しとばしかねない威力を秘めた一撃だ。

「ツ——」

ゼルドリスの本能が警鐘を鳴らす。

あれは、自身の身を容易く斬り裂く必殺の刃だと。

「おお——ツ——」

体は、思考するよりも早く動いていた。

その身に宿す闇の魔力を解放。

闇とはそれ自体が質量を持っており、攻撃に転用すれば絶大な破壊力を発揮すると同時に凄まじい防御性能を誇る。

ゼルドリスの内から溢れる闇が、全身を覆う。

そして、認識すら難しい刹那。

ゼルドリスは神速の居合いを以て、飛来する斬撃を迎撃し——これを、切り裂いた。

真つ二つに分かれた刃は遙か遠方へ遠ざかり、やがて大爆発を起こした。

後手に回ってしまったことに歯噛みしながら、ゼルドリスは続け様にフロランスへ刃を向ける。

だがそこにフロランスの姿はなかった。どこへ行ったのかは、背に当てられた小さな手のひらが教えてくれた。

「貴様……!」

「場所を移しましょう。ここはあまりにも狭すぎる」

”瞬間移動”

一瞬でゼルドリスの視界が切り替わる。

見えたのは、燦々と輝く太陽と、空を泳ぐ白い雲だけで——顎を蹴り上げられたのだと、遅れてやってきた痛みで理解した。

完全に不意をついた一撃に、ゼルドリスの視界が歪む。脳を揺らされたためだ。

同時に魔力の制御が乱れたことで翼が崩壊し、ゼルドリスは地上へ落下を始める。しかし激突を待たず、極光がゼルドリスを飲み込み、大地へと叩きつけた。

「…………ふむ、”エクスターミネイト・レイ殲滅の光”ではこの程度ですか…………」

魔神王の魔力によりダメージは無い。それはフロランスも理解しているはず。

なんのためか、それは定まらない思考でも理解できた。

遊ばれている。この表現は的確ではないが、少なくともゼルドリスはそう感じていた。

実のところ、フロランスは魔神王の魔力がどれほどのものを測りつつ、降参を促そうとしているだけなのだが。

「舐め…………るな…」

余裕たっぷりな態度のフロランスに、ゼルドリスは激発とともに剣を投げつけた。

無論当たるはずもなく軽く体を傾げるだけで避けるが、あのゼルドリスが意味もない行動を取るはずがないと警戒する。

その予想は的中した。

横たわっていたゼルドリスの姿が掻き消え、フロランスの背後に現れた。魔法を使つたわけでも、幻覚でもない、純粹な身体能力による接近。

ゼルドリスの手中で、投擲したはずの剣が鈍く光った。

「なに——」

防ぐ暇もなく、刃はフロランスを捉え——しかしなにも切り裂くことはなかった。

「……やはり魔神王の魔力が機能するのは攻撃的魔力のみで、精神的なものなら問題なく通用するようですね」

「な、んだと……!?!」

「インベイジョン侵入」の魔力。使用するのは初めてですが、どうでしたか？ 私の見せた幻覚は」

そう言つて見せつけるように差し出された神器の刀身は、いつのまにか光すら飲み込むような黒から鮮やかな赤色へと変化していた。

「インベイジョン侵入」は〈七つの大罪〉の一人、〈ゴート・シン色欲の罪〉のゴウセルの魔力だ。精神干渉系ではトツプクラスの性能を誇るそれは、ゼルドリスの意識を容易く書き換えることのできた。

「くッ……!!」

屈辱に震える手の中で、剣がカチカチと鳴る。

何故だ、という疑問と、誇りを捨てた裏切り者に弄ばれている、という現実に対する怒りが湧き上がる。

「ゼルドリス、今からでも遅くはありません。戒禁を捨ててください。私たちは魔神王を討ち、すべての呪縛を解かねばなりません」

ゼルドリスという薪に、フロランスの忠言という火種が注がれる。

「もう戦わなくていい。だから——」

「黙れ!!」

薪が、激しく燃え盛る。

それはまるで火山の噴火のように苛烈で、強烈で——凄烈だった。

小さな火種は、しかし爆発的に薪を燃やした。

身を焼き尽くさんばかりの怒りは、そのまま殺意となってフロランスに降りかかる。

空間が軋んでいるように思えるほど濃密な殺気の中、フロランスは表情を変えずゼルドリスを見つめる。

「いい加減、貴様にはうんざりだ。その自分勝手に甘いところは、3000年経っても変わらないか」

ああそうだと、私は自分勝手に、甘い。

そのせいで死にかけたこともあった。

「父上に臆し、一人ではなにもしようとしなかった貴様が、父上を討つ？ 呪縛を解く？ 笑わせるな！ 今更貴様になができる！ 怯えて動けなかった貴様がなにをしようとするか!!」

確かにそうだ。私は魔王が——父様が怖くて、なにもできなかった。しようともしなかった。

けれど、今は仲間がいる。兄様がいる。

だから——

「だからこそ、私は今度こそ自分に、魔王に、打ち克つてみせる。そうして初めて、私の呪縛は解かれる」

「御託はもういい。貴様たちには二度と惑わされんぞ」

「ゼルドリスつ……!」

悲痛な表情を浮かべるフロランスへ、ゼルドリスは容赦なく剣を振るう。

速度、威力ともに先ほどの比ではない。それほどまでにゼルドリスの抱えるモノが大

きく、強かったのだ。

結果的にフロランスの行動は、求めていたものと正反対の事態を招いてしまった。しかしそれを悔やむ暇もなく、嵐のような剣撃が襲いかかる。

「魔神王さえ討つことができれば、もう悲劇が起こることは無くなる！ ゼルドリス、あなたも、あなたの恋人も——」

そう発した瞬間、フロランスの体に深い裂傷が刻まれた。下手をすれば、内蔵にすら届きかねないほど深い傷。

避けられなかった。フロランスですら知覚できない速度の斬撃は、ゼルドリスの怒りが生み出したもの。

（不味い……どんどん状況が悪い方へ転んでしまっている……やむを得ませんね……）

これ以上の交渉は危険だと判断し、フロランスは魔神の力を解放した。

左額にゼルドリスのものと同じ紋様が浮かび上がり、刻まれた傷が瞬く間に癒え、爆発的に魔力が上昇する。それに伴い抑えていた威圧を全開にし、ゼルドリスにプレッシャーを与える。

3000年前から少しも衰えていない圧倒的な魔力に、しかしゼルドリスは臆せず唸喊する。

激情に顔を歪め、持てる全てを乗せた全力の一振りを袈裟懸けに放つ。

たとえエスタロツサであろうとも不可避の凄絶な斬撃。それを、フロランスは片手で受け止めた。まるで落ちてくるものを優しく包み込むかのような動作で、いとも容易くゼルドリスの剣を止めた。

ゼルドリスが異変を感じたのは、その直後。

(う、動かん……!? 俺の力を上回っているというのか!?)

剣が、掴まれた状態のままびくともしない。

根を張る大樹を、あるいは大地そのものを引っこ抜こうとしているような錯覚さえ覚えた。

(ふざけるな……!)

剣を捨て、ハイキックを放つ。

並みの者なら首から上が消し飛ぶほどの威力を秘めたそれを、またもや片手で受け止め、万力の如き握力で握りしめる。

しまった、と思つた時には既に遅く。

抗うことすら許さぬ剛力でゼルドリスを振り上げ、地面に叩きつけ——轟音とともに、中心に人型が刻まれたクレーターができあがる。直接攻撃を入れたわけではないためダメージは少ないが、当然これで終わりでは無く。

ゼルドリスの顔面に、無造作な蹴りが叩き込まれる。

血を噴き出しながらボールのように跳ねるゼルドリス。頭の中は疑問と怒りで埋め尽くされていた。

ようやく勢いが止まったとき、立ち上がるかと足に力を入れても、無様に崩れ落ちるだけだった。

たつた一撃。

それだけで瀕死に追い込まれた。その事実がゼルドリスに多大な屈辱を与える。

しかし、どれだけ怒ろうと、体は動いてくれなかった。

もう一撃でも加えれば、ゼルドリスの意識は闇に沈むだろう。

こうして実の弟を甚振るのはフロランスの本意ではない。故に確実に、痛みを与えずに意識を刈り取ろうと腕を上げた瞬間——太陽が、エスタロツサを焼きながら飛来した。

あまりに非常識な光景に、フロランスは飛んでいく太陽を目で追うことしかできなかった。

「あ、にじや——ッ！」

慌ててゼルドリスが加勢するも、勢いは留まるところを知らず、あつという間に彼方へと姿を消した。

後を追いかけてしようとしたが、あの太陽を正面から喰らったとなれば良くて重傷、悪く

て死亡だろう。どちらにせよすぐに行動を起こすことはできないだろうと判断する。

(それに、遠方から感じるこの魔力……間違いない、兄様の魔力だ)

ザラトラス、エリザベス——そしてメリオダス。この三人の魔力がリオネスへ向かっているのを確認し、フロランスもまたリオネスへと転移した。

第13話／繰り返される痛み

リオネスへ戻り真つ先に入ったのは、強大な氷の魔力に覆われた王城の一室だった。

何事か、と驚いたが、氷の中に人間が入った卵のようなものがそこかしこにあるのを見て、状況を一瞬で察する。

「貴様……生きていたか……!」

「ええ、おかげさまで。それで——」

苦虫を噛み潰したような表情のフラウドリンにそう返し、フロランスは視線を上げ問いかける。

「私の助力は必要で?」

「不要だ……と言いたいところだが、これ以上被害が広がるのは本意ではないのでな。頼んだ」

「了解しました」

手短かに返答し、神器を抜く。

それとほぼ同時に、灰色の魔神の突然変異種である〈不殺〉のグレイロードが動いた。

「フレイカプブルバグ五分の魂群」

いくつもある顔の一つから放出された蟲が、なだれ込むようにフロランスめがけ迫る。

無数の蟲たちを前に、フロランスは手を翳した。

「メテオフレア墜ちる炎塊」

ぐつ、と翳した手を内側に倒すと——巨大な隕石の如き炎が、王城の天井を突き抜けて蟲を押し潰した。

衝突した余波で後方の聖騎士たちが吹き飛びそうになっているのを横目に、今度は五指をグレイロードとフラウドリンに突きつける。

指先に魔力が収束するのを感じ、グレイロードは自らの体を分離させることで逃れようとし、フラウドリンはその場から射程外までの逃走を試みた。

「マーリン」

「モルモット大事な実験台に逃げられては困る——」エンドレスワールド「渦終わりなき渦」

短い呼びかけ。しかしそこに込められた意図を理解したマーリンは魔術を発動させ

る。

マーリンを中心に大規模の嵐が発生し、分離していたグレイロードは抵抗も虚しく引き寄せられ——どこからか取り出した試験管へ閉じ込められてしまった。

「今更逃げるのはあまりにも虫が良いと思いませんか？ フラウドリン」

グレイロードが捕獲される様子を見届け、フロランスは無様にも走り去るフラウドリンの背に五指を向け、圧縮した魔力を解き放った。

”貫く獄炎弾”

超高速で放たれた獄炎の弾丸は正確にフラウドリンの足を打ち抜き、フラウドリンは派手に転倒する。

すぐさま闇を展開し傷を癒そうとするが、その前にヘンドリクセンが立ち塞がる。

「自然ならざる魂よ……消えろ」

『浄化』

ドルイドの民が扱う、邪を祓う光。

しかし、ヘンドリクセンのそれはフラウドリンをドレファスから引き剥がすどころか、なんら痛手を与えることはなかった。

癒えた足で立ち上がり、フラウドリンは魔力を込めて剣を振るう。

”流撃！”

咄嗟に剣を挟み込んで防ぐヘンドリクセンだが、防ぎきれずにダメージを負う。

「フ……どうした、それで終わりかヘンデイ？ お前程度の魔力で私を浄化しようなどと、百年早いぞ」

「それはこっちの台詞だ……！ 貴様の方こそ、ドレファスの剣技には遠く及ばないぞ！」

「……言ってくれるわ」

再びヘンドリクセンへ肉薄し、剣を薙いだ。

反応が遅れ半端な防御しかできず、ヘンドリクセンが膝をつく。

間を置かずフラウドリンが剣を振り上げ——その剣先を、フロランスが掴み取る。気配すら感じなかったことに驚愕しながらも剣を取り戻そうとするが、いくら力をいれてもぴくりとも動くことはなかった。

諦めて剣から手を放し、フロランスと正面から対峙する。

「く……っ」

改めて、フロランスという少女の強大さを、フラウドリンは認識した。

真つ向から戦ったとしても、勝ち目など方に一つも無いだろう。戦略、武力、魔力——あらゆる面で自身の上を行く相手を前にして、フラウドリンの額から汗が流れる。

加えて、フロランスの背後には稀代の魔術士マーリンも控えているのだ。もはやフラ

ウドリン一人ではどうしようもない状況に陥っていた。

「ふっ、ふはは！」

「……なにかおかしいのですか？ 言っておきますが、妙な真似をすれば即殺しますよ」

しかし。フラウドリンは理解していた。

フロランスは決して己を殺せない。否、正確には殺さない、というのが正しいか。

フラウドリンはドレファスに取り憑いているだけで、あくまでもその肉体は聖騎士ドレファスのものなのだ。

「ふ……できるのか？」

「……」

「できんよなあ。私を殺すということは、即ちドレファスを殺すということなのだから」
黙り込むフロランスに、フラウドリンは得意げに言い放つ。

「ヘンデイの『浄化』^{パーズ}は効かず、私を殺すこともできない。さて……では撤退させてもらうとするか」

「二つ、勘違いしているようですね」

闇の翼を展開しリオネスから飛び立とうとしていたフラウドリンの体が、地に沈む。

「な、に……?!？」

「別に」

フラウドリンに奪い取った剣を突きつけ、ぞつとするほど冷たい声色で口を開く。「私は、あなたごとく殺したつていい。その器から出て行きたくなるほどの苦痛を与えてもいい。今更その程度のことに躊躇いはありません」

淡々と、表情一つ変えずに言つてのけるフロランスに、フラウドリンは恐怖した。

「ですが、殺さなくてもいい手段がある。それだけです」

「殺さなくてもいい手段、だと……？」

「ええ、ちようど来たようです」

雷鳴が響き渡る。

直後、雷が落ちたかのような衝撃が走った。

「ギルサンダー!? いや……違う! この魔力は……!」

「そんな……そんな……ザラトラス、なのか?」

その正体は、蘇った元・聖騎士長ザラトラスだった。

その姿を見て、ヘンドリクセンは信じられないとばかりに目を見開く。

無理もないだろう。自分たちの手で殺したはずの人物が、今こうして目の前に立っているのだから。

「まさか……これは、夢だ……」

「夢じゃありませんよ」

「イダダダダ！」

未だに現実を疑っているヘンドリックセンの頬を、ザラトラスが抓りあげる。そうしてようやく、目の前のザラトラスが本物であると認識した。

「しつかりしなさい」

「……はい！」

ザラトラスの叱咤に、ヘンドリックセンは涙を拭って立ち上がった。

「なるほどな……だが奴らの『浄化』^{パージ}ではどう足掻いても私を討つことはできんぞ？」

「知っています」

「ならばどうする？」

笑みを浮かべるフラウドリンに、ザラトラスが組み付く。予想だにしない行動に、フラウドリンの顔色が変わる。

必死に引き剥がそうともがくが、ザラトラスの方が早かった。

「私の全生命と引き換えに、お前を引き剥がす」

「なに!? ザラトラス、やめ——」

『浄化』^{パージ}!!」

ザラトラスから凄まじい魔力と閃光が放たれ——目論見通り、ドレファスの肉体からフラウドリンが引き剥がされた。

「お、おのれえええ!!」

あまりにも禍々しい姿に、ヘンドリクセンは息を呑む。

フラウドリンの側には、意識を失っているドレフアスと力を使い切り衰弱したザラトラスが横たわっていた。

「他者のためにせつかく得た命を捨てるとは……! つくづく愚かな! 命を引き換えに俺を追い出したところで、もう一度ドレフアスの中に戻れば済む話だ!」

「私がそれをさせるとでも?」

「ぐあつ!」

ドレフアスへ近づこうとしたフラウドリンが、見えない何かに吹き飛ばされる。

大してダメージは無いようだが、避難先であるドレフアスの肉体はフロランスの向こう側にある。そしてフロランスは油断なくフラウドリンを見据えていて、隙など微塵も存在しない。

「終わりですね」

相も変わらず冷たい声色のまま、手のひらに魔力を収束させる。

蒼い雷光がバチバチと音を立てて、徐々に輪郭を帯びる。ギルサンダーやザラトラスのそれとは比較にならない膨大な雷の魔力は、やがて一本の槍として顕現した。

「バーストライティング爆ぜる雷槍」

そうして放たれた、フロランスの倍はあろうかというほどの長大な雷の槍はフラウドリンを貫き——直後に大爆発を起こした。

響き渡る轟音と吹き荒れる暴風。砂煙が舞い上がり、フラウドリンの姿を覆い尽くす。確実に仕留めたと、その光景を見ていた者たちは確信し歓喜した。しかしフロランスは険しい表情で、再び雷撃の槍を作り出す。

それを訝しむ聖騎士たちの頭上から、一つの声が響いた。

「ぐ、くう……！ やってくれたな……！」

「なっ!? この声は……フラウドリン!?」

「バカな！ 奴は確実に消し飛んだのでは——」

砂煙が晴れ、聖騎士たちは思わずその巨体を見上げた。

『巨大化』……でしたか」

苦痛に顔を歪めるフラウドリンを見上げながら、ぽつりと呟く。

「それで？ そこからどうします？」

光を宿さぬ漆黒の瞳で、フロランスが問いかける。

逃げる？ 到底不可能だろう。

戦う？ 一方的な虐殺になるだろう。

仲間を呼ぶ？ 既に周囲に仲間の気配は無い。

詰み、という他なかった。

「オ——オオオオオオ!!」

かつてのメリオダスを彷彿とさせる圧。感情を感じさせない瞳に感じた恐怖を誤魔化すように異形の右腕をフロランスへ叩きつけようとした瞬間——高速で飛来したなにかが、フラウドリンの顔を強く打った。

「むっ!!?」

続けて一撃、更にもう一撃。

計三発の打撃を受け、ようやくフラウドリンはその姿を視認し、驚愕した。

「なっ……なんだと!」

なぜなら、そこにいたのは——

「メリオダス!?! なぜ貴様が生きています!?!」

「うそ……」

「夢……じゃないよな?」

「メリオダス殿……生きていたのか!」

「やはり戻ってきたな……」

「団ちよ……♪」

「おかえりなさい、兄様……」

飄々とした顔で佇むメリオダスに、フラウドリンは腕を振るう。その場から飛び上がり無防備になったメリオダスを串刺しにせんと、今度は二方向から腕を振るうが、メリオダスはそれすらも軽々と飛び越え、神器を薙いだ。

咄嗟に身を引いたため傷は浅く、反撃にメリオダスを力の限り殴り付け、地面に叩きつけた。そして息をつく暇もなく何度もメリオダスを巨大な足で踏みつける。

「砕ける！ 砕ける！ 砕ける！ 砕ける！ 砕ける！ 砕ける！ 砕ける！」

しかしそれを潜り抜け、メリオダスが再び一撃を加える。

「やるなあ……！ だが今の俺なら貴様の力にもひけはとらん！ 16年前の続きをとことんやろうじゃないか！」

「すげー……ほぼ互角の勝負だぜ……」

「妙だ……」

一連の光景を見て違和感を覚えたマーリンはバロールの魔眼を取り寄せ、メリオダスを見つめる。

（団長殿の闘級3万……以前よりも数値が——ああ……そういうことか）

「オレの分身相手には上出来だったぜ」

舞い上がる砂煙の中、もう一人のメリオダスが、悠々と姿を現した。

「へ？」

「ぶ、分身……?」

「神器ロストヴェインの特性、『実像分身』だ。よって、団長の現在の闘級は——6万」
マーリンの口から告げられた信じ難い事実、フラウドリンを含めた面々は目を見開いた。

「……どうした? なんか言えよ、フラウドリン。希望から絶望に叩き落とされるその表情……最高にいい気分だ」

「メリオダス……殿?」

「いや……あれは本当にメリオダス殿……なのか?」

「兄様……」

その身から発せられる禍々しい魔力。

その顔に浮かべる残忍な笑み。

どちらも、ドレフアスたちの記憶には無かった。

いつも明るく、飄々とした態度のメリオダスとは——どうしても思えなかった。

そんなドレフアスたちをよそに、メリオダスは口を開く。

「決着をつけようぜフラウドリン。今度こそ跡形もなく、てめえをこの世から消してやる」

「メリオダス……き、貴様のその魔力はまるで……まるでかつての——! ぬああああ

ああ!!」

裂帛の気迫とともにフラウドリンがしかけ——それを上回る速度で、メリオダスが身一つでフラウドリンの肉体を貫く。

目にも止まらないほどの一瞬で、フラウドリンの肉体にはいくつもの風穴が開けられた。

「化け……物が……!」

度重なるダメージにより、魔力を維持することもできなくなったのか、巨体が見るみるうちに縮み、膝をつく。

圧倒的、という言葉すら生温いほど隔絶した実力差。フロランスでさえも、メリオダスの保有する闇の魔力には寒気を覚えるのだ。フラウドリンの心情は、推して知るべしだろう。

「三千年前も……16年前も、貴様が甘ったるい夢に浸っていた間……我らは女神族への……貴様への復讐だけを焦がれ、待ち続けた……」

「……オレも似たようなもんさ」

瀕死のフラウドリンへ歩み寄り、メリオダスは穏やかな顔つきで——顔面を、容赦なく張り飛ばした。

「まだ死ぬんじゃねえぞー?」

これには黙って事の成り行きを見守っていたフロランスたちも思わず顔を顰めた。

以前のメリオダスとは違い、蹂躪を楽しんでいるかのような、弱者を痛ぶることで悦楽に浸っているような——否、ような、ではない。

メリオダスは、フラウドリンを黜ることを楽しんでいる。

「兄様……ダメです……！」

絞り出すような悲痛な声。しかしメリオダスには聞こえていない、あるいはそもそも、聞こえずらしいのか、歪んだ笑みで吹き飛んだフラウドリンへ歩み寄る。

「我は……魔神王の精鋭……〈十戒〉……『無欲』のフラウドリン……」

「てめえは魔神王に戒禁を与えられちゃいねえ。所詮は奴の代理だろ……」

「黙れ裏切り者！ 俺には魔神族の誇りがある！ 貴様が失った誇りがなあつ！」

そう吼えて、フラウドリンは最後の一手を打つ。

「がっ……ああああ……」

「なんだ……？ 様子がおかしいぞ……」

「ザラトラスがいいヒントをくれた……俺もタダで死ぬつもりはない！」

「フン」

尋常ならざる様子に、マーリンは真つ先に回答を出した。

「全生命と引き換えの自爆、か」

「じ、自爆!？」

「安心するがいい。」完璧なる立方体^{パーフェクト・キューブ}を破壊することはできん」

「い、いや……そういう問題じゃ……」

「くっ……!」

自爆と聞いて、フロランスは即座にフラウドリンを殺すために動いた。

神器に闇の魔力を流し込み、袈裟懸けに振るう。

闇の刀身から打ち出された魔力は散弾となり、フラウドリンの肉体の一部を消し飛ばす。しかし狙いが甘かったのか命を絶つには少しばかり浅く、返す刀でもう一度神器を振るおうとした瞬間、メリオダスが手で制した。

「手を出すなフロランス」

「ですが……!」

「下がってろ」

「……はい」

一撃で仕留められなかったことを悔やみながら、フロランスは渋々引き下がる。

確かに、「完璧なる立方体^{パーフェクト・キューブ}」に守られているマーリンたちやメリオダス、フロランス

は無事だろう。しかし――

「いつまでその薄ら笑いを浮かべてられるかな……? くっくっく……たといえ貴様を討

てずとも、王国を地図から消すことぐらいはできよう。貴様のせいで、わずかに隠れ生き延びている人間共は全員死ぬことになるんだ！……共に数えようか、ラストショーまでのカウントダウンを！ 10……」

「死ぬなら早くしろ。眠くなってきたぜ……」

「兄様！ そんなことを言ってる場合じゃありません！ このままじゃ本当に王国が！」

下手に刺激すれば、却って自爆を早めることになるかもしれない。

そうなれば王国も、民も、何もかもが消し飛んでしまう。正直なところ、人間の国がいくら滅ぼうが、人間が何人死のうが、フロランスにとつてはあまり関心がない。けれど、だからといって見捨てる理由にはならない。

無辜の民を、必死に生きる人々を見殺しにする。そんなのは——

「そんなの、最高神や魔神王と同じじゃないですか！ 兄様は、兄様だけは、彼らと同じ道を行んじゃダメなんです！」

「……」

「今更なにをしようがもう遅い……！ ドレファス、せめて貴様にはあの世まで付き合ってもらうぞ……息子には気の毒だがな」

「……大丈夫だグリアモール。最期まで、父さんはお前と一緒にだ……！」

「…………やだ」

するり、と。グリアモールはドレファスの腕から逃れ、一目散にフラウドリンの元へと向かい——『障壁』^{ウォール}の魔力で、自分ごとフラウドリンを閉じ込めた。

「な…………!?!」

「お父さんを…………みんなを、殺さないで」

「何をする気なんだ!?!」

「グリアモール! やめて——!」

「ダメだ! ダメだ! 早く魔力を解けグリアモール!」

魔力の障壁を殴りつけ、ドレファスは叫ぶ。

しかし地上に降り注ぐ星屑ですら破壊はできないという『障壁』^{ウォール}には罅一つ入ることはない。

そして、グリアモールの捨て身の行動を止めようとした者が、もう一人。

「放せ! 魔力を解くんだグリアモール!」

今まさにリオネスを滅ぼさんとしていた張本人、フラウドリンだ。

二人の必死の訴えにもグリアモールは耳を貸さず、泣きじやくりながらも魔力を解こうとはしない。

「頼む…………いい子だから!」

「うおおお！」

すぐにも己に訪れる死を想像したのだろうか。ぎゅつ、と目を強く閉じるグリアモールを見て、フラウドリンは――

「わかった！ お前の父も……誰も殺さない」

「……約束、してくれる？」

「ああ……だから、この壁を消して、父さんのもとへ行つてやれ」

優しい――まるで本当の父親のような優しい声音に、グリアモールは魔力を解いて涙を拭い、ドレファスに走り寄った。

親子が抱き合う姿を見て、フラウドリンは小さく呟いた。

「甘っちょろい夢に浸っていたのは、この俺のようだ……」

かつて聞かされた、メリオダスの行動理由。

魔神族を裏切り、同胞を殺害したのは、『愛する存在のための戦いに、身を投じた』からだ。

分からなかった。愛する存在も。そのためだけに戦うということも。

そう、分からなかった。

――お前には、分かるか？

「……分かりたくなく、ありませんでしたよ」

戦い、殺し、生きる。

それこそが存在理由であり、それこそが全てだった。

憎み、恨み、復讐を果たすべき相手の気持ちなど、分かりたくはなかった。

「……殺せ」

命あるものなら当然持ち得る愛。

当然だろう。感情があるのだから。

当然だろう。寄り添ってきたのだから。

だからこそ、フラウドリンは死を選ぶ。

魔神族として、〈十戒〉として、もはやフラウドリンは役に立たない。

魔神族に求められるものはただ一つ。圧倒的な力のみ。

情を——ましてや怨敵に抱く愛など、到底許されるものではない。

故に、殺せと。

それを聞いて、メリオダスは一瞬驚いたような顔をするが、次の瞬間には残酷な笑みを浮かべていた。

「ダメー」

静止の声を無視して拳に闇を這わせ——なんの躊躇もなく、思い切り振るった。

絶大な武力と闇の魔力を合わせた一撃は、容易くフラウドリンを屠り。

16年にも及ぶ因縁は、断ち切られた。

「……っ」

無力な少女に、痛みを植えつけて。

第14話／誓い

——守りたいものは、あるか。

いつか聞かれた、素朴な疑問。

奪い、殺し、そうすることでは生きられなかった無感情な兄に、初めて感情を見た。闇一色に染まった瞳の奥に、暖かさを感じた。

私はそのとき、どう返したんだろうか。覚えていない。でも、ただ一つだけ。

——そうか。

その寂しそうな横顔だけは、覚えている。



リオネスへ集った〈十戒〉の全員の撃退、及び討伐を終え、既に日は暮れようとしていた。

飛び交う怒号も、振り撒かれていた殺意も霧散し、悲惨な破壊痕のみが残っている。その中心とも言える場所で、バンとメリオダスは立ち尽くしていた。

「……いつまでつたつたつたよ。なんか、言いてえことあんだろ？」

「……まあな」

いつまでも口を開こうとしないバンに、メリオダスが声をかける。バンは、それにもつより覇気のない声で応え、メリオダスの肩を優しく叩いた。

「生きててくれて嬉しいぜ、親友」

それだけ言うと、バンはスタスタとその場を離れる。

「さて……と。今夜は祝杯でもあげるか」

その様子を見守っていたエスカノールは、困惑のままマーリンへと問いかける。

「マ、マーリンさん……僕たちは団長が命を落とすところを、この目でたしかに……」

「メリオダスは何度死のうと蘇らせられる」

「え……？」

「魔神の王にもたらされし呪いの力だな」

「死なない……呪いですか？　すごいですね」

「——すごい？　兄様にかけられた呪いが？」

二人の会話を聞いていたフロランスが、底冷えするような怒気を放ち、エスカノールを睨め付ける。

人すら殺せそうな鋭い眼光に怯むエスカノールに、フロランスは怒りを乗せて言葉を叩きつける。

「あの忌々しい呪いが、そんなに羨まれるものとも思っているのですか？　兄様から大切なものを奪っていく呪いが、すごいもの？　——ふざけないでください」

「よせフロランス。エスカノールはなにも知らんのだ、そう思うのも仕方ないだろう」

「だからこそですよ。その身に太陽の呪いを受けていながら他人の呪いを褒めるなんて、あなたはよっぽどおめでたい思考回路をしているようですね」

「……っ」

「言葉が過ぎるぞ。今のお前は冷静ではない。どこかで頭を冷やしてこい」

「……ええ、そうさせてもらいます」

頭痛に襲われたように頭を押さえ、フロランスはどこかへフラフラと去っていく。

相場に今回の事態が響いているのか、まるで病人のような人相をしている。それを察したエスカノールが声をかけようとしたのを、マーリンは制した。

「そつとしておいてやれ。誰にも解決できんだらう」

「……分かりました」

数々の悲劇を生んだ防衛戦は終結した。

しかし刻み込まれた悲しみは消えず、人々の啜り泣く声が絶えることは無い。

亡くなった者を悼むように、人々の悲しみを代弁するかのように、空からは雨が降り出していた。



夜の帳が降りた頃。

はあ、と。リオネスから少し離れた平原で、フロランスは憎らしいほど輝く月を見上げてため息をこぼす。

胸中には後悔や無力感が駆け巡っていた。

あのととき、もう一步でも深く踏み出せば。

あのととき、もう少しでも冷静に剣を振っていたら。

「あんなことには、ならなかったのかもしれない」

かもしれない、だ。

しかし、どうしてもあの一瞬が——フラウドリンへ向けて剣を振ったときの一瞬が、脳裏から離れない。

あそこでしくじらなければ、メリオダスが余計な感情を背負うことも、余分な悲劇を生むことも無かった。

できたはずだ。やれたはずだ。

焦燥のままに動いたせいで起こったつまらないミスで、また背負わせてしまった。それがなによりもフロランスの心にのしかかる。

それは傲慢だと、誰もが口を揃えて言うだろう。

その考えは思い上がりで、自惚れだと。

ああ——その通りだ。

「私程度が救えるだの、救えなかったのだのと、どの口が言うんでしょうか。いつだって自己中心的で、利己的に生きてきた悪魔が、今更なにを」

敵に捕らえられた同胞を見捨てた。

命令に従い罪のない女子供を殺した。

実の兄を命惜しさに拒絶し、実の弟になにもしてやれずに苦悩させた。

まさしく最低で最悪な悪魔だ。

「……それでも。兄様を、ゼルドリスを助けたいという思いは間違いない。作られ

たものでもない。紛れもない、私自身の願い」

だからこそ、何度も自分に言い聞かせてきた。

今度こそ、と。

その結果がこれだ。

〈十戒〉の侵攻を許し、危機に駆けつけたときにはもう遅く。

「救う？ 今度こそ助ける？ 思い上がりも甚だしい。私にそんな力はない。そんな高
尚なことはできない」

遙か高みに座する満月に手を伸ばす。

当然届くはずもない——けれど、それでいい。

「助ける、ではなく、並び立ち——共に打ち砕く」

理想を掲げるだけでは、なにもできない。

現実を——今を見つめ、自分にできる最大限を。

「迷ってはられない。ここから先は、ただ直進するだけ」

フロランスは、己の手のひらに視線を落とす。

シミ一つ無い真っ白な肌。穢れの無い、小さな手。けれど同時に、夥しい数の死体を
築き上げて血に染まった、悪魔の手。

今度はそれを、その力を、善い方向へ。

弱き人々を、大切なものを守るために。

強き仲間と、支えてくれる人たちと歩むため。

精一杯、振るってみよう。

ぐっ、と。強く拳を握る。

その瞳にはもう、翳りは無かった。



翌日。

〈七つの大罪〉とフロランスは王城の一室にいた。

王城は〈十戒〉との戦いでフロランスとマーリンが破壊したはずだが、マーリンによって修復されたようだ。少なくとも外見は破壊前と遜色無い。

「いやまあ、それは置いておくとして……戒禁にかかった聖騎士たちがキャメロットへ向かったと聞きましたが、こんなに悠長にしている大丈夫ですか？」

「急いで仕事を仕損じる。焦るのは却って逆効果だろう。なに、今度の戦は我らの勝利に間違いはない。少しはうかれても罰は当たらんぞ？」 団長殿

「ん？ ああ……」

マーリンの言葉に「たしかにそうですが……」と少し不満げにするフロランスの隣で、メリオダスは生返事を返す。

「団ちよ」

「……なんだ？」

フロランスがカメラロットへ逃亡した聖騎士たちに関して思考を巡らせていると、バンがいつもの調子でメリオダスを引き寄せ、拳を頭に当てぐりぐりと捻る。

どこか突き放すような態度だったメリオダスは、そうしてようやくバンと顔を合わせた。

「……昨日は悪かったな。あん時……どんな顔して声をかけりやいいのかわかんなくてよ……。俺とお前のなが変わるわけでもねーのにな♪」

「お前は別に悪くねえさ」

「だよなー♪ 団ちよはいつだってそのトボケ面だしよ、心配して損し——ごあつ！」
「うっせ」

軽口を叩くバンの横腹へ強烈なパンチを叩き込み、沈黙させる。不死身であるバンが相手だからこそできるツツコミだ。普通の人間ならばまず間違いない死ぬだろう。

フロランスは少し引いている。

「『おお、我が友、気高き憤怒。たとえ呪いが我らの身を冒そうと、心に咲く美しきバラ

を冒せはしない。おお、我が友、勇壮なる罪よ！」

「……詩^{ポエム}？」

「あ……誤解しないでくださいね？ 団長の気持ち全てが全てもわかるとか偉そうなことは言いません！ ただ、互いに呪いを受けた身として……その辛さだけは分かるというか……。だからその、元気を出してくださいね？」

「8点」

「え」

「は、8点？ 何点中8点なんですか!？」

ぎゃあぎゃあど騒ぐエスカノールを適当にあしらうメリオダスの眼前に、フロランスは腕を組んで立った。

「兄様！ 気負う必要はありません！ へ七つの大罪が、そして私がついています！」

「フロランス……」

「ですから安心してください！ 私は今度こそ、最後まで並び立ち、戦い抜きましよう！」

ふんすと擬音が聞こえてきそうなほど気合の入った表情で、フロランスは堂々と宣言する。今までのような己に言い聞かせるようなものでなく、誓いとして。

それを見て、聞いて、メリオダスは毒気が抜けたように笑顔を浮かべた。

いつも通りの快活な、好ましい笑顔を。

「バン、エスカノール、フロランス。サンキュ！」

そう言つてから、ふと思ひ出したようにフロランスを見る。

「そうだ。フロランス、この後ちよつと付き合つてくれねえか？」

「はい？ 構いませんが……どこへ？」

首を傾げるフロランスへ、んー、と少し悩んだ後。

「そこから辺？」

と答えた。



「手合わせ、ですか」

「そ。今のオレがどれくらい動けるか、かるーく本気でな……つと」

「なるほど……了解しました」

連れてこられたのは、リオネスの聖騎士たちがよく使っている訓練場だった。手頃な広さで人目に付きにくいこの場所は、軽い手合わせ程度に用いるならば絶好の場所だ。

準備体操を終えたメリオダスは、拳を手のひらに打ち付け戦闘態勢に入った。

「魔神化は?」

「無しで」

そこで会話は途切れ、互いに構えて出方を探る。

フェイントをかけながら徐々に深く、強く踏み込み——先手を取ったのは、メリオダスだった。

地面が陥没するほどの踏み込みで、常人の目では消えたという表現しかできない速度で一直線に拳を伸ばす。

フロランスは咄嗟に半身になることで躲し、同時に伸び切った腕を掴む。当然メリオダスは振り払おうとするが、それよりもフロランスがメリオダスを投げ飛ばす方が早かった。

空中で体勢を立て直し——直後に背中へ強烈な打撃が捻じ込まれ、メリオダスはすさまじい速度で地面に叩きつけられる。

「いてて……」

人形の窪みができるほどの力で殴りつけられたというのにダメージは然程無いよう
で、軽やかに立ち上がる。

「よつと。……今のはあれか?」
瞬間移動^{テレポート}でオレの背後に回ったのか?」

「ええ、これが中々有用でして」

「たしかにあれは厄介だな。いきなり視界から消えて背後からつてのは、反応が遅れちまう」

「多用すればそれだけ警戒心を植え付けて判断を一瞬でも迷わせることもできますので、大抵の相手には通用しますね」

「なるほど、そりゃあ怖い。——つと、喋りすぎたな。続き、いいか？」

「もちろんです」

言うが早いか、今度はフロランスがしかける。

手に”獄炎”^{ヘルフレイズ}を発現させ、それをメリオダスではなく地面に向かって投げつける。

着弾と同時に小規模の爆発が起こり、砂煙がフロランスの姿を覆い隠す。メリオダスは油断なく砂煙を見つめるが、その頬を高速で飛来した礫が掠めた。

「——！」

後を追うように無数の礫がメリオダスへ殺到するが、躲し、時に叩き落とすことでそれをやり過ぐす。

礫では効果が無いと悟ったのか、砂煙がゆらりと動き——メリオダスの眼前には石と土の塊が迫っていた。

「おわっ!？」

慌てて後ろへ跳ぶが、着地と同時に透明ななにかがメリオダスの足を掬い、宙へ吊り

上げた。

「一本、でしょうか？」

「……だな。いやー参った、まだ足りねえか」

「流石に正面からなら厳しいですよ。私の戦闘スタイルは、言ってしまうえば豊富な魔力と手段に任せた初見殺しの連発、ですからね。基本的に一度の戦闘で同じ手を使うことは無いので対応されることは無いんですよ」

「あの石ころを飛ばしてきたのは魔力なのか？ それとも魔術か？」

「どちらでもない、というのが答えですね。礫とその周辺の空気にそれぞれ反発しあう魔力を付与して打ち出したんです。魔力を込めるほど反発力も上がるのであれだけの速度を出せた、といったところですね」

「はー、器用なことだ」

「それが取り柄なので」

「昔っから得意だったもんなあ、そういうの。オレはその辺りが雑だからよくわかんねえや」

「よろしければお教えしますが？」

「や、遠慮しとく」

「ですよね」

一瞬の沈黙を挟んで、二人は同時に嘖き出した。

兄妹ということもあり、互いの性格や得手不得手などは完璧に把握しているのだから。

一通り笑い合った後、メリオダスは再び立ち上がり、指を鳴らした。

「んじゃ、もういつちよ頼んでもいいか？」

「喜んで」

好戦的な笑みで構えるメリオダス。

柔らかな笑みで構えるフロランス。

につ、とメリオダスが笑みを深め——二人は同時にぶつかり合った。

余談だが、拳を交える度にテンションが上がり、ついには魔神化を解放しての本気の戦いになりそうになったためマーリンが不意打ちで二人の意識を沈めたという。

第15話／思案

——だから、言ったでしょう。

感情のない、泥のような闇に満ちた瞳。

額に浮かび上がる、自身と同じ紋様。

その手に握る鉄の刃は血に濡れていて、返り血が頬を赤く染めていた。

覚えている。

これは、3000年前、トドメをし損ねた女神族に反撃を貰ったときの光景だ。

——敵を前に、有利だからと油断するな。友だろうと家族だろうと、敵ならば冷酷になりなさい。でないと、無様に屍を晒すだけですよ。

鉄のように冷たい声色でそう言った奴に、俺はただ、愚直に頷くだけだった。



〈十戒〉『敬神』のゼルドリスは苛ついていた。

裏切り者にいよいよようにされ、無能な兄が人間程度に瀕死まで追い込まれ、あまつさえ謎の襲撃者により多数の同胞が殺されている。

堪えがたい、煮えたぎるような屈辱を味わっていた。

バキ、と。ゼルドリスの握力に耐えきれず奪い取った玉座が破損する。

情けない、嘆かわしい。

何故襲撃者の一人も捕まえられない。

何故人間如きに敗北する。

何故——裏切り者に負けた。

「——ッ！」

砕けそうなほど強く奥歯を噛む。

ここが開けた場所であれば、一帯が焦土となっていただろう。

それほどまでに胸に渦巻く憤怒は強く、大きい。魔神族の王子としてのプライドと強靱な理性で繋ぎ止めてはいるものの、いつそれが爆発し自分に向けられるか、ゼルドリスの配下たちは気が気でなかった。

ただでさえ強大な力を持つゼルドリスが本能のままにそれを振り回せばどうなるか

は、火を見るより明らかだ。

「……」

ゼルドリスの脳裏には、フロランスとの戦いが繰り返し映し出されていた。

衰えを見せない膨大かつ強大な魔力。

かつてのメリオダスを幻視した莫大な威圧感。

己を全く寄せ付けなかった、圧倒的な暴力。

たった一撃で意識は朦朧とし、頭には敗北の二文字が過った。ゼルドリスが惨敗を喫したのは、これが初めてと言ってもいい。

魔神王の息子として約束された一線を画す闇の魔力を生まれ持ち、世界でも最高峰の剣士を師に持ち、父のため魔神族のためと鍛え上げた力は〈四大天使〉すら容易く屠つてみせるだろう。

だというのに、歯牙にもかけられず、赤子の手を捻るかのごとく一蹴された。

——甚だ疑問であった。

大した鍛錬もせず、祿に指導も受けられなかったフロランスが、何故己よりも強いのかと。

魔術のみならば一流だが、剣技はよくて二流。女神族との戦には消極的で、いつもフラフラとしていたため戦闘経験などそう多くは積めていないはず。

一体、フロランスと己でなにが違うというのか。

どちらかといえば、ゼルドリスはフロランスよりも環境に恵まれていた。

師に教えてくれと請えば願っていた以上を授けられ、それに応えられるほどの才に恵まれ、膨大な戦闘経験を積み、いつしか〈十戒〉のリーダーにまで上り詰めた。

ゼルドリスという少年は疑いような天才であり、秀才である。

ただ——フロランスという少女は、それ以上に天才だったというだけだ。

他者の魔法を遠目から見ただけで完璧に再現してしまうほどの観察眼。

いかに魔力の消費を抑え、かつ威力を底上げできるかを試行錯誤し、独自の魔法を編み出す独創性。

針の穴に糸を通すかのような作業さえ片手間でできてしまう魔力の精密性。

剣の才能こそゼルドリスには及ばないものの、その身体能力と体術はゼルドリスさえ寄せ付けず、圧倒してみせた。

魔神王すら認めるその才は、年月を経れば更に磨きがかかり、いずれは神と同等の領域へと立つだろう。

「…………いや。奴にどれほどの力があるかと、どんな仲間がいようと、父上には決して届かん。次こそは……………」

獣のような形相で無差別に殺気を振り撒くゼルドリスの瞳には、憎悪の炎が宿ってい

た。

今より3000年前。

魔神族と女神族という種族は、蛇蝎の如く嫌いあっていた。

魔神族は、女神族を邪悪で殺すべきモノと考え。

女神族は、魔神族を不浄で滅すべきモノと考えていた。

同じ人外、同じ敵意、同じ殺意を持ちながら——しかし女神族には魔神族以外の三種族が味方した。それは、魔神族という種族が魂を、命を喰らうからだ。逆に、魔神族と真つ向から対立する女神族は治癒と光の魔力を持っていた。客観的に見ればどちらの味方をするべきか、それは明白だろう。

諍いは争いへ。争いは戦争へと転じた。

毎日どこかで血の雨が降り、怒号が轟き、憎しみが渦巻いていた。

そんな時代に於いて、魔神王の娘として生を受けた一人の魔神族——フロランスは、異常そのものだった。

膨大な闇の魔力と神懸かり的な魔法の才能を保有し、時期魔神王候補と目されていた

メリオダスに次ぐ實力を持ちながら、しかし彼女が自らの意思で争うことはなかった。フロランスが力を振るうときは、決まって父や兄に命令されたときだけだった。

指揮を執ることも、率先して戦場へ赴くことも、必要以上に命を奪うこともない、異端の魔神。一部では女神族と繋がっているのではないか、という声すらも上がっていたが、フロランスは全く意に介さなかった。

何故、と聞けば、きつとこう返ってくるだろう。

——つまらないから。
と。

(私はあの頃から、なにか一つでも変わったのでしょうか)

そんな昔のことを思い出しながら、フロランスは臨時で与えられた個室からリオネスを見渡した。

平和で穏やかな、心から笑い合える暖かい場所。かつての環境とはまるで正反対で、居心地が良かった。

(昔の私に、今の私の話をしたらどんな反応をするのだろうか。嘆くのか……それとも羨

むのか)

十中八九後者になりそうだと、薄く笑う。

なにもかもが不自由だった3000年前とは違い、ここでは同胞の目も、父の目も気にする必要がない。無感情で冷酷な魔神族を演じる必要はないのだ。

それあれかしと望まれ、応じた過去。今となつては屈辱でしかない。

愛や善性。魔神王が切り捨てたものの強さを、フロランスはよく知っている。それらを捨て去ることを強要され、ただ戦うための道具にされてきた。

故にこそ思う。

感情が無い生物など、死んでいるも同然だ。

怒りも、悲しみも、愛も、不必要ならば最初から備わっていない。余計なモノならば、持ち合わせているはずが無いのだ。

では何故、自分やメリオダスは感情を持つている？

簡単だ。それが必要だから。

そもそも、本当に心の無い殺戮のためだけの駒が欲しいのならば、それを造れば良い。それができるだけの力を魔神王は持っている。何故そうしないのか定かでは無いが、警戒しておくに越したことはない。

そしてそこまで考えて、唐突にある疑問が浮上した。

(いや……冷静になった今、よく考えてみれば——魔神王の目的は、一体なんなのか) 今まで見向きもしなかった、魔神王の思惑。

あの父の性格からして現世を支配するつもりなのか、とも思ったが、それならばメリオダスを放置しておくのはあまりにも不自然だ。

死から蘇る都度感情を喰われ非情となり、同時にかつての——最凶の魔神と呼ばれた頃へ逆行する呪い。現世を支配しようとするならば、真つ先に排除すべき障害は間違はなくメリオダスだろう。それをしなかったのは何故か。

「——できなかつた……？」

しなかつた。あるいはできなかつた。

その可能性へたどり着く。

「本当に兄様を排除するなら、初めから呪いを解いて〈十戒〉をぶつければ良い。だといふのに、魔神王はそうしなかつた。もしかして、魔神王の計画には兄様の存在が必要不可欠……？」

フロランスの脳裏に、最悪の答えが浮かび上がった。

あくまでも『かもしれない』——確証が取れない今、可能性の話ではあるが。

「兄様を魔神王にすることを、諦めていない」

正直に言えば、一蹴したい気持ちでいっぱいだった。

よく考えてほしい。

一つの国を背負う王の息子が、その国を裏切った。しかし、王は憤りこそしたが、裏切られてなお息子を王の座に据えることを良しとする。

普通の人間ならば、陰謀を疑う。

当然フロランスも、魔神王が何か良からぬことを企んでいるのではないかと睨んでいる。

たしかに潜在能力ならば、メリオダスはゼルドリスとフロランスを遥かに凌ぐ。だが魔神族から見れば、メリオダスを魔神王にするのは多大なリスクを孕んでいる。

一度裏切ったものを仲間として——あまつさえ王として迎えるのは、正気の沙汰ではない。

「兄様を魔神王にするのは、あくまでも過程に過ぎない……う。」

つまりその先にこそ、魔神王の見据える目的がある、と推測できる。

洗脳、脅迫——考えられる手段はいくつかあるが、どちらにせよロクでもないことであるのは容易に想像できる。

「もしかしたら見当違いかもしれない。けれど、現状はこれ以外の答えは見つからない。……とりあえず、魔神王の最終目標は兄様を魔神王にした先にあると仮定して動かなければいけませんね。今のブリタニアに兄様を殺せるほどの存在がいるかどうか分

ませんが、万が一のことを考えておくべきですかね……」

今後の方針である、『メリオダスたちと共にへ十戒』と魔神王を討つ』というものに『魔神王の動向に注意しつつ、メリオダスを魔神王にさせないように動く』を付け加える。

中々面倒なことになってきたと嘆息し、ふとある方向へ視線を向けた。

「……おや？ 強い魔力が一点に集まっている……？ これは巨人族と妖精族のもの

……なるほど、ディアンヌとキングが戻ってきたんですね。それも数段強くなって」

少し離れた場所に聳え立つ古城の頂から、七つの強い魔力反応がある。

十中八九、へ七つの大罪』だろう。

「ふふ……中々面白いですね。どうやってこの短期間で闘級を上げたのか、興味は尽きませんが……そうですね。残るへ十戒』は、グロキシニアとドロール、それにメラスキュラとゼルドリス……エスタロツサも、きつと生きていることでしょう」

生死不明な二人を除けば、七対五。数の有利は取れている。

理想は、一人一人確実に全員で挑み倒すことだが――

「そう、上手くはいかないでしょうね。ゼルドリスがそんな単純なことをしてくるはずがない。……いや、違う。そうだ、あの人たちがいた。3000年前は、全くと言っていいほど表舞台に立つことは無かった。けれど、今回出てこないとは限らない。むしろ、ゼルドリス側の戦力が薄い今、確実に出てくるはずですよ」

冷や汗が流れる。

フロランスの推測が正しければ、ゼルドリスやエスタロツサ以上の障害が立ち塞がることになる。それこそ、メリオダスをも超えるほどの存在が。

幼い頃から間近で見続けてきた、最古にして最強と謳われるその力を、経験を、嫌というほど理解しているからこそ、心配せざるを得なかった。

「もし仮に、何の準備も無く戦闘に入れば、まず間違ひなく塵殺される。かと言って、彼らに明確な弱点が存在するかどうか……なんにせよ、そちらの対策も練っておくべきです。万が一の場合は——」

——この命を投げ捨ててでも、仲間を守ろう。



違和感に気付いたのは、つい最近。

手のひらで”獄炎”^{ヘルフレイズ}を弄びながら、フロランスは訝しげに眉を顰めた。

というのも、バイゼルの〈十戒〉戦以降、体に無視できないほどのある変化が起き

ていた。放置しておけば命に関わるという類のものではないが、見たことも聞いたこともない事態なのだ。

それは――

「魔力が、増大している……う？」

保有する魔力が、増えている。

数値にして1000程度の変化だが、これはあまりにも不自然すぎる。絶えず鍛錬を続けていればそうおかしくはない話だが、ここ数日間フロランスはメリオダスとの手合わせ以外で力を使っていない。つまり、なにもしていないにも関わらず魔力量が増えたということだ。

これからのことを考えると良いことなのかもしれないが、それ以上に気味悪く感じる。いくら成長途中の肉体とはいえ、こうまで突然成長し始めるはずがない。なにかしらの外的要因があるのではないかとバイゼルでの戦い以降の記憶を辿るが、これといって該当する出来事は無い。

強いて言うならば、メリオダスがエスタロッサに殺害されてからの記憶が途切れていることくらいか。

「ううむ……寝込んでいる間マーリンに実験台にされたりとか、してないですよね……」
不気味なほどに思い当たることが無い。

しばらく首を捻って考え込んでいたが、答えが見つかることは無かった。

第16話／一時の休息

驚愕。

フロランスの頭はそれだけに支配されていた。200年以上生きてきて体験したどんなことよりも奇怪で、複雑で、言葉すら一瞬失った。無表情で、人の心が全く分からなかった、あのゴウセルが。

「改めてよろしくね、フロランス！」

無垢な笑顔で、心底嬉しそうに手を握ってそう言ったからだ。洗脳でもされているのではないかと疑ってしまうほどに、今までのゴウセルとはかけ離れていた。悪いというわけではない。ただ、3000年前から接してきたゴウセルとはあまりにも乖離しすぎているため、違和感が離れないのだ。

「え、あ、ええ……よろしく、お願いしますか？」

「うんー！」

「えっと……ゴウセル、ですよね？」

「そうだよ？」

「……一体、なにがあつたんですか？　まるで別人のようですが」

「なに、単純な話だ。ゴウセルには心があつた。ただそれだけだ」

「……たしかに、あの人に造られたのなら、むしろ無い方が不自然なくらいです。……すみません。あまりにも唐突だったもので動揺してしまいました」

屈託の無い笑顔で自信を見つめるゴウセルに、フロランスは小さく謝罪する。〈十戒〉の誰かが今のゴウセルを見れば、フロランスと同様の反応をするのだろう。一度根付いたイメージというものは、そう簡単に書き換わるものではない……が、そういった側面が存在していたと思えば案外すんなりと受け入れられるものだ。

それと同時に、フロランスはゴウセルの魔力が飛躍的に増大していたことに気づく。恐らくは、これがゴウセル本来の魔力なのだろう。ゴウセルを超える人形はフロランスでも——いや、マリーンであろうとも造ることは不可能だろう。精々が自立稼働する殲滅人形だ。改めてゴウセルの創造主に畏敬の念を抱いた。

「……フロランス、ちよつといいかい？」

「はい、どうしました？」

ゴウセルになされるがままのフロランスに、キングがおずおずと話しかける。その顔

には罪悪感と、バツの悪さが滲んでいた。ただ、フロランスはキングがなぜそんな顔をするのか分かっていない様子だった。

「ごめん！ オイラ、なにも知らないくせに君に酷いことを言つて……」

首を傾げるフロランスに、キングは勢いよく頭を下げた。歯を食いしばりながら紡がれた言葉は、悔恨の色に染まっている。思い当たるのは、エスカノールを探しにいく道中、メリオダスたちと別れる際にキングが自身を貶したことから。

「……いえ、気にする必要はありません。あの状況で受け入れろと言うのは酷ですし、それに……慣れてますから」

「それは……でも！」

「あなたが気に病むことではありません。ですから、ね。あの一件については、これで最終にしましょう？」

「……君がそう言うなら、分かったよ。ごめんね。それと、よろしく」

「ええ、よろしくお願ひします」

笑顔を浮かべて、互いに手を取る。完全に吹っ切れた、というわけではないが、これ以上言及するのはフロランスに失礼だろう。キングは、命懸けで〈十戒〉と戦ったフロランスを疑うことはしない。

誰かのために命を張って戦う。言葉にするのは簡単だ。けれど実行するとなると、一

体どれだけの人が臆せず立ち向かえるか。どれだけの人が、痛み、恐怖、プレッシャー——それら全てを呑み込んで、刃を振るえるか。

フロランスは死の間際まで戦い続けた。あと一歩遅ければ死んでいたかもしれない。たった一人を守るために限界まで刃を振るって、何日も寝込んでしまうほど激しく力を消耗した。

今なら心の底から言える。フロランスは信用できる仲間であり、友であると。キングはフロランスを、〈七つの大罪〉と遜色の無い戦友として信頼している。

「あれ、そういえば羽が生えてますね」

「今!？」

「お子様サイズのちっせえ羽だけどな☒」

「うるさいよバン！ 小さくたって羽は羽なんだからいいだろ！」

「ええつと、小さい羽もいいと思いますよ？ 愛玩的な意味で」

「オイラの羽を小動物かなにかと思ってるの!？」

「なあ、これ引つ張ったらどうなるんだ？」

「千切れんじやねえのか☒」

「ちよつ、それは洒落にならないから……団長？ 冗談だよね？」

「ああ、なんて可哀想な目に……」

「大体君のせいだからね!」

口元を手で抑えるフロランスに、キングはたまらず叫んだ。フロランスの態度は、先程までの怜悯なものからメリオダスのようにマイペースで掴み所の無い砕けたものへと変化していた。

心境の変化でもなんでもなく、これが本来フロランスなのだ。クールな外見と雰囲気、に騙される者が続出しているが、フロランスの根底は明るく、悪ふざけには積極的に乗りっていくような人物である。

これまではそういった側面を出す余裕もなく、常に余計な感情を制御していたため誰にも気づかれなかったのだろう。無論、メリオダスも例外ではなく。

「……あんなに笑えたんだな、あいつ」

「意外か?」

「ああ。なんつーか……やつぱり無理させてたんだ……」

「ふ……だがもう心配はいらないだろう。あれを見てみる」

マーリンの示した先へ視線を向ける。そこには、フロランスが底抜けに明るい笑顔でバンと共に仲良くキングで遊んでいる光景があった。早すぎる順応にメリオダスは苦笑いをこぼす。

「相性が良いんだろうな……もうあんなに打ち解けてやがる」

「あの笑顔といい性格といい、団長殿によく似ているぞ」

「そりやあもなるわけだ」

「もしかすると、ゼルドリスも本当は似たような性格をしているのかもしれない」

「……どうかな」

寂しげに呟いて、メリオダスは空を見上げる。雲一つ無い快晴だ。メリオダスの脳裏には、ゼルドリスの憤怒と憎悪に塗り固められた顔が浮かんでいた。元々兄弟仲が良かったかどうかと言え、決して良くはなかった。けれど、悪くもなかった。

ゼルドリスは本当にメリオダスを敬っていたし、互いの間にある壁をなんとかしようと試行錯誤していた。ただ、メリオダスはそれに応えることができなかった。しよう、とは思っていた。だがそれも、今となつては過去の出来事で、メリオダスとゼルドリスは互いに刃を向ける関係になつてしまった。

——もう、アイツとの関係を修復するのなんて無理なのかもな。

そんな暗い思考を振り払い、メリオダスは背を向けて歩き出す。

「さてさてさーて、そろそろ宴の準備でもしますかね」

「あつ、待てよ団ちよ☒」

「よっしや行くぜ豚野郎どもー」

「ゆつくり……静かに……息を殺して……」

「うふふ、ドキドキしちゃう」

「慎重に……慎重に……」

コソコソと物音を立てずに階段を上る。息を殺し、顔と顔が触れるくらいの距離でなければ聞こえないほど小さな声でやりとりしながら、歩を進める。傍から見れば完全に不審者である。

フロランス、ディアンヌ、エリザベスの三名は、今この瞬間、言い訳のしようもないほど怪しかった。なにをしているのかと言われれば、とある人物に悟られず訪問しようとしているだけなのだ。

「三人とも！ バレてるわよ」

「むっ、やはり駄目でしたか」

「どうぞ入って」

穏やかな口調で入室を促され、三人はドアを開けて足を踏み入れる。その先で待つていたのは、キングの妹であるエレインだった。エレインは、三人の顔を見るとたおやかに笑った。

「三人ともまだまだね。心の声がたくさん聞こえてきたわ」

「ちえー、隠したつもりだったのになー」

「次からはゴウセルに協力してもらいましょうか」

「力を入れる場所間違ってるわよそれ」

「あ、あはは……」

真面目な顔で読心能力を攻略しようとしているフロランスにツツコミが入る。ちなみにフロランスは割と本気で考えていたりする。

「体は大丈夫なの？」

「ええ。禁呪で魂を繋ぎ止めている状態だから、正直元の調子には程遠いけど……エリザベスの魔力のおかげで大分楽なの」

「私にもその辺りの知識があればよかったです……」

「気にしないで。こうして現世にいられるだけで僥倖なもの。これ以上のわがままは言わないわ」

「そうですか……。とは言え心配なので、一応診させてもらいますね」

「手をかけさせてごめんなさい」

「謝らないでください。私がやりたくてやってるんですから」

フロランスはエレインの胸に手を当て、変調が無いか探る。

魔力の流れは極めて正常で健康的。禁呪に關してはあまり知識が無いため確証を持つて言うことはできないが、今のところ変わったところは無いため安全としておく。エリザベスの魔力による治療もあり、メラスキュラが存命である限りはこの調子を維持できるだろう。

「ん……大丈夫そうですね。余程激しい戦闘などをしなければ問題は無いはずです」

「ありがとう。……そうだ、デイアンヌ、妖精王の森は様子はどう？」

「んー？ 色々あつたけどみんな元気だったよ！ ……あつ、そうだ！ ボクとキングがね、3000年前のブリタニアに行ってきたんだけど」

「……！」

「そしたらね、なんとそこで——昔の団長とキミに瓜二つのエリザベスに出会ったんだ
！」

「——」

「どうしたのフロランス？ 怖い顔をして……」

険しい表情で動きを止めたフロランスに、エレインは心配そうに声をかける。しかしなにも返さないフロランス。まるで怒りに打ち震えているかのような様子に、エリザベスたちは不安を覚えた。

「デイアンヌ」

「な、なに……?」

「その話は、やめてください」

「え、ええ!? どうして!? ボク、なにか嫌なこと言った?」

「あなたはなにも悪くありません。ですが……」

「フロランス、なにか事情があるなら私たちが……」

「……無理です」

「無理……って、そんなのやってみないと分からないよ! ボクたち、そんなに頼りないかな!」

「……いいえ。あなたたちは誰よりも頼れる仲間です」

「じゃあ——」

「でも、ダメなんですよ。何度も試しました。何度も頑張りました。……それでも、全く届かなかった。魔神王の魔力だって何度も行使しました。けれどダメだった」

「ねえ……それって一体……」

「……すみません。これだけは、何があっても言えないのです」

変色するほど強く拳を握って、感情を抑えつける。

これは……これだけは、なにかがあつても秘匿しなければならぬ。本人に知られてしまえば、それは自身が殺すのと同義なのだから。

楽しかった歓談の場は重苦しい空気に包まれ、四人はなにも言うことができず、夜に行われる宴に向けて静かに解散するしかなかった。

それを申し訳なく思いながらも、フロランスはこれ以外方法は無かったのだと無理矢理自分を納得させる。些細なきっかけで扉が開いてしまえば、その先に待っているのは――破滅なのだから。



そして夜が訪れた。

魔神族であるが故に闇に反応して高揚する魔力を煩わしく思いつつ、フロランスは宴の場である〈豚の帽子〉亭へ足を運んでいた。

「失礼します……」

「おう、来たかフロランス！」

「こつちへどうぞで」

「ありがとうございます」

エリザベスに促され丸椅子に腰を下ろす。既に宴が始まっていくらか経過していた

のか、一部の団員はアルコールが回っているようだ。メリオダスに至っては酒樽をまるまる一つ呑み干している。それでも全く酔っ払っていないのは流石と言ったところか。

「オラオラ、師匠も飲めよ〜☒」

「がぼぼっ！ むごっ！」

「豚に酒は……大丈夫なんでしょうか……？」

「ホークだし大丈夫だろ」

「たしかに」

フロランスはボトル一本を無造作に呑み干し、ほう、と熱のこもった吐息を漏らす。兄妹とは言えメリオダスほど耐性があるわけではないのか、頬は少し紅潮している。それに構わずもう一本ボトルを握り、再び豪快に流し込んだ。

「……団長、マーリンさんの姿が見えないんですけど……まだでしょうか？」

「怪しげな実験にでも没頭してんじゃねえか？」

「三度の飯よりも実験が好きな人ですからね、マーリンは」

「だと、いいんですが……ちよつと気になるので、見てきてもいいでしょうか……？」

そう言つてマーリンの部屋へ向かおうと瞬間、空席に人影が出現した。

「あ、マーリン」

「遅れてすまない。大方、私が怪しげな実験に没頭しているとも思っていたか？ ま

あ……大当たりだ」

「マーリン様！ いらしたのですか、今すぐお酒を注ぎますね」

「すまないな、エリザベス王女」

「じゃあ団長、改めて乾杯しましょうよ！」

「ん？ おお、そうだな！」

「よくやく七人揃ったか☒」

「まるで10年前に戻った気分だ。ねえ、キング？」

「そう？ オイラは少し違うと思うけど……ゴウセルが本当の仲間になったんだから
さ」

「そうそう！ それから——新しい仲間も増えたしね♡」

「んぐっ」

「コラディアンヌ、返しやがれ☒」

ディアンヌの手の内には、10年前にはいなかったエレイン、エリザベス、フロラン
スの三名がいた。あまりにも唐突なことにフロランヌは酒をこぼしそうになったが、慌
ててボトルの角度を調節することで事なきを得た。

「ディアンヌ、せめてもう少し優しく頼みます」

「ごめんごめん、てへへ」

「さてさてさーて……そんなじゃ改めて、へ七つの大罪の再会に——」

『乾杯!!』

「オラアツ、全員呑め〜☒」

「酒に弱すぎませんか？ 足元フラフラですけど」

「昔っからこうなんだよ、こいつ」

「そうそう。しよっちゆう団長に呑み比べを迫っては真っ先にダウンするのがバンドか
らね」

「ねえねえゴウセル！ ボクずっと気になってたんだ。君の作り主のゴウセルはどう
やって聖戦を終わらせたの？」

「ゴウセルが……」

「聖戦を終わらせた……!?!」

「それは初耳だな……」

「話がよく見えませんが、3000年前の聖戦は女神族が自分たちの身を犠牲に魔神族
を封印することで終わったんですよね？」

「まさか、常闇の棺を作ったのがあいつ？」

「それはない。あれは巨人の名工ダブズの手による品だ」

「あのゴウセルが……」

広がる困惑。誰にも——メリオダスやマーリンも知り得なかった事実には、誰も彼もが訝しげな表情を浮かべる。魔神王の娘としてそれなりに交流があつたフロランスでさえも、この瞬間に初めて知つた。デイアンヌが嘘をつく理由も意味も考えられない……ならばその話は真実なのだろう。

誰が聖戦を終わらせたのかは、正直言つてどうでもいい。気になるのはその手段である。いくらゴウセルが稀代の魔術士であっても、聖戦そのものを完全に終息させることは難しい——不可能に近いとさえ思える。だが実際、ゴウセルは聖戦を終わらせたという。それが本当ならば。

「なにか、隠された事実がある……」

「……ごめんなさい。今はまだ話せない。話していいのか分からない。話しても、納得してくれるかどうか……」

「え、あつ、こつちこそごめんね!? キミを困らせるつもりは無かつたの……話したくなつたときで良いから! ね!」

「んじゃゴウセル、てめえの女装癖はどこでついたんだ?」

「それなら答えてもいいよ！ 昔バルトラに無理矢理女装させられたのが初体験！」

「マジかよ……」

「そんな趣味があつたなんて……見る目が変わりそうです……」

複雑な表情で、この場にいないバルトラへの評価を穏やかな好々爺から穏やかな変態へと改める。

文字通りの着せ替え人形にされていたのではないかと過ぎつたが、そこまで知ってしまふことは憚られた。

「……エリザベス？ どうしました？」

ぐびぐびと変わらぬペースで酒を呑んでいると、ふとエリザベスの様子がおかしいことに気づいた。呼びかけてみても、心ここにあらずといった様子でメリオダスの背中だけをみつめ続けている。

「ぼんやりしちゃってどうした〜？」

「はわっ……」

いよいよ心配になり肩でも揺すろうとフロランスが立ち上がった瞬間に、メリオダスが高すぎる身体能力を無駄遣いしてエリザベスの背後に回り、胸を揉み始める。

ぼよんと跳ねる胸にキングの目は釘付けになり、それを見たディアンヌは器用にキングの小さい耳を引っ張った。下手をすれば千切れそうである。

「悩みがあるならなんでも言ってみろ」

「後で二人きりで話したいことがあるの。いいかしら、メリオダス？」

「ん……おお」

「お酒、追加で持つてくるわね」

そう言つて店の中へ姿を消すエリザベス。怒つているといふ雰囲気ではなかったが、今まで見たこともなかった態度に少し気圧された。

「とうとうエリザベスちゃんを怒らせたな」

慰めるように耳でメリオダスの肩を叩くホークだが、全く見当違いであることには気づいていないようだ。

「あ、あのく、マーリンさん、よろしければ新しく作った詩ポエムをぜひ……」

「少し酔つたらしい……また今度にしてもらおう」

「団ちよと同じザルのお前が酒の一杯二杯で酔つただく？ うそつけ☒」

「バンさん！ 失礼ですよ！」

「ふ……相変わらず絡み酒だな。……忘れてはいまいな。我々はまだ全ての〈十戒〉を討つたわけではないのだぞ？ 残るは『敬神』のゼルドリス。キャメロット及びあの地方一帯が奴の完全な支配下にあると言つていいだろう」

「ふわっはっは！ へ七つこの大罪セムが集まりや楽勝だろ！ なにより八匹目の大罪とでも

言うべき『残飯』のホーク様がいるんだからな！」

「迂闊に手を出せば必ずやられるぞ。相手の力は未知数だ」

「ぴいつー！」

事態を甘く見ているホークに凄むマーリン。一度も直に実力を見ていないが故の発言だろうが、少しでも慢心すれば壊滅の危機がある相手なのだ。お遊び気分は許されない。

「その点についてはご安心を」

「なに？」

「実はゼルドリスとは既にリオネスで一戦交えまして。その上で言わせてもらいますと……一対一ならばまず勝利することができます。『敬神』の戒禁も、『魔神王』の魔力を以ってすれば無いものと同じなので」

「……だが、万が一ということあるだろう。断言するのはまだ早い」

「でしようね。ですが戦う前から弱気では、勝てる戦も勝てませんよ」

「忠告痛み入る……が、警戒しておくに越したことはない。物事が全て予想通りに運ぶとは限らんからな」

「わかつていますよ。私だってなにもかも上手くいくとは思っていませんから」

互いの意見をぶつけ合う二人。メリオダスは手を叩いてそれを中断させ、視線を自分

に集める。

「オレたちの当面の目的は、奴の戒禁で虜にされたりオネスの住民及び聖騎士たちの救出！　そしてキャメロットの解放……戦うのはその後だ！」

「団長殿の言う通り、綿密な作戦を立て一致団結の上事を進める必要がある。私からは以上だ」

それだけ言うと、もう話すことは無いとばかりに退出していく。その背中を見送つて、フロランスは酒をグラスに注ぎ一息に喉に流し込む。喉が焼け付くような感覚と後に残る苦味を心地よく思いながら、バンたちの起こすどんちゃん騒ぎを眺めてカラカラと笑った。

第17話／呪われし女神

宴会を終えた翌日。体力を使い果たし泥のように眠っていたフロランスは、差し込む陽光で目を覚ました。

「ん…………ふあ…………」

漏れ出るあくびをそのままに、寝ぼけ目でキョロキョロと部屋を見渡す。酔っぱらったまま歩いたせいでぶつけた箇所があるのか所々散乱しているが、さほど気にするものでもないだろうとベッドから足を下ろす。

フロランス以外の面々は既に活動を開始しているようで、へ豚の帽子〈亭内外で慣れ親しんだ魔力を感じられる。

「くあ…………よし、浮かれているのは昨日まで。万全の準備で臨まなければ」

ぱちんと頬を両手で叩いて眠気を吹き飛ばす。

キャメロットには『敬神』のゼルドリスという最強格の魔神が待ち構えているのだ。同格のフロランス、メリオダスがいたとて油断はできない。してはならない。

フロランスはリオネスでの一戦でゼルドリスに勝利したが、それはあくまでゼルドリスの行動を制限した上で魔神王の魔力を行使できたからだ。現状、ゼルドリスと真正面から戦えるのはフロランスとメリオダスのみで、他のメンバーでは戦いにすらならないだろう。

一通り体をほぐして、朝食でもとろうかと扉を開けた瞬間——〈豚の帽子〉亭が眩い光に包まれた。一滴の悪意も含まれていない清廉な魔力。発生源は、一つ下の部屋だ。(下はたしかマーリンの部屋だったはず……いったいなにが……?)

湧き出る疑念を抱え、慌ててマーリンの部屋へ向かう。先ほどの光は間違いなくエリザベスのものだ。それが行使されたということは、少なくとも重傷……あるいはそれに匹敵するほどの状態ということ。気が気ではなかった。

「どうしました!?!」

壊れそうなほど勢いよくドアを開く。

そこには不安げな表情のエスカノールとヘンドリクセン、そして多量の汗をかいて額に手を当てているマーリンと、かなりの量の魔力を一瞬で消費したためか息を荒げているエリザベスの姿があった。

遅れて、外にいたメリオダス、キング、バンの三名も慌てて部屋に入ってきた。

「エリザベス、なにがあった!？」

「……私としたことが、ゼルドリスの魔力に囚われ深い眠りに落ちていたようだ。エリ

ザベス王女の力が無ければ危なかった……礼を言わせてくれ」

「エリザベスが、ゼルドリスの魔力を……?」

「ああ。たいしたものだ」

いくらエリザベスの魔力が強大であったとしても、ゼルドリスほどの魔力を打ち破れるとは思わなかったのか、メリオダスは怪訝な表情を浮かべる。

「それからエスカノール、お前にも礼を言わねばな」

「い、いえ……僕は当然のことをしただけなので……」

「エリザベス、どこか痛むのですか? なにか体に違和感は?」

「……いえ、大丈夫……平気よ……」

「エリザベス、肩貸すぞ」

「本当に平気……少し疲れただけだから……」

「そんなこと言っつて、なにかあったらどうすんだ」

「……一人で風に当たっていたいの」

顔を見せようともせず、足早に部屋を出て行くエリザベス。

「団長……本当になにをしたの？」

「んー……」

エリザベスの突き放すような態度は、さほど付き合いが長くないキングでも違和感を覚えてしまうほど。ただ単純に怒っているだとか、そういった類のものでないことは辛うじてわかる……が、当の本人でさえもなにが原因かわかっていない以上、解決のしようがない。

「些細でも思い当たることかないの？ あんなエリザベス様初めて見たよ」

「まったくこれっぽっちも」

「なにか思い詰めたような顔でしたが……兄様がエリザベスに対して接し方を間違えるはずもないですし……」

「すごい信頼だね……」

「たしかに胸を揉んだりお尻を触ったりはしますけど、エリザベスが不快になるようなことは絶対にするような人じゃありませんからね、兄様は」

エリザベスから怒りや憎しみなど、負の感情は感じなかった。故にメリオダスではなく、全く別のことが原因なのではないか、とフロランスは考える。

「話し合える雰囲気でも無いし、時間が解決してくれることを祈るしかないね……」

「そう、ですね……それで解決すればいいのですが……」

一抹の不安を残して、いよいよ作戦は決行の時を迎えた。

フロランスの装備は黒を基調とした長衣と右手に簡素な手甲を着用しただけの軽装だが、〈七つの大罪〉は皆しつかりとした鎧を着込んでいる。

フロランスが鎧を着ていない理由は二つ。

一つ、そもそもフロランスは聖騎士でもなんでもなかったため鎧を着る必要がないから。

二つ、ガチャガチャとしたフルプレートがあまり好きではないから、である。

「昨晚も言った通り、オレたちの目的は人質の救出とキヤメロットの解放だ。ところが

——だ、事はそう簡単じゃないらしい。だよな、マーリン?」

「うむ。現在キヤメロットは、テレポート瞬間移動^{テレポート}や^{アフソリユニットキャンセル}絶対強制解除^{アフソリユニットキャンセル}すらも拒む直径百マイ

ルに及ぶ次元のひずみに覆われている。これを破らぬ限り、キヤメロットへの侵入は不可能と言っている」

「瞬間移動^{アフソリユニットキャンセル}や^{アフソリユニットキャンセル}絶対強制解除^{アフソリユニットキャンセル}も拒む……ですか、厄介ですが、それならば『魔神王』の魔力でどうにかなるのでは?」

「もつともだ。しかしフロランス、お前とて魔力は無限ではない。次元のひずみを解除する端から再生させられてしまえば打つ手は無くなる。もしひずみの内部で魔力が尽きたなら、まず生きて帰ることはできなくなるだろう」

「……なるほど。たしかに、その方がメラスキュラを無視するよりはるかにリスクが少なく、かつリターンが大きい」

「そういうことだ」

「……んで？ 当然方法はあるんだろーな☒」

「ああ。王国より南東に250マイル。そこが、このひずみの発地点だと特定した」
「リオネスから250マイル……いったいなにがあるんだろ？」

「イスタール……いや、それよりもずっと南か……」

「城塞都市コランド、何百年か前に大虐殺で滅びた廃都だ」

「ただだ……大虐殺?! そんなところへ行くんですかあ？」

不穏なワードに、エスカノールは声を震わせる。昼に近い時間帯とはいえ、マーリンの魔道具で魔力を抑制している間は人一倍臆病で弱い人間故、そういった反応は仕方ないことだ。

「南東か……じゃああそこも通過するよね……」

「あそこ？」

「少し、寄り道してほしいんだ。どうせ一日じゃ着かないでしょ？」

「それくらいなら構わねえよ。馴染み深いところなのか？」

「うん。俺の友達がいるんだ」

ゴウセルの返事に、そっか、と笑顔で応えるメリオダス。十年前は〈七つの大罪〉以外での交流が全くなかったゴウセルの口から友、という言葉が発せられたのは新鮮で、それ以上に嬉しかったのだ。自主性や人間性、そして雰囲気は、好ましい方向へと向かっている。

「コランド……コランド……どこかで聞いたことある名前だな……ねえヘルブラム——あれ？ ヘルブラム？」

キングの唯一無二の親友ヘルブラムの魂が宿った兜は、着用すれば兜を通してヘルブラムを見ることだけでなく、言葉すら交わすことができる——のだが、なぜか親友の姿はなく、キングの呼びかけは宙に溶けていった。



「なあ、フロランスよ」

「どうしましたホーク。残飯ならばパンか兄様に頼んでくださいよ」

「オメエは俺をなんだと思ってるんだ！」

「……なんなんでしょうね？」

「俺に聞くな！」

「プゴー！」と鼻息荒くフロランスに怒鳴る。

喋る不思議な豚と言えばよかったのかと、フロランスは首を捻る。

「それで、私になんの用で？」

「いや、そんな大それたもんでもねえんだけどよ……ずっと思い詰めたような顔してるから心配になってな」

「……ふふ、らしくないですね」

「なんだとー!? 俺ほど仲間想いの豚はいねえぞ！」

「そうですね。……これはあなたたちにも話していなかったので、実は私とゼルドリスは兄弟なんです」

「……マジ？」

「マジです」

「つつーことはお前ら……兄弟同士で……」

「そうなりますね。……客観的に見れば、悪人なのは私たちの方です。同胞を裏切って、殺して……実の弟にすら殺意を向けられている」

「……」

「私は弱虫で、臆病者で、最低な女ですよ」

吐き捨てるように言葉を並べるフロランスを、ホークは黙って見つめる。なんにも言えることが無い故に。

「もし」

先程よりも幾分か柔らかい声色。

フロランスは、目を細めて彼方を見た。

「ゼルドリスが私を許さないと言うのなら、私はその怒りを一生背負って生きていきましよう」

それは、愚かな自分に対する自嘲で。

「ゼルドリスが私に苦しんでほしいと言うのなら、快く受け入れましよう」

後悔で。

「——ゼルドリスが、私に死ぬと言うのなら、私は喜んで七つの心臓を抉り出しましよう」

揺るぐことのない決意だった。

——それはきつと、防ぎようのない事態で。

いつか必ずやってくるかと分かっていたことだった。

「離してディアンヌ！ バルザドが狼ウエアフオックス男に噛まれたって、早くメリオダスに知らせて

！」

「バ、バルザド……？ 誰……？」

なにかに駆られるように叫ぶエリザベス。その様子は尋常ではなく、誰一人として状況を理解できずにいた。

「なにがあつた!？」

「団長！ 急にエリザベスの様子が変に……」

「——ああ、メリオダス……バルザドが重傷だつて騎士団から連絡があつて」

「お前……まさか……」

「私が見よう。エリザベス王女、私が誰かわかるか？」

「……マーリン！ 見違えたわ、あんなに幼かった子が……まだ一人でベリアルインにいるの？ 今日はまだメリオダスのところへ遊びに来たのかしら？」

異様な雰囲気息を呑む。

〈七つの大罪〉とは全く無関係の人物の名前を出したかと思えば、今度はマーリンと昔からの知り合いであったかのような言動をしている。

「いったい、なんの騒ぎで——」

騒ぎを聞きつけて降りてきたフロランスは、原因となるエリザベスを見て言葉を失った。

「エリ、ザベス……その目は……」

魔神族特有の恐怖を抱かせる闇のような瞳とは正反対の、見るものに安心と畏敬を抱かせる輝く瞳。中心には女神族特有の不可思議な紋様が浮かび上がっている。

「なんで……」

喉の奥から絞り出したか細い声は、エリザベスが倒れ込む音に掻き消された。



「エリザベス様の身になにが起こってるの？」

「ボクもわからない……エリザベス、大丈夫かな……」

「……原因はわかんねえのか、マーリン」

「私の呪いを解く際、ゼルドリスの魔力に干渉した影響だろう」

「じゃあ、今度はエリザベスがその呪いに——」

「違う」

最も考えられる可能性を、しかしメリオダスは確信を持った口調で否定する。

「エリザベスの記憶が戻り始めたんだ」

「……へ？ 記憶って、前世の!? すげい!」

「……ん？ 前世ってなんの話？」

「キング、絶対驚くよー! なんとね! エリザベスは3000年も昔から記憶を無くしながら何度も転生しているんだって!」

「えええ!? 嘘!？」

「だからエリザベスはね、前世の記憶を取り戻したいってさつきボクらに——」

「ディアンヌ!!」

まるで自分のことのようににはしやぎながらキングに事情を伝えるディアンヌに、フロランスは堪えきれずに怒声を発した。

「な、なに……?」

「私、言いましたよね。エリザベスのことについては、もう話さないでくださいって」
「で、でも、エリザベスがどうしても知りたいうって……」

「私と兄様が、なんのわけもなく秘匿するとでも？ 言えないから、言つてしまえば取り返しのつかないことになるから言わなかったのだと、思いもしなかったんですか？」

「それは……」

バツが悪そうに視線を伏せるディアンヌ。いくら本人たちにその気が無かったとはいえ、次から気をつけてください、で済ませられる範疇を超えている。

その証拠に、メリオダスからは表情が失われ、湧き上がる様々な感情を歯を食い縛つて殺している。そんなメリオダスを見て、フロランスは泣きたくなるような激情に包まれた。

「フロランス、いい……もう、終わりだ。エリザベスが全ての記憶を取り戻せば……エリザベスは三日で死ぬ」

空気が、凍った。

メリオダスの口から伝えられた信じがたい一言は、団員たちの思考を凍てつかせるのには十分だった。

「エリザベス様が……三日で死ぬ!？」

「じよ、冗談はやめてよ团长……だって、そんな……」

「本当だ。……もう隠してする必要もなくなった。お前らに全部話す。オレの、3000年の旅の目的を」

下手に口を出しては事態を複雑にするだけと思ったのか、フロランスは顔を伏せて静観の態勢に入った。

「全ての始まりは3000年前だ。聖戦の最中、オレとエリザベスは冒した罪から奴らに罰を受けた。……魔神族でありながら女神族の手をとり、更には同胞を裏切り殺した罪。女神族でありながら魔神族と結ばれ、敵をも救った罪」

「ば、罰……? いったい、誰に?」

キングの当然の疑問に、メリオダスは滔々と答える。

魔神族を統べる者——魔神王。

女神族を束ねる者——最高神。

メリオダスとエリザベスはこの二柱の神に、ある呪いを受けた。

エリザベスには、死するたび生まれ変わり、必ずメリオダスと出会い、そして必ず恋に落ち——必ずメリオダスの前で命を落とす永劫の輪廻を。

メリオダスには、死すら許されぬ肉体となり、絶対的な力によって殺されてしまうエ

リザベスをただ見届けることしかできなくする、永遠の生を。

エリザベスは3000年の間記憶を失いながら転生を繰り返し、メリオダスは聖戦の終結から3000年を深い絶望の中過ごしてきた。

あまりにも悲惨で、悲痛で、無慈悲な行いだ。

メリオダスの話を聞いた団員たちは、表に出す感情の大小こそあれ、心中は皆同じだった。

二人に呪いをかけた神への強い怒りと、二人への深い同情だ。

「……3000年の間、107人のエリザベスと出会い、106人のエリザベスを看取った。何度繰り返しても、これだけは慣れねえな……」

「そんな……呪いを解くことはできないの……？」

「オレたちの呪いは神々にかけられたものだ。呪いを解くには、神々に匹敵する力がある」

「……何度も検証したのですが、ゼルドリスが魔神王から借り受けた魔力は所詮借り物で、呪いを解くほどの力は発揮できませんでした。やはり、魔神王か最高神、あるいはそれに伍するほどの力でなければ解呪は不可能かと思われます」

「そっか……それであるとき……」

宴会の前日にフロランスが言っていた意味がようやく理解できたのか、ディアンヌは

声を震わせる。

「ごめん……ごめんね……ボクのせいで……」

「……魔神王たちを倒さない限り、遅かれ早かれエリザベスは記憶を取り戻していたでしょう。今回はそれが少し早かっただけ。……こうなった以上は、悠長に構えることもできません」

「うん……っ」

「マーリン、行き先をキャメロットへ変更することは可能ですか？」

「可能だ……が、現在向かっているオーダンの村は魔神族の支配下にある可能性が極めて高い。それを無視してまで進むのは本意ではないだろう？」

「う……それはそうですが……」

「別に今すぐなにか起こるわけじゃねえ。進路はそのまま、オーダンの村を経由してコランドに向かって、ひずみの発生源を潰して全員でキャメロットに乗り込む。のんびりするつもりはねえが、焦りはなによりも禁物だからな」

「……分かりました」

不承不承といった様子で、フロランスは首を縦に振る。

今のブリタニアでは魔神族の影がない場所の方が少ないだろうが、手の届く範囲であれば見捨てる理由は無い。

「色々言いてえことはあると思う。けど、今は目の前の目的だけに集中しろ」
メリオダスの指示に、フロランスは大きく、そして強く返事をした。

第18話／進行、激突、そして

くだらない。

そう言えば、数多の同胞は揃って顔を顰めた。

愚かな。

そう言えば、数多の敵対者は殺意をむき出しにした。

どこへいっても反応は同じで、どの種族も止まることなく無益な闘争を繰り返していた。

悲劇と復讐しか生まない争い。

なんの意味がある、そう問いかけても返ってくるのは敵意のみ。

ああ——本当に、度し難い。

オーダンの村に到着して最初に目撃したのは、一匹の魔神族が子供をいたぶっている光景だった。魔力も無い、剣も持てないようなただの子供を相手に、本気で拳を振るっている。

魔神族は強力な種族だ。下級の個体であろうとも、その力はリオネス王国の平均的な聖騎士の数倍はある。最上位の魔神族ともなれば、国の一つや二つ簡単に破壊することができるだろう。

ギルザンダーやハウザーといった上位の聖騎士ならば下級の個体——赤色魔神程度は倒せるだろう。赤色魔神の一つ上、灰色魔神も力を合わせればなんとか倒せる領域にいる。

だが、なんの力も持たない平民たちには魔神族に立ち向かう術が無い。ましてや、訓練も積んでいない子供が。

何も変わらない同胞の前に、フロランスは表情を消して歩み寄る。

「ウヒョヒョ！ さつきまでの強気な態度はどうした？ 我らに歯向かうことの愚かさを教え——あがつ!？」

子供を甦ることに夢中になっている黄土色魔神はフロランスに気付いていないのか、手を止めようとしれない。フロランスはそんな黄土色魔神の心臓の一つに貫手を放ち、一瞬で破壊する。

血を吐いて倒れ込む黄土色魔神は、そこでようやくフロランスの存在を認識する。

下級の魔神にとつてはメリオダスやゼルドリス同様恐怖の対象だった人物を前にして、黄土色魔神は動揺を露わにした。

「フ、フフロランス様!? ど、どうしてこんな所に!? 何故、私の心臓を!」

「黙りなさい」

メリオダスのみならずフロランスまでもが魔神族を裏切ったことは末端の魔神たちには伝えられていないのか、状況を理解できていないようだった。それは側に控えている赤色魔神や灰色魔神、橙色魔神、緑色魔神も同様で、一様に震えながらフロランスを見ている。

「フロランス様、そいつ、我らを倒すなどと、世迷言を吐いた」
「——聞こえなかったのですか? 黙りなさいと言ったんです」

恐る恐る進言した灰色魔神の言葉を一刀両断し、ほんの僅かに闇の魔力を解放する。たつたそれだけで魔神たちは震え上がり、無意識のうちに服従の体勢をとってしまっていた。

村人たちの間で満ちていた恐怖はフロランスの一声によってあつという間に霧散したが、今度は魔神たちを一瞬で鎮圧したフロランスに対する畏怖が芽生えつつあった。

その空気を察したのか、フロランスは魔力を霧散させ柔らかく話しかけた。

「初めまして、私はフロランス。彼らは〈七つの大罪〉という聖騎士団です」

「せ、聖騎士様？ もしかして、ワシらを助けにきてくださったのですか？」

「ああ。魔神たちから民を守るのも、オレたちの役目だしな。それに」

ちらりとゴウセルを一瞥する。

自身の髪を腰ほどまで伸びた少し癖のある黒い髪に変えて、子供たちとなかを話している。その表情を見れば、あの子供たちがゴウセルの友人であると、すぐに理解できた。

「聖騎士様？」

「いや、なんでもねえ。とりあえず、アイツのおかげでここは暫くの間安全になるはずだ」

「ほ、本当ですか!？」

「〈十戒〉からすれば不定期に少量の魂しか供給されない上に、下手に手を出せばフロランスが行動を起こすかもしれないって考えると、リスクに対するリターンがあまりにも小せえしな」

「ありがとうございます……聖騎士様……！ この御恩はいつか必ず……！」
「いいって。それに、やったのはオレじゃなくてフロランスだ。礼をするならそっちにしてくれ」

苦笑いしつつフロランスを指差すメリオダスに、村の長は頷いてフロランスに向き直った。

既にフロランスの周りは多数の村人で溢れていて、慣れない英雄扱いに戸惑っているようだ。〈七つの大罪〉に視線で助けを求めると、フロランスの反応を楽しんでいるのか応えるものはいなかった。

(う、恨みますよ……！)

迷惑です、と声にだして言えるわけもなく、フロランスは身動きが取れないまま数十分の間感謝を受け取り続けるのだった。



「——さて、ではここでやることはもうないでしょう」

こほん、と気持ちを切り替えるための咳払いを一つ。

村人たちは総出で英雄たちを送り出すため、一人も欠けることなく集合していた。

フロランスは、それを大袈裟だとは思わない。

魔神族という人間よりも遙かに強大で凶悪な怪物を撃退したということは、裏を返せばフロランスたちがいなければ村が滅んでいたということなのだから。

「そうだな。さあ、コランドへ急ぐぞ」

メリオダスが主導でホークママに命令を出し、村を後にする。

「また来てくだされー！ 英雄様ー！」

「またなー！ 絶対、また来いよー！」

村長とゴウセルの友人の一人——ペリオが、小さくなつていく背中に叫ぶ。

微かに、しかし確かに耳に届いたその言葉に、フロランスたちは優しく頷いた。



「着いたぞ……城塞都市コランドだ」

オーダンの村からコランドまでは決して長い道のりではなかったが、空気が重かったせいか本来の何倍もの時間がかかったような錯覚があった。

コランドを見渡す。

当然だが人などいるはずもなく、ただ荒れ果てた街の様相のみが見える。

「さてさてさーて、さっさと次元のひずみを解除してキャメロットに乗り込むぞ」

「迅速に片付けてみせましょう」

「……あんまり気張るなよ？」

「はい。分かっています。焦りはなによりも禁物、ですよね」

「そういうこと」

よし、と意気込むフロランスの背後でエスカノールがなにかに気づいたのか、コラントへ続く橋を指差す。

「あの、団長……橋の上に誰か……」

小さな、子供ほどの人影。

それが何者か、なんて疑問は一瞬で晴れた。

「ここへ来たのはエリザベスのためか？　ということはまだ生きているらしいな……どこまでもしぶとい女だ……」

メリオダスに瓜二つの容姿と声。

腰に佩いた剣。後方に撫でつけられた黒い髪。そして憎悪に塗れた常闇のごとき黒瞳。

その全てに見覚えがあり——同時に、堪えようのない怒りがあつた。

「兄様——！」

静止する暇もなく、メリオダスは本気でホークママの背中を蹴って飛び出し——容赦なく、魔神の力すら解放し、全力で神器を薙いだ。

その威力は、余波だけで大爆発を想起させるほどの破壊を巻き起こし、瓦礫を津波のように散らした。

「まずい！ 飛散した瓦礫がカメラロットの方に……！」

「安心しろ、問題はない」

マーリンの言葉に疑問を覚えるキングだが、すぐに納得した。

なにもない空間に呑み込まれるようにして瓦礫が消滅したためだ。

「あれこそがカメラロットを覆う絶対的な壁、次元のひずみだ。結果的とはいえ、次元のひずみの強度と位置を確認できた。ふむ……」

感心したように吐息を漏らすマーリンとは対照的に、フロランスは焦りを露わにした。

「兄様！ 早くその場から離れてください！ メラスキュラの手が！」

「——ッ！」

警告は一步遅く。

メリオダスは、メラスキュラのものであろう闇に包まれ、姿を消してしまった。

「くっ——」

「クソが！」

「団長がさらわれた!? ど、どうしよう!」

「……いえ、きつと大丈夫でしょう。兄様の魔力は街の中心部から感じます」

「それほど離れてはない……つてだけなら良かったんだけど……」

フロランスの言葉に安心したのも束の間、周囲に散らばっていた人骨が一人で動き出し、それぞれのパーツが継ぎ合わされる。

頭、胴、腕、足——数えきれないほどの骨たちはあつという間に人の形を成し、その場は無数の骸骨によって埋め尽くされた。

「おいおいおいおい! なんだよこれー! まさかこれ全部、虐殺された街の奴らじゃねーのか!」

「ホーク、下がっててください。彼らはメラスキュラの”怨反魂の法”によって蘇った死霊……なにかが仕込まれていてもおかしくありません」

油断なく神器を握り締め、空いた手に魔力を込める。

——しかし。

「今更んな雑魚で俺らを足止めできつと思ってるのか?」

バンが怒り心頭といった様子で骸骨の顔を殴り飛ばし、粉々に砕く。耐久性は普通の骸骨となんら変わらないのか、へ七つの大罪とフロランスは微塵も阻まれることなく

骸骨を殲滅していく。

「行くぞてめえら☒ さっさとひずみをぶっ壊して団ちよをかつさろうぞ!」

「言われなくとも!」

殴り壊し、切り刻み、押し潰す。

考え得る限りの暴力を骸骨へ向けて、”怨反魂の法”すら意味をなさないほど徹底的に破壊する。

「一気に燃やします! 避難してください!」

フロランスの発した声が鼓膜を震わせるのとほぼ同時に全員がその場から飛び退き――直後、怨念を押し流す獄炎の奔流が骸骨を呑み干した。

一度着火すれば骨すら残らない獄炎は、たしかに全ての骸骨を燃やし尽くした……か
に思われたが。

「あん? なんだありや☒ あの馬鹿げた威力の炎喰らって、一匹だけ無傷でいやがるぞ☒」

「私を退かせるとは実におこがましいですが……余計な手間が省けたことに免じて不問にしてあげましょう」

「ね、ねえ……なんかあの骸骨、だんだん纏う魔力が強力になってない?」

「……興味深いな」

そう眩いたマーリンが人差し指を骸骨へ向け、魔力の玉を発射する。

直径10cmほどのそれは岩を砕くほどの威力を秘めていたはずが、容易く払われてしまった。

「なるほど……急激にパワーが上がったようですね。そして供給源は街の中心部から迸る負の力……すなわち兄様の力。通りで尋常ではないはずです」

「それに加え、魔力への耐性も遥かに上昇している。どうかサンプルにできないものか」

「いやいやいや、流石にそれは無理でしょう」

「言ってみただけだ。本気ではない」

「……目が本気でしたが」

「気のせいだ」

胡散臭いものを見るような目でマーリンに視線を送るが、当人はどこ吹く風といった様子だ。

「まあ、たしかに、ただの人骨にしては目を見張るものがありますが——」

ちら、と骸骨を一瞥し、呆れたように肩を竦める。

「所詮、その土台はただの人間」

骸骨を通して戦況を観察しているであろうメラスキュラに対して、フロランスは嘲り

を含んだ笑みを浮かべる。

「その程度で、兄様の力に耐えられるわけがないでしょう」

フロランスの言う通り、許容ギリギリまで力を詰め込まれた骸骨はミシミシと音を立て——呆気なく砕け散った。

「次期魔神王とまで言われた兄様を、舐めすぎですよ」

フロランスからすれば当然の、あくびが出るような結末。言うなれば、悪趣味な人形劇に等しいものだった。

そしてメリオダスの元へ向かおうと一歩踏み出した瞬間——呪いにすら匹敵する膨大な怨念が頬を撫でた。無論、今まで数え切れないほどの憎悪や怨みを受けてきたフロランスだ。これといった影響も障害も無いが、へ七つの大罪は、はそうも行かなかった。

「全員、意識を強く保て！ 乗っ取られるぞ！」

「くっ……！ これは……ディアンヌ、大丈夫!？」

最愛の少女を案じてキングが振り返る。

そこには『大丈夫だよ』と力強く頷くディアンヌの姿は無く——

「えへへ。ねえみんな——殺してもいい？」

殺気を振り撒く、怨念に吞まれた少女がいた。

「そ、んな……」

ディアンヌを責める者は誰もいない。

最早怨念の領域を通り越えて呪詛とでも言うべき存在に昇華している彼らを受け入れるのに、ディアンヌという少女ではあまりにも小さかった。

「ディアンヌ！ 呑まれちゃダメだ！ 帰ってきてー！」

「あははあ。みーんな、殺すよー？」

唸りを上げて、ディアンヌの神器——戦槌ギデオンが空間を叩く。しかしそれは攻撃的なものではなく、むしろ舞踏のような——

「はあああ……！」

”ドロールの舞い”

ディアンヌが巨人の王ドロールより受け継いだ技。流麗かつ雄大な動きは自身を大地と同調させ、更なる力を引き出す。踊れば踊るほど、舞えば舞うほど、ディアンヌの闘級は上昇し続けていく。

「どうやら、ただの催眠や譫妄状態とは違うようだ」

「あれはメラスキュラの魔力じゃない……虐殺されたコランドの人たちの怨念が取り憑いているみたいなんだ」

「なるほどな……厄介なことをしてくれる」

「んなもん、どうやって倒すんだ？」

「……分からない。でも、どうにかしなくちゃ!」

「単純な幻覚や催眠程度ならばいくらでもやりようはある。しかし相手が相手だ。積りに積もった怨み辛みを全て晴らさない限り、ディアンヌが解放されることはないだろう。」

「一体どうやって? 彼らが怨みを向けている相手がまだこの世に存在しているかすら疑わしい……それに、仮に仇を打ったとして、彼らが大人しく成仏するとは思えません……けど!」

その巨体からは想像もつかない速度で無造作に振り払われた神器を弾きながら、フロランスが苦言を呈する。

「怨念たちがディアンヌに取り憑く前ならば有無を言わず焼き払うこともできたが、こうなってしまうてはどうしようもない。」

中途半端に手加減をして誰かが脱落するか、加減を間違えて殺害してしまうか。どちらにせよ最悪の事態は免れない。

「多少、痛いですよ……!」

けれど、なにもしないよりはマシかとフロランスが攻撃を仕掛けようとした直後、キングがディアンヌの前に立ちはだかった。

「待つて! ディアンヌを傷つけても、彼女に取り憑いた怨念は倒せやしない!」

「では、このまま黙ってディアンヌが暴れるのを見ていろと？」

「そうじゃなくて！……ディアンヌ！ 怨念なんか呑まれちゃダメだ！ キミの心はもつと強いはずだろ!？」

「闘級……4万8000!? キング！ 離れて！」

「ツキング！」

必死の説得も虚しく——剛脚がキングを捉える。

抵抗する間もなくキングの小さな体は吹き飛ばされ、瓦礫の山に叩きつけられた。

慌ててゴウセルがキングに駆け寄る。

「出血が少ない……兜が上手く直撃を防いでくれたみたいだ」

「不幸中の幸いと言うべきですが……今の一撃、完全に殺す気でしたよ。結果的に助かったとはいえ、手加減している余裕は無いのでは？」

気絶するキングを一瞥し、ディアンヌに視線を戻す。

悪意と殺意と憎悪に浸食された瞳から血の涙を流す様相は、魔神族であるフロランスから見ても悍しいものだった。

「アハハ♡」

「やれやれ……多少の荒療治は必要そうですね」

悦に浸るように笑うディアンヌの腹に、エスカノールが容赦なく拳を叩きつける。人

が鉄を殴ったとは思えないほど重厚な音が響き、あまりの威力に鎧が剥げる。それでも加減はしていたのか、痣一つできていなかった。

「くふ……」

「女性であることに免じて、顔だけは避けてあげましょう」

余裕の表情でそう言ったエスカノールを、ディアンヌは逆に殴り返した。あまりダメージが無いのか、動きは微塵も鈍っていない。

「なんと剛気な……この私の好意を無視するとは。では是非、気の済むまで拳で語り合いましよう」

「待ってくれエスカノール、キングの言う通りだ。ディアンヌを傷つける必要はない」

ゴウセルは両手に魔力を纏わせ、ディアンヌに照準を合わせる。

「俺が助ける」

「では念のため、動きを封じておきましょう」

インベイジョン
『侵入』

シャドウ・リストレイント
”影の拘束”

フロランスの魔力がディアンヌの肢体を絡め取り、ゴウセルが魔力を用いてディアンヌの意識へ侵入する。

いっその不気味なほどの静寂が訪れ、皆固唾を飲んでゴウセルとディアンヌを注視す

る。

どれだけ時間が経ったか。

二人の指先がピクリと動き、ディアンヌの発する殺意に衰えが無いことを一早く察したフロランスは、拘束を解いて二人の間に割り込んだ。

「アハハ——アレ？」

「怨霊程度がいつまでも……調子に乗りすぎですよ」

瞬間、フロランスの纏う空気が絶対零度へ変化した。

本能的に危機を察知したディアンヌはギデオンを引き、再び全力で振り抜いたが——フロランスは魔神の力を解放し片手で防いでみせた。

己よりも遥かに矮小な少女に全力を受け止められたという事実には、ディアンヌの喉が引きつる。

「ひ——」

目が合った。

言葉にすればたったそれだけのこと。

たったそれだけのことで、ディアンヌは無意識のうちに距離を取っていた。

たったそれだけのことで、ディアンヌはギデオンの柄を力いっぱい握り締めていた。

呪いにも匹敵する怨霊たちが今、フロランスを明確に恐れていた。

深淵のような瞳に。

闇よりも暗い闇に。

全身から発する冷たい殺気に。

小動物のように怯えていた。

「仲間の体を使って、安全圏から嘲笑う……」

その眩きが耳に届いたときには、デイアンヌの視界は真横に倒れていた。

「——え？」

足払いをかけられたと気づいたのは、その数瞬後。

そして気付くと同時に、デイアンヌの眼前に剣が突き立てられる。漆黒の刀身を携えたそれを視認して、背筋に悪寒が走った。

「いつまで寄生しているつもりですか？ それとも、跡形も残らずこの世から消えるのがお望みで？」

にこり、と。フロランスは笑った。

花のように綺麗で、儂い笑顔だ。

その裏に潜む強烈な殺意さえ無ければ見惚れていただろう笑顔を見て、怨霊たちは――

「——ッッ！」

慌てて、我先にとディアンヌの肉体から脱出していく。

「元はと言えば、あなたたちも被害者であることには変わりません。ですが少々、おいたが過ぎましたね」

獄炎渦巻く手のひらを、宙に舞う怨霊たちへ向ける。

地獄の具現かのような光景に震え上がる怨霊たちを獄炎が呑み込む寸前、親しみすら覚える燐光が現れ――

「もう、それ以上傷つける必要も、傷つく必要も無いわ」

”光あれ”

聖なる光が、怨霊たちを浄化した。

「エリ……ザバス……？」

震える声のまま振り向けば――そこにはかつての全てを取り戻した、呪われし女神が立っていた。

第19話／太陽 v s 深淵

「エリザベス……体は大丈夫なんですか？」

「ええ、もう平気よ。それに、みんなが頑張ってるのに私だけいつまでも寝てるわけにはいかないもの」

心配そうに顔を覗き込むフロランスを、心配はいらないと言つて優しく撫でる。割れ物を扱うような繊細な手付きに、フロランスは目を細めた。

「そう、ですか。それは良かったです……でも、私はもう子供ではないので、頭を撫でるのはその……」

「あつ、ごめんさい。つい……」

フロランスの頭から手を離し、困ったように頬を搔く。

「……ディアンヌが心配で出てきたけど、私の出番は無かったようね」

「エレイン、あまり無茶をしては駄目ですよ。あなたは病人なんですから」

「分かつてるわ。でも、友達を見殺しになんてできないもの。なにもできなかったとしても、私はきつとここに立っていた」

優しく、しかし固い決意を感じさせる声色でそう言ったエレイン。体が弱つていようとも、力を十全に發揮できなくとも、彼女がディアンヌの友である限りどんな状況でも同じことを言うだろう。

何物にも代え難い友情。それを目の前にして、フロランスは反論する気概を失った。その過程で命を落としたとしても、エレインはきつと後悔しないのだろう。

「その頑固さ、キングにそっくりです」

「うふふ、褒め言葉として受け取っておくわ」

凡そ戦場には似つかわしくない雰囲気。穏やかな会話は、突如現れた殺気によつて中断された。

「——忌々しい」

それは、蛇だった。

強大で、巨大な、禍々しい大蛇。

血のように真つ赤な瞳は獲物を捉え、口から覗く鋭い牙は獲物を容易く貫くだろう。その身から迸る魔力は、そのまま大蛇の力量を表していた。

「我らに齒向かうへ七つの大罪」。メリオダスの心を奪い、操り、寝返らせた怨敵エリザベス。魔神族を裏切ったフロランス……あら、仮初の命をあげた半死の妖精の小娘まで一緒じゃない」

人の頭ほどの大きさの瞳をギョロリと巡らせ、目の前に立つ不屈きものを睥睨する。

「——魔神王様に代わって、この『信仰』のメラスキュラが、汝らに罰を与える！」



『初めまして。本日より〈十戒〉の補佐を務めることになりました、フロランスと申します』

無口で無愛想な子供。

それが、メラスキュラのフロランスに対する第一印象だった。なにを考えているのか分からない、感情を伺わせない黒瞳。三桁にも達していない年齢とは裏腹の超然とした佇まい。

——気に入らない。

苦勞して手に入れた〈十戒〉の地位。そこに近づいてきた厄介者。なんの勞力も要せず、生まれだけで決まっているも同然の未來の〈十戒〉。それが『信仰』なのか、はたまた残る9つのどれかなのか定かではないが、自身の地位を脅かしかねない存在を前に、メラスキュラは顔をしかめた。

『あら、可愛げのない娘。〈十戒〉私たちの補佐っていう大役を任せられているんだから、もう少し喜んだらどう?』

嫉妬と羨望を込めた、ほんの少しの意地悪。

『あなたは……メラスキュラですね。魔神族ではないものの、その功績と実力を認められて『信仰』の戒禁を与えられた者。師からそう伝えられました』

『へえ、中々分かつてるみたいじゃない』

『しかし、その経歴故か傲慢で、相手の力量を見誤り油断する傾向がある。その精神性が〈十戒〉に相応しいものになるにはまだ時間がかかるだろう、とのことだ』

『……ふくん、そう。あなた、口下手でしょう? 死にたいなら素直にそう言ってくれたら良いのに♡』

フロランスのあまりにも明け透けな物言いに、青筋を浮かべて殺意を剥き出しにする。メリオダスならばまだしも、己よりも未熟で幼い少女に欠点を指摘されたメラスキュラは、端的に言つてキレていた。

『……なるほど、たしかにアンドレイの言っていた通りです。その調子では、格下の女神族にすら遅れを取りそうですね』

『——殺す』

『ば、馬鹿な……！ この私が、魔神王様選ばれた私が——』

『ほら、油断したでしょう？ 私を無力な少女だと思い込んで甚振ろうとした結果です。もし私が初めから殺す気なら、もう死んでますよ？』

——気に入らない。気に入らない。気に入らない！



「フロランス、昔からあなたのことは気に食わなかったの。あなたのことを思い浮かべる度に、どうやって殺してあげようか悩んじゃうくらいにね」

「それはそれは、とても光栄なことですね。まさかあの『信仰』のメラスキュラに想われるとは」

「くっ！　そういうところが気に食わないのよ！　真っ先に喰い殺してあげようと思っただけど、気が変わったわ」

「ほう」

余裕のある返事をするフロランスに苛立ちを覚えながら、メラスキュラは大口を開け、身体をしならせる。

標的はフロランス——ではなく、フォックス・シン〈強欲の罪〉のバンだった。

「お仲間を一人一人丁寧に殺して、絶望したところを食べてあげる。バン、まずはあなたからよ。あなたのせいで心臓を6つも潰されるわ、顎の噛み合わせも悪くなるわで超最悪！　そのお礼に、あなたは私の胃袋で一生飼ってあげる。溶けては再生し、また溶けては再生する生き地獄を味わいなさい。不死であることを後悔させてあげるわ！　そしてフロランス、そこで見ていなさい。この男が手も足も出ずに溶かされる様子をね！」

民家数軒ほどもある巨軀に見合わない素早さで瞬く間に距離を詰め、鋭い牙でバンを

捕らえる。

「ぐっ……………！ オオ……………！」

「あら、中々抵抗するじゃない。でも無く駄。あなた程度じゃどうしようも無いわよ」

「くそっ……………！」

メラスキュラの咬合力とバンの腕力では、メラスキュラに軍配があがる。元々魔界という険しい環境で生まれ育ったメラスキュラの牙は、そう容易く脱せるものではない。バンも必死に抵抗しているが、徐々に閉じてきている。このままでは宣言通り胃袋に送られ、ドロドロに溶かされる未来が待っている。

しかし、そこに飛び込んでいく人影が一つ。

「バン——！」

「エレ、イン……………やめろ……………！」

「嫌！ 私だつて守りたいの！ 守られてばかりじゃ、頼つてばかりじゃ、駄目なの！」

「エレイン……………」

「もう、鬱陶しいわね！ あなたの魔力なんて蚊ほども効かないのよ！」

「うあつ！」

風を操りバンを奪還せんと攻撃するエレインの体を、鞭のような尻尾が打った。踏ん張ることもできずに吹き飛ばされるが、それでも諦めずに風を放つ。

「私だって、戦える！ バンの隣に立てる！ だから、絶対に助ける——！」
「だから言ってるじゃない。あなたじゃ無、理——は？」

一瞬。

花の香りを乗せた風が吹いたかと思えば、バンはメラスキュラの牙から解放され、エレインの隣にいた。

想定外の出来事に、メラスキュラは啞然とする。

「キング……あの姿……！」

「う、うん……」

「愛する人を想う気持ち、力へと姿を変えたのよ。キレイだわ……」

エレインの背には、羽があった。

その心を示すかのように淡く輝く、エレイン自身を表すような美しく大きな羽だった。

「エレイン……バカヤロウ。お前はいつだって俺の救いなんだよ。……ありがとな」

ふわりと、バンはエレインを抱きしめる。

「小生意気な小娘が、よくも私の獲物を……！ こうなったら一人一人なんてどうでもいいわ、皆殺しよ！」

「もう終わりですか？ あなたの与える絶望とやらは」

「フロラ——ぎやぶ。」

「ブラック・パイル 黒 杭 ”——では、私の番ですね」

メラスキュラの口が、漆黒の杭によつて地面に縫い付けられた。言葉を紡ぐことも、痛みに声をあげることもできない。ならばと体の構造を利用し、尾をしならせ頭の横に立つフロランスを攻撃しようとするが。

「そうくることも想定済みです」

口と同じように杭で縫い付けられ、残された唯一の武器すらも封じられた。

「んんっ……………」

声にならない声をあげ、瞳が恐怖に染まる。

たった数秒で生殺与奪の権利を握られ、反撃の余地も無くなってしまった。

「…………ふむ？ もう少し抵抗するかと思つたのですが、随分と大人しいですね」

「よ、容赦ないね…………まるで処刑だ…………」

「怖いよフロランス…………」

「何を言いますか。これでもまだ足りないくらいですよ。なんせ相手は、魔神王に選ばれた精鋭なのですから。生半可な手段では通じません」

甘い、と反論し、それでもなお足りないと言う。

比較的耐久力の低いメラスキュラだからこそこの状況が成立しているのであって、他

の〈十戒〉ではこうもいかない。

「真正面からのみではダメです。特にこれからの戦いは搦め手や小技も存分に使わなければ」

「うん……肝に銘じておくよ……」

「さて、ではメラスキュラにトドメを——っ!？」

そうしてメラスキュラの命を絶とうとした瞬間、街の中心で闇が爆ぜた。嵐のように荒れ狂う負の魔力は、それだけで本能的な恐怖を引き出すに足るものだった。

その波動に、フロランスたちは見覚えがあった。

「っ、これは!？」

「間違いない、团长殿によるものだ」

「まさか……!？」

（まさか……闇の魔力を……？　だとしたら今の兄様を止める術は——）

「——来るぞ!？」

「我が意志に応えよ、神斧リツタ」

鋭く声を飛ばすマーリンに追従するように、神器を手元に呼び出すエスカノール。

闘気と魔力を迸らせるエスカノールを、しかしフロランスは顔色を変えて引き留めようとする。

「エスカノール！　今の兄様はあなたの手にすら余る存在です！　下手に手を出せば間違ひなく殺されますよ！」

「要らぬ心配です。それに、私は子守が得意でしてね……これは実にあやし甲斐がありました」

淀みない足取りでメリオダスの眼前に立つエスカノールに、フロランスは歯噛みした。

「フロランス……何か知っているのかい？　あれは……団長にいつたい何が起きたんだ？」

「私もこの目で見るのは二度目です……あれは、〈十戒〉ですら恐れた”殲滅状態”アサルトモード。か

つて私はああなった兄様を止めようとして、手も足も出ずに殺されかけたことがあります」

「なっ!？」

今のメリオダスは、キングたちの知る〈十戒〉よりも強いフロランスよりも遥かに強いという。

絶望的なまでの戦力差。しかし、それでもエスカノールは悠々とメリオダスを見下し、佇んでいる。

「興味深い変化です。どうやらいつもの団長とはまるで異なる様子……私の言葉は通じ

ていますか？」

「黙れ。下賤な人間がおこがましい。オレはメリオダス。〈十戒〉の統率者」
「おこがましい」

遍く全てを照らす太陽と、遍く全てを呑み込む闇。

方や人間、方や魔神。

方や光、方や闇。

生まれも、育ちも、能力も、なにもかも違う二人。

それでも共通している思いがあった。

それは――

「人間」ときがオレを見下したこと、後悔させてやろう」

「魔神」ときがこのエスカノール様の前に立ったことを、地獄の底で後悔させてあげま

しよう」

目の前に立つ愚かな男を、完膚なきまでに屈服させてやろう、ということ。

「——すぐに殺してやるよ」

空間が歪んで見えるほどの殺気を真正面から受けて、それでもなおエスカノールは余裕を崩さない。

殺気が膨らんで、膨らんで、膨らんで——臨界点に達した瞬間、遂に太陽と闇が衝突した。

第20話／兄妹喧嘩

大気を引き裂く快音を立てて、エスカノールの拳がメリオダスに迫る。魔力ばかりに注目されがちだが、エスカノールの本分は武器や拳を用いる近接戦である。〈十戒〉の一人、『慈愛』のエスタロツサに膝をつかせたその拳撃の威力は計り知れない。

「むうんっ！」

——だからこそ、誰もが目を疑った。

「なっ、あ——」

「そんな……片手で止めた……!?!」

〈十戒〉にすら通用するその一撃を、メリオダスは容易く防いでみせた。それも、大して力んだ様子もない片手で、だ。

メリオダスが邪悪に嗤う。

お前の攻撃など蚊ほども効かん、オレとお前の戦力差がよくわかったか、と言外に嘲

笑していた。

エスカノールはそれを見ても気を落とすことなく、むしろそう来なくてはつまらない、といった表情をしていた。

「なるほど……私を殺すと豪語するだけの力はあるようですね」

ゴキリ、と首を鳴らして、エスカノールは再び拳を握った。先程よりも強く、硬く、熱く。

腕を引き絞り、引き絞り、引き絞り——放たれる。その巨軀に見合わぬスピードで、鋭さで、真つ直ぐメリオダスへ突き進む。

「ふん……」

溜めに溜められた必殺の一撃を前にしても、メリオダスの余裕が崩れることはなかった。迫り来る拳を鼻で笑い、左足を下げ半身になることで避けた。

空振りした拳は宙を叩き、拳圧が^{パワフル}完璧なる立方体^{エクトキューブ}を激しく打った。

これにはエスカノールも瞠目する。

間違いなく全力で、殺す気で放った一撃。威力もスピードも、エスタロツサに向けたものとは比べ物にならないほどのそれを、容易く避けた。

悔っていたつもりはなかった。かつて己を一撃で沈めたときと同じ姿をしているメリオダスに対し、エスカノールは言動とは裏腹に最大級の警戒を向けている。だからこ

そ、先の二撃は正真正銘殺すつもりで打った。

攻撃後の僅かな硬直。普段ならば大した弱点にならない腹を、槍のごとき衝撃が穿つた。

懐に潜り込んだメリオダスが、思い切り蹴り上げたのだ。あまりの威力に、その巨軀が浮き上がる。

「っ……っ！」

腹に穴が空いたような錯覚に、エスカノールは顔を歪めた。

足が再び地を踏みしめる——よりも早く、エスカノールの顔面に肘鉄が突き刺さる。頬が爆ぜるような衝撃と共に、エスカノールの体が吹き飛ぶ。

「エスカノール……っ！」

「やはり無謀です！……いくら彼が太陽の力を宿していようと、このままでは正午を迎える前に——」

フロランスが言外に“完璧なる立方体”を解けとマーリンに詰め寄る。しかしマーリンの表情を見た瞬間に、その氣勢は衰えた。

「——分かっている。私とて口惜しいのだ。こうして仲間の危機を見ていることしかできない自分が腹立たしくてしょうがないほどに」

普段の様子からは想像もつかないほどに感情を表に出しているマーリンに、フロラン

スは思わず瞠目する。

何しろ普段が普段だ。目的のためならどんなことでも厭わず実行し、得られた結果に微笑を浮かべる倫理観の怪しい魔術士、という認識を持っていただけに、フロランスは己を恥じ入るしかなかった。

「……勝機があるとすれば、それは太陽が昇りきったとき。ならばせめて、残り数分——私が時間を稼ぎましょう」

「な——」

驚愕する間も与えず、マーリンの前からフロランスの姿が消える。”瞬間移動”だ。

一瞬の内にフロランスはメリオダスとエスカノールの間に割り込み、今まさにエスカノールの命を絶たんとしていた凶刃を防いでみせた。



——怖い。

只管に、そう思う。

魔神族の英雄。次期魔神王。最凶の魔神。

いくつもある呼び名を思い起こす。どれもこれも、かつての兄様の尋常ではない功績

に裏付けされたもので、自然と顔が強張る

目の前に立つ兄様は、凍えるような殺気を放ちながら私を見た。

たったそれだけで、汗が吹き出して呼吸が浅くなる。

私の身を硬直させているのは、間違いなく恐怖という感情だ。長い人生でそう何度も体験したことのない感情は、私の精神を削るのに十分だった。

「フロランス……そこを退け」

「いいえ、退きません。だって、兄様はエスカノールを殺すでしょう？」

「そうだな。それがどうした？」

「今の兄様は、正常ではありません。闇の魔力に吞まれてしまっている。ならば、それを止めるのも、私の役目です」

カラカラに乾いた口で、必死に言葉を紡ぐ。

怖い。今すぐ道を譲りたい。

でもそれは許されない。家族として、仲間として、兄様にこれ以上過ちを犯させるわけにはいかない。

だから、絶対、止めてみせる。

「はっ……」

息を吐くような笑いをこぼす兄様。そして、静かに私の目を見つめた。

兄様の瞳に込められた感情は怒りか、呆れか——それとも期待か。”アサルトモード殲滅状態”となつた兄様は蹂躪を至上の悦びとするが、それと同じくらい、対等な闘いも望んでいる。この場でその条件を満たせるのは、太陽の加護が本領を發揮する正午を迎えたエスカノールか、魔神の力を全て、本気で解放した私くらいなものだろう。魔力、という一点に絞るならエリザベスも候補に挙がるが——彼女をこんな危険な場所に呼べるはずもない。

「エスカノールを殺したいなら、私を殺してからです」

「ごほつ……私を庇うなど、あまりにも、おこがましい……！　今すぐ、立ち去りなさい……！」

「強がり招くのは破滅だけです。しばらく大人しくしててください」

神器を支えにして立ち上がろうとするエスカノールにそう声をかけて——首を刈らんと強襲する蹴りを、身を低くすることで避ける。

……一瞬、反応が遅れた。

カウンターを決めるくらいに余裕はあった。兄様はそれほど手加減していた。

これ以上兄様の前でエスカノールと会話を続けるのは危険だと判断して、”完璧なる立方体”の外へ転移させるためにエスカノールの体に触れて、”瞬間移動”を發動させる。その隙にいくらでも攻撃できたはずなのに、兄様は一連の行動をじつと静観してい

た。

視界の端で、エリザベスが慌ててエスカノールの治療をしているのが見える。エリザベスの魔力ならば死の一步手前であろうとも、生きている限り完璧に治してくれるだろう。心配はいらない。

故にそちらへの意識を完全に断ち切り、兄様に全ての意識を集中させる。一挙手一投足が必殺級で、武力も魔力も格段に劣っている。唯一優位を取れるとしたら、数多の魔法と魔力。

常に新しく、間を置かずに叩き込む。

対応して攻略される前に、必ず倒す。

額に熱がこもる感覚と共にそう決意した私の眼前に、兄様の神器の切先が迫っていた。真つ直ぐで、鋭い突き。

「——っ！」

間一髪。頭を逸らして回避する。

返す刀でもう一度。神器が袈裟懸けに迫る。

後ろへ大きく跳ぶ。これで一先ず神器の射程からは外れた。それと同時に、頬を生温かい液体が伝う。どうやら完全には避けれていなかったらしい。手の甲で乱雑にそれを拭って、地を蹴る。

景色が高速で流れていく中、ゆっくりになった視界の先で、兄様が迎撃のために神器を構えている姿が見えた。接触まであと僅か、という所で——”瞬間移動”を発動させ、兄様の背後に回り込む。

今の兄様は、闇の魔力が暴走し精神が逆行してしまっている状態。だから、私のこの技も知らないはず。けれど、仮に知っていたとしても間違いない一撃は加えられるという自信もあつた。

そう、思っていたのに。

ほう、という兄様の感心するような声が聞こえたかと思えば、私の右腕は真紅の螺旋を描きながら宙を舞っていた。

「くっ——！」

体の一部が切り離されるのは、これが初めてではない。足も腕も、首だつて切り落とされたことがある。それでもなお慣れない苦痛に喘ぎながら、私は即座に闇を用いて右腕をくつつける。傷こそ綺麗に治るが、痛みだけはどうにもならない不便さに思わず苦言を呈したくなる。

”墜ちる炎塊！”

魔力を引つ張り出し、炎に変換。形状を固定し、少し多量に魔力を注ぐ。やがて顕現した巨大な炎は轟、という音を立てて、兄様——ではなく、大地に炸裂した。”完璧な

る立方体フルカウスターの中を、砂塵が埋め尽くす。

兄様の魔力『全反撃』は、ほぼゼロの力で相手の魔力的攻撃を数倍にして跳ね返すというもの。見様見真似とはいえ私も『全反撃』を使えるため、その厄介さは骨身に染みている。

だからこそ、使わせないことが重要になる。

『全反撃』に限った話ではないけど、戦いの場ではどれだけ相手の行動を制限できるか、というのが鍵になる。例えば、相手が魔力主体の戦法なら徹底して近接戦で。武力主体の戦法なら徹底して遠距離戦で戦う、といった風に。

そして武力と魔力、両方が優れているならどうするか。

どちらも凌ぐのは容易ではない。対策、というほどのものではないが、とにかく噛み合わせないというのが重要になるはず。

兄様が近接を望めば遠距離で。兄様が遠距離を望めば近接で。常に戦いを自分のペースで展開しなければならぬ。

砂塵の揺らぎ。それは兄様の攻めを事前に知らせてくれる。それを視認すると同時に、ディアンヌの魔力『創造』で、大地に細工を施す。恐らく最初は、雑に振ったとしてもこの狭い空間故に避けづらく、最も命中率の高い横薙ぎの一閃。

「――！」

私の予想は的中したようで、砂煙に混じって神器の刀身が閃いたのが見えた。

辛うじて防ぐことはできるかもしれない。しかしそうするにはあまりにも遅く、かと言つて避けられるかと言われればノーと答えるしかない。だから私は後退も、避ける素振りも見せない。ただ自然体で佇むだけ。

兄様は疑問に思うはず。

だからと言つて攻撃を中断するという選択肢を選ぶはずもなく、予想通り兄様の力強い踏み込みによつて、僅かに地が揺れる。そして、私に向けて生命を刈り取る銀閃が描かれる——ことはなく。

「——なに!？」

兄様の動揺した声が耳朶を打つ。

クソ、と悪態をついてその場から飛び退く兄様。

私がしたことは簡単だ。

『創造』の魔力で私の周辺に簡易的な落とし穴を作った。それだけ。それだけで、兄様は体勢を崩して離脱せざるを得ない状況となった。

いくら兄様の武力が優れているとも、剣という明確に射程が存在する武器である以上、どうしてもある程度は相手に近づかなければならない。

兄様の実力を10、私の実力を5としよう。

間に大きな差こそあるものの、仕留めようと思つた場合生半な攻撃では倒すことはできない。精々が先ほどのように四肢を切り飛ばされる程度だろう。

つまり兄様は、私を倒すため——もしくは殺すために、それ相応の強さで踏み込んだはず。踏み込む力が強ければ強いほどその先の行動はより重厚さと破壊力を生む。しかし逆にその踏み込みで地が沈めば、その勢いの分だけ強く躓き、大きすぎる隙を生む。

小細工に過ぎない技術だが、きちんと効果はあつたらしい。

煩わしそうに顔を歪める兄様。

これぐらいは、許してください。

こうでもしなければ、私ごときでは兄様に一矢報いることもできない。小細工と搦め手、そして兄様の手心。それらがあつて、私は初めて対等に戦えるのだ。

此方を睨み付ける兄様に手を翳し、闇の魔力を顕現させる。

「蠢く大蛇」

私から漏れ出た闇が巨大な蛇を象り、一斉に兄様へ殺到する。一匹一匹が上位魔神すら拘束できる代物を、合計で十匹。普通ならばこの時点で勝負は決したも同然のはずが、兄様は煩わしげに神器を振るつて十匹の大蛇全てを切り捨てた。

「デッドリー・レイン」

続けて、手のひらから出現した拳大の闇の球体を空中に打ち上げる。見た目は小さ

な、威圧にすらならない矮小な球体。しかしそれが秘めた密度は凄まじく、小さな街程度なら容易く消し飛ばすことができるほど。

けれど、これの真価はここから。

「……………」

兄様は球体の危険性には既に気が付いている。それでも手を出してこないのは余裕か、それとも警戒か。

その答えを、私を知るのは永遠に無かった。

球体が、勢いよく破裂する。

破裂、とは言つても、指向性を与えられた闇たちは全て兄様に向かっている。視界が真っ黒に染まるほどの物量と、それらに備わる膨大な質量を前に、兄様は初めて顔色を変えた。

「——呑め」

世界から音が消えたと錯覚するほどの轟音が鼓膜を揺さぶる。

私が見えるものの中で特に殺傷力に特化した技。並みの相手なら肉片すら残さずに闇に吞まれて消える。例えば仕留められなかったとしても、掠るだけで致命傷になり、傷口から闇が侵蝕するというおまけ付きだ。

未だに砂塵立ち込める兄様の周囲を睨むようにして見据える。ここで勝負を焦って

下手に突つ込めば、却って不利な状況を招く。冷静に兄様の動きを予測し、それに先回りする形で封殺する。

自身の鼓動さえもうるさく感じるほどの緊張感。額から流れ落ちる汗が煩わしい。

かつてない集中力で砂塵の動きを観察し——銀色の光が瞬いたかと思うと、眼前に兄様の神器が回転しながら迫っていた。先ほどのような刺突ではなく、不意をつく投擲。戦場で武器を手放すはずがない、という先入観から、私はそれを避けることができなかった。

光に照らされて鈍く光る刀身が、なんの抵抗もなく私の肩を裂いて。

続いて飛来した兄様の手刀が、私の腹部を貫いた。



フロランスの口元から、一筋の血が流れ落ちる。

一拍遅れて、ごほ、と血を吐いて咳き込む。

その様子を遠巻きに見ていたエリザベスたちは戦慄する。手助けどころか、間に割つて入ることすら許されないほどの苛烈な戦闘。到底追いつけない次元だった。

フロランスが最後に放った技。あれは、メリオダスを除くこの場の全員を殺してもまだ有り余るほどの殺傷力を有していた。

だというのに、メリオダスの体に刻まれているのは数カ所の小さな抉られたような傷のみで、そのどれもが致命傷にも至らない程度の被害に収まっている。傷口に滞留するはずのフロランスの闇はメリオダスの闇に塗り潰され、全て消え去っていた。

度重なる初見殺しの魔法と技術。

たしかにそれはメリオダスを翻弄こそしたが、しかし倒すには至らなかった。純粹な力量不足——とは言っても、メリオダスの武力、魔力が異常なほど高次元にまとまっているため、相手が悪かったとしか言いようがない。

「ぐっ……げほっ……」

皮膚を裂き、臓物を掻き分け、貫かれ、腹の中に異物が侵入する感覚と痛みに顔を歪める。

なんとか引き抜こうとメリオダスの腕を掴むも、絶望的なまでの武力の差か、空間に固定されたかのようにピクリともしない。

そんなフロランスを見て、メリオダスは愉悦の笑みを浮かべる。

小細工や取るに足らない技もあつたが、概ね満足できる代物だった——少なからず楽しめた、という意図が込められた表情を見て、フロランスは悲観するでも絶望するでも

なく、薄く笑っていた。

そも——フロランスの目的はメリオダスを倒すことではなく、足止めすることだ。
数多の魔力も、災害級の魔法も。

太陽が昇り、世界の頂点に君臨するまでの時間稼ぎに過ぎない。

「後は……頼みましたよ——エスカノール」

「——っ!？」

背後から凄まじい熱気を感じ振り返ると同時。

灼熱の魔力を纏った巨拳が、メリオダスの体を打ち抜いた。